分析戀愛論

大槻憲二譯

精神分析學研究所

春陽堂

フロイド精神
分析學全集

分析戀愛論

大槻憲二譯

精神分析
學研究所

春陽堂版

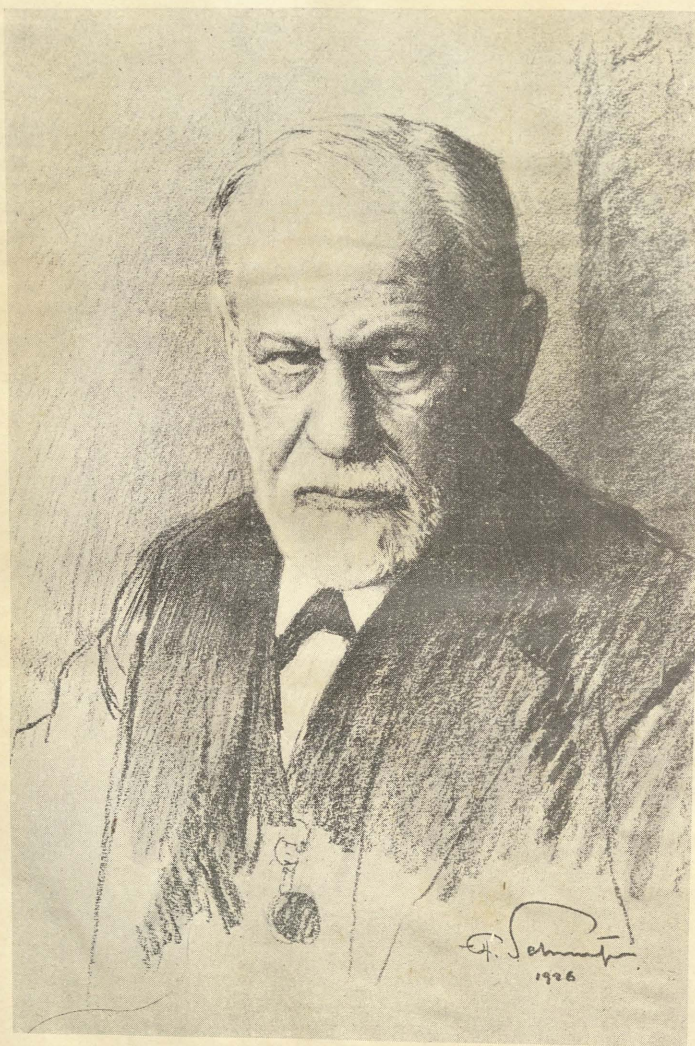
フロイド精神
分析學全集

分析戀愛論

大槻憲二譯

精神分析學研究所

春陽堂版

SIGM. FREUD
(1926)
Nach einer Zeichnung von Prof. Ferdinand Schmutzer

SIGM. FREUD
(1926)
Nach einer Zeichnung von Prof. Ferdinand Schmutzer

序文

本書は『フロイド精神分析學全集』の第九卷に當る。內に收められたるは何れも戀愛心理に關する重要なる論文のみで、目次の示す如く『戀愛生活の心理』以下十篇である。この內戀愛心理の本源を論じたるは『ナルチスムス概論』であり、その對象的顯現を論じたるは『戀愛生活の心理』であり、その社會的顯現を論じたるは『文明的性道德と近代の神經病』である。かく見做すことに依つてこれ等三論文には、云はゞ體系的關係と意義との存することが知られる。その他の諸篇は變態的、又は神經症的顯現を扱つたものであると云ふことが出來る。本書の全體と聯關して特に參考並讀すべき必要の多いのは『性說に關する三論文』(第五卷の內)及び『社會・宗敎・文明』(第三卷)であらう。

これ等の諸論を讀んで、痛切に思ひ當らぬ人は殆どないと信ずる。實際、現代の知識階級の主なる人々は、廚川白村の『戀愛至上說』に敎育せられたインテリ女性を始めとし、白樺一派の人道主義に育てられた中流有識階級、並びにその人道主義の脈を或る意味に於いて多く傳統してゐるインテリ・プロレタリアたちに至るまで、大抵はその戀愛態度に於いて至上主義であり純情主義である。併しそ

の至上純情の戀愛が如何に多くの病根から發してゐるかを知るに及んでは、我々は竦然として肌に粟の生ずる思ひをせざるを得ない。自ら戀愛するものも、子女を教育するものも、みな戀愛の機制の如何なる法則に支配されてゐるかを科學的に知つて掛らないと云ふ事は、實に無謀であり野蠻である。譯者、情熱を以て本書を公にする所以である。

こゝに二三の實話を擧げて、如何にフロイドの戀愛論の妥當にして適確であるかを證して見たいと思ふ。まづ『男子の對象選擇に於ける特殊の型』に論ぜられてゐるところに該當するものを擧げて見よう。

×

さき頃、朝日新聞の『女性相談』欄に誠によく似た二つの話が出てゐた。その大要をこゝに引用して見よう。

（A）　悲觀してゐる息子（昭和六年十一月十六日）

私は五十八歳、三人の男の子が御座います。長男は三十一歳、次男は廿六歳、三男は廿四歳。醫者であつた父は十三年前死去いたし、その後私はあらゆる犧牲になつて三人とも大學を卒業させました。長男が早稻田の理工科出で、卒業前から或る大會社へ勤める約束が出來てをりましたが、一寸した手

違ひから破約になり、今はその希望の道があくまでと云ふことにして或る會社に心ならずも勤めてをりますが、昨年あたりから連りにつまらぬ〳〵と云ひ出し、歸宅しても一言も口を利きません。そして『もつと樂しい生甲斐のある仕事がしたい。たとひ職工になつても勞働者になつてもやるだけの事をして見たいから、それには家を出たいからお母さんは弟達と暮して私を絶縁して下さい。今まで苦勞をかけてすまないが、許して下さい。』と云つて、さめ〴〵と泣くので御座います。私がいろ〳〵に申しなだめておきましたので嫌々ながら會社に勤めてをりますが、相變らずふさぎ込んでをりました所、この七月始め頃から土曜、日曜、月曜と三日位歸宅しないことがあるやうになりました。それでいろ〳〵調べて見ましたところ、私の甥の妻U子と關係したやうなふしがあるので御座います。U子は三十八歳で子供が五人ありましたが三人亡くなり、長男は中學の三年になつてをります。教育もありキリヤウもよろしく、然し虚榮心の强いハデ〳〵しい人で、これまでにも關係した男が二人あります。その度に甥(養子)は離縁して自分が家を出ると云つたのを、子供が可愛さうだからと私共が申して納めて置いたので御座います。

先日もせがれは三日ほど泊つて來た形跡が御座いますのです。せがれの不心得は申すまでもなく、よく意見をしようと思ひますが、私がそんな事を云ひ出したら（私は知らないと思つてゐます）せが

れは家出してしまふであらうと思はれます。年頃の弟達に兄の不しだらを知らせたくはないし、あれを思ひこれを案じて日夜心を痛め、夜分も碌々眠れぬ位です。……云々。（苦しむ母より）

言々切々として讀む者自ら、母の苦衷に涙なき能はずである。

また第二の話はかうである。

（B）　二人の息子に背かれて

私は二十八と二十二になる二人の息子の母です。夫に早く別れ女の手で兩人共專門教育を受けさせましたが、打續く農村不況の折柄、この八月田舎を引拂つて上京、息子の側へ參りました。何年ぶりかの親子水入らずの團らんを想像して勇んで參りました所、長男は人樣の妻女と戀に陷り、その婦人と一緒になれぬなら死ぬの生きるのと大騷ぎをしてゐます。よく樣子を聞けばその婦人の家では絕對に暇を出さぬ、どうしても出て行くなら殺して了ふと云つてゐるさうです。

長男の勤務先に知れてはと憂慮し、また妻をとられた家庭ではどんなに暗い氣持になつてゐることか想像出來ますので、いろ〳〵申して見ますが、併し長男の強氣にいつも默らされてしまひます。

次男の方は長男以上の厄介者でこの四月某專門學校を出て芽出度就職いたしましたが、二ケ月足らずでやめてしまひ、今の流行の危險思想とやらに感染し、時々直接行動とやらをやるさうで二三度警

察の厄介になりました。前途を考へると私は一體どうしたらいゝのでせうか。お教へを願ひます。(背かれた母)

×

これ等二つの場合を比較して見ると、幾多の共通點を發見するのは、誠に興味の深いことである。試みにそれを列擧して見よう。

一、父が早く居なくなつて母一人の手で育てられてゐること。

二、母が男まさりのしつかり者であること。

三、息子が自分より年長の、他人の妻女と關係を結んでゐること。

四、息子が現實社會では到底許されず、また終りを完うし得ないにきまつてゐることを、大眞面目にやらうとしてゐること。

これ等四つの共通點を發見し考究することに依り、我々精神分析の學徒にまで直ちに思ひ當ることは、これ等二人の青年が共に母への幼兒的定着の病根をその無意識に持つてゐて、それに依つて彼等がその行動を決定せられてゐると云ふことである。これ等二人の惱める母にまで甚だ氣の毒な、或は殘酷な話しであるかも知れないが、併し事實であれば仕方のないことだが、彼等二青年の不倫な行ひ

の原因は彼女等自身（母自身）にあるのである。もしさう云ひ放つことが許されるならば、彼女等は父親のない子をいとほしむの餘りに愛撫し過ぎたのである。（本全集第六卷の內『レオナルド・ダ・ヴィンチの幼兒期記憶』參照）そのために彼等青年は母の愛を滿喫し過ぎて食傷し、母代償となり得る如き年長の、他人の妻女でなければ、つまり母の代理となつて自分を愛撫してくれるやうな女でなければ滿足が出來なくなつたのである。人間の幼兒時代の印象と習癖とが如何に絕大な影響をその人の一生に及ぼすかを知悉するものは這般の消息を理解し得るであらう。

これからの新しい母は自分の息子を愛撫すると共に、息子が自分に定着的病根を持たないやうにと務めなければならない。息子が『母を卒業して』獨自の男として自ら妻を擇び得るやうな人間に造り上げてやらなければならないのである。母の代償としての妻を求めるやうな男は、生長したる赤ん坊（若き燕）に過ぎない。さう云ふ赤ん坊は必ず（或は多くの場合）吸血鬼（ヴアンパイア）型の女（例へばＵ子の如き）を求めるであらう。或はまた、小說に例を求めるならば、牧逸馬作るところの『この太陽』の蘭子の如き……。蘭子にとつての元雄と、只今の第一例のＵ子對長男の青年の場合と、如何に事情の似てゐることであらう。この青年が『この太陽』を讀んだならば、必ずや自分らをモデルにしてゐるやうに感じたことであらう。元雄型の青年よ、已れの內なる『赤ん坊』根性を清算せよ。それは自分を愛撫

してくれた母に叛くことを第一條件とする。母もまた自分の愛撫し來つた息子をして己れに叛逆せしめる寛大と勇氣とがなければならない。第一例の青年は母に向つて『家を出たいから、私を絶縁して下さい』と懇願してゐる。併しこれは母を克服しこれに叛逆しようとするものではないのだ。彼は母の代償に向つて見たが、本當を云へば母そのものに戀着してゐるのだ。彼は母そのものに叛いてその代償たるU子に走つたことに就いて罪障感を抱いてゐる。それ故にその罪障感の滿足を得んとして、自分の最も苦痛となる懲罰を己れの上に加へられんことを希ふてゐるのである。己れの最も苦痛とする懲罰とは何であるか、それは母の許を去ると云ふことである。赤ん坊にとつて母親に遠く離れ去られることの如何に苦痛であるかは、我々の過去に經驗し、また現在目前に屢々觀察するところである。生長せる赤ん坊に於いても、その苦痛の度合に於いては大差ないのである。

母の面影の如何に我々にまでなつかしく、戀の相手を選ぶに就いてもその深い動機と原因とになるかは、その證據を擧げるに遑がないほど夥いが、その一實例として次の場合を示すであらう。六年八月廿七日の朝日新聞に『亡き母の夢を追ふて少年大金を使ひ果す』と云ふ題下に次の記事が掲げてあつた。

『廿五日夜半、隅田公園にうろついてゐた一人の少年を日本堤署に保護した。この少年は市外西巢鴨

町白米商××方の小僧和田藤四郎（一六）（假名）で、本月上旬始めて奉公に出たが、母とは八歲の時に死別した。今度玉の井の魔窟に集金に行くと、とある一軒から年增の抱え女がお客にしようとして聲をかけた。その聲が幼い時から耳に殘つてゐる亡母の聲そのまゝであつたので、懷しさが急にこみ上げその日は主人方に戻つたが十六日再びこの方面に集金にやらるゝや集金八十圓を持つて先に呼ばれた女の家へ上り、亡母の幻に甘つたれてゐる內に、遂に廿四日までに百八十圓を全部費はせられてしまつた。……』云々と。（圈點は引用者の付するところ。）

なほこゝに注意すべきは、この少年が『亡き母の夢を追うて』ゐる點ばかりでなく、主人（父代償）の禁制を犯し、その許されざる金を使ひ果してゐると云ふ點である。惡いとは承知の上であつたことは今更主人の許にも父の許にも歸れず、淺草公園、隅田公園をうろついてゐた』事に依つて察知される。卽ち何等かの禁制を犯してゐる點（もつと露骨に云ふならば、犯したくて犯してゐる點）に於いては、この少年も前に擧げた二人の青年の場合も同じである。卽ち三者何れに於いても、その行動の背後には『父の有なるが故に禁制せられたる性對象としての母』が存在してゐる點に於いては變りはないのである。我々は一概にこの藤四郎少年の如きを不良少年として特殊な場合の如くに片付けてしまひたがるが、我々の內にやはりこの藤四郎式心理が普遍的に存在してゐる事は、正直に自己を反省

して見て肯ぜざるを得ないのである。然も、それが、意識するとせぬとを問はず、母の責任に歸せられなければならないのであるから、今後の母たる人は餘程細かい心使ひを要するわけである。

以上擧げた三つの實例に於いては、母はその息子の不倫の戀に就いて直接的責任はないが、云ひ換へて見れば、その息子たちを積極的に自分の許に牽留めておいて新しく近付き來るもの(嫁)を排斥するやうな形跡は全く見えないが、世には積極的に嫁を排斥しようとする姑の甚だ多いことは、私が今更云ふまでもない。その際、姑は嫁の缺點を數々擧げ立てることであるが、これ等の理由は實に末の末で、本當の動機は永らく自分の手中の玉であつた息子をあとから來て奪ひ去る嫁への反感と敵意と嫉妬である。

六年九月八日の都新聞の家庭欄に次のやうな相談が出て居た。

『廿四歳の女、六月に結婚したのです。五十歳になる姑は男勝りであり、氣が勝つてゐる人だと云ふことは豫て聽いてゐましたが、到頭この姑のために追出されてしまひました。密夫があつたの、米が餘計に要るの、何の彼の云ふのはまだしも、鼻と云々まで暴言するに言つては言語道斷であります。夫は三十歳で中等程度の教育もあるので何かと慰めてくれますが、母に對しては何も云へぬ性質です。私の父も兄も名譽にかけて飽迄抗爭するとて手配してをりますが、併し夫は親切で同情深いので、如

何に處置したものかと迷つてゐます。』（本郷、操）（圏點は引用者の附するところ。）

『母に對しては何も云へぬ性質』と云ふのは、その精神が赤ん坊時代のそれを卒業し切つてゐないことを意味する。私の知つてゐる或る青年はやはりこの夫のやうに、結婚してからも母の許を離れる事が出來ず、母が外出すると歸るまでは門に立つて待つてゐると云ふ有樣である。嫁が來ても、遂に姑のために難くせつけて追出されてしまつた。

一體、世のしつかり者の母達よ。あなた方は息子を可愛がるのは結構だが、彼等をこのやうな意氣地なしに育て上げて得意なのであらうか。いつまでも自分の許を離れ得ない息子は自分にとつて愛撫の對象として、大きな人形として適當かも知れねが、一人前の人格としては遂に社會の敗北者たらざるを得ないのである。敗北者たらざれば、不倫の戀に陷る精神的不具者となり果てるのである。世の多くの『氣が勝つてゐる母』達よ、あなた方は自分の教育の方針のあやまつてゐたことをさとらないであらうか。もし誤つてゐたことをさとるならば、今からでも遲くはない。息子等をして一人立ちの出來る『大人（おとな）』とならしめるやう、尻を叩いて家の外に出してやるのがよろしい。昔から云ふ『可愛い兒には旅をさせよ』とは、實はこの意味に外ならないのである。

かゝる意味の教育論としてはまた『子供の噓二つ』も是非參考せねばならぬ文献である。

その他の諸論文に就いて、日本的實例をいくらでも擧げることは出來るが、あまり序文が長くなるから、今はこれだけに止めておく。

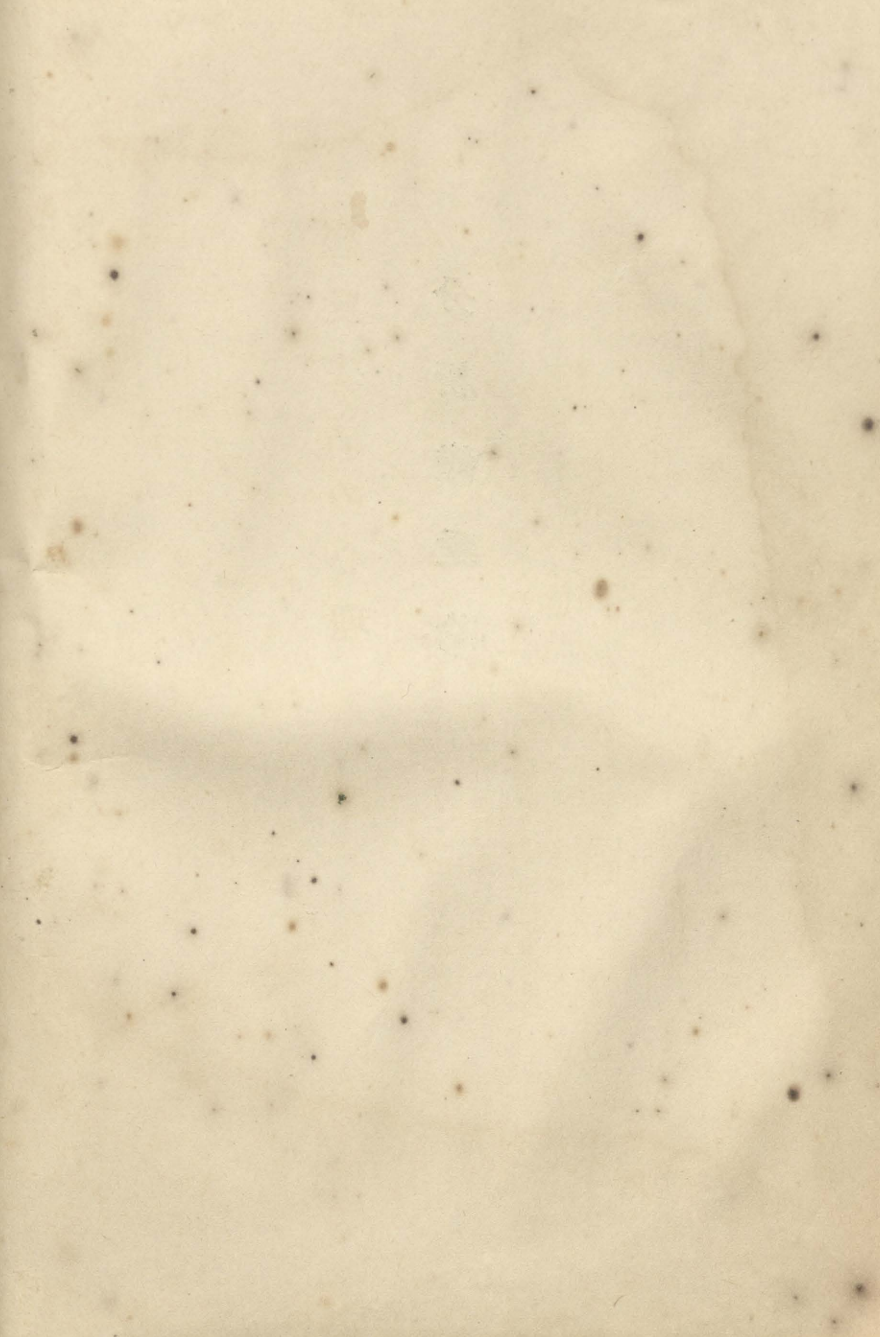
昭和七年四月春日

大槻憲二識

『分析戀愛論』目次

口繪　フロイド像(一九二六年、シュムッツァー教授筆)

分析戀愛論目次終

分析戀愛論

戀愛生活の心理

第一論文は始めて一九一〇年に『精神分析的並びに精神病理學的研究年報』第二卷に現れ、第二論文は一九一二年に同年報第四卷に現れ、後に第三論文ともも合せて『神經症學說小論集』に現在の題名の下に總括せらろ。總括題名の原語は Beiträge zur Psychologie des Liebeslebens.

第一論文

男子の對象選擇に於ける特殊の型

人間は如何なる『戀愛條件』に基いてその對象を選擇するか、またその空想の要望と現實とを如何にして調停するかを描き出して見ることは、從來我々は專ら詩人等にこれを一任してゐたのである。詩人等はそのやうな問題を解決し得るやうな多くの性能を有してゐる。殊に他人の匿れたる心の動きを觀取する能力や、自分自身の無意識を明るみへ引出す勇氣を具へてゐる。併し彼等の報道の認識的價値は或る一點に於いて引下げられねばならぬ。詩人は知的及び美的快樂、並びに一定の感情的効果を目ざゝねばならないと云ふ條件に束縛されてゐる。またそれ故に彼等は現實の材料をありのまゝに表現することが出來なくて、それの各部を分離させ、邪魔になるやうな事情は解消させ、全體に手加減を加へ、足らざるところを補ふと云ふやうなことをしなければならない。これが所謂『詩人的自由』の特權である。また彼等は戀愛對象選擇の心理狀態の由來並びに發展に對してはあまり興味を示すことが出來ない。たゞそれ等の心理を出來上つたまゝに書くのである。そこで科學は甚だ殺風景なやり

方で、結果が快樂を供するかどうかと云ふやうなことには頓着しないで、詩人が數千年來これを描いて人々を喜ばせて來た同じ材料を手掛けるやうになると云ふのは、蓋し已むを得ない數であらう。これ等の言葉はまた、人間の戀愛生活を嚴重に科學的に取扱ふことを是認することにも、役立つであらう。科學は實に快樂原則を完全に放棄することである。さうしてこの放棄は我々の心理の働きには可能であるのだ。

×

精神分析で患者を取扱つてゐる間に我々は屢々次のやうに感ずる機會があるのである。神經症者の戀愛生活と云ふが、そこには完全な健康者や優秀な人間もこれに似たやうな態度を示すことを見聞したと思はせるものがあると。材料が偶然的に好都合である結果、印象が度重るとそのためにやがて個々の型が一層明白に浮び上つて來る。男の對象選擇のそのやうな型の一つを私はまづ記述しようと思ふ。何となれば、その型は一聯の『戀愛條件』(どうしてそのやうな諸條件が一つになつてゐるかは理解出來ない事であり、本來不可思議の事である)の具はつてゐることで目立つてをるからであり、また精神分析からは簡單に說明されるからである。

(一)これ等の戀愛條件の第一のものは、正に特殊な條件と呼ばるべきものである。これを發見する

や否や人々はこの型には他の諸特質が存在してゐるであらうとそれを求める。これを『憤る第三者』(Geschädigter Dritter)あることの條件と名付けることが出來る。それは、當人が主のない女は決して對象に選ばないと云ふのがその內容である。つまり娘や獨身の女ではいけなくて、他の男が夫として、婚約者として、友として所有權をその女の上に發動させ得る如き者をのみ對象として選ぶのである。この條件は多くの場合に於いて非常に痛烈に現れるので、その女がまだ何人にも屬さない內は全然問題にしなかつたのが、一度他の男と右に擧げた關係の何れかに入るや否や、忽ち惚れ込みの對象となつて來ると云ふ始末である。

(二)第二の條件は恐らくこれほど常住ではないが、併しこの驚くべきことにかけては變りはない。この型は第一の條件と合致することに依つて始めて成就されるが、併し第一の條件はまたそれ自身だけで現れることも非常に屢々あるやうである。この第二の條件と云ふのは、純潔貞淑な女は戀愛對象たり得るだけの魅力を決して持たないのである。如何なる點に於いてか性的に不純な、節操の疑はしい女が魅力を持つのである。この節操の疑はしいと云ふのはその意味が實に多種多樣であつて、多少尻が輕いやうだと云ふやうな噂のある程度の他家夫人から、明かに多數の男に接するコケッテや戀愛技巧家に至るまであるが、併しかう云つた種類のものは何を問はず、今云ふ型の人はみな放棄はしな

いのである。かう云ふ條件を、少し粗雜になるが、『娼婦戀愛』,,Dirnenliebe"と名付けてもよからうと思ふ。

第一の條件は、愛する女を奪つた男が奪はれた男に對する敵對感情を滿足させる契機を供するものであるが、丁度それと同じやうに、第二の條件（女の娼婦性と云ふ條件）は、嫉妬（これがこの型の戀愛者には必要であるらしいのだ）の働きと關係を保つてゐるのだ。彼は嫉妬を感じ得て始めて情熱は高潮に達し、女は十分な價値を發揮して來るのだ。で、彼等はかう云ふ强烈な感情の體驗を彼等に供する如き契機を摑むことを決して怠りはしないのだ。ところでこゝに注意すべきは、かゝる嫉妬のさし向けられるのは愛人の正常なる所有者ではなくて、新たに出現して來た第三の競爭者である。この競爭者と自分と何れが果してこの愛人を惑はし得るかと云ふ、その相手である。極端な場合には、戀愛者はその女を自分自身だけで所有しようとの何等の願望を示さないのだ。さうしてたゞ三角關係にあることだけでいゝ氣持になつてゐるのだ。私の或る患者はその妻君に逃げられて氣も狂はむばかりに惱んだのであるが、その結婚に對しては別に何の反對もせず、寧ろその結婚の促進のために百方骨を折つてやつてゐるのだ。相手の男に對しても生涯中別に何の嫉妬の形跡をも示さないのだ。今一つの典型的な場合は、その男の最初の戀愛關係に於いては夫に對して非常に嫉妬的であつて、妻君を

して夫との性的交渉を止めなければならないやうにさせたが、彼のその後の澤山の關係に於いては彼は他の者等と同じやうに振舞ひ、正當の夫を別に邪魔者とは考へなかつた。

次なる諸點は戀愛對象に就いて要求せられたる條件を示したものではなく、戀愛者が自分の選ぶ對象に對する態度如何を示したものである。

（三）常態なる戀愛生活に於いては、女の價値はその性的保全に依つて決定せられ、それが娼婦的になるに從つてその價値が低減するわけである。だから、只今云ふ如き型の戀愛者が娼婦的特質の女を非常に價値高き戀愛對象として選ぶことは常態からは甚だしく離反してゐる事のやうに思へるのである。かう云ふ婦人に對する戀愛關係は最高度の心理支出を以て促進されるもので、そのために一切の他の興味は蠶食されるほどである。さう云ふ女は彼等が戀し得る唯一の女である。さうして、かゝる女に何れの時でも忠誠であらうとまたしても思ひつゝ、而も現實に會つていつでもその忠誠ぶりは打壞れるのではあるが――。以上述べて來たやうな戀愛關係の特徴としては、そこに極めて判然と强迫的特質が表れてゐる。而もそれが何時の場合でも何等かの度合で惚込み狀態にはつきものなのだ。併しそれほど結合が忠誠であり熱烈であるからとて、さう云ふ態度が當人の戀愛生活の全部であるとかあとにも先にもこれだけが唯一の戀愛態度であるなどゝ期待してはならない。寧ろ反對に、この種の

情熱は同じ様な特徴を具へて――その内の一つは他の正に生寫しである――この型に屬する者の生涯中に幾度も繰返されるのである。實際、戀愛對象は外的條件(例へば住所や環境の變移)に應じて非常に屡々反覆せられ、一筋の連鎖をなしてゐる程である。

(四)この型の戀愛者を觀察してゐてそこに表れる傾向に最も驚かされるのは、彼等が愛人を『救はう』とすることである。自分がなくては愛人は困るのだ、愛人は道德的支持を失ふのだ、さうして甚だ困つた低位に墮落するのだとその男は信じ切つてゐるのだ。このやうにさう云ふ男は女から離れない事に依つて相手を救ふのである。この救助の意圖は愛人の不貞や社會的危殆に瀕してゐる地位などを指摘することに依つて正當の役目を果すこともあるが、さう云ふ現實上の憑所のない場合にもやはり同樣歷然と現はれるのである。こゝに擧げた型に屬する男の或る一人は、女を誘惑するためにはいろ〳〵の技巧や狡猾な方法を用ゐたが、やがて手に入れてからは自分の定めた規律に依つて時々の愛人をして『婦德』の道を歩ませるためにあらゆる努力を惜まないのであつた。

右に擧げて來た種々の特徴――愛人に所有者がなくてはいけないとか、娼婦型でなくてはならないとか、彼女等を高く評價すること、嫉妬の必要なこと、忠誠ではあるがそれが幾度も繰返されゝば結局忠誠でないのと同じになること、並びに救助の意圖など――を大觀して見ると、これ等をたゞ一つの

源泉から生ずるものとして考へることは甚だ眞實に遠いと思ふであらう。併しながら、當面の人物の生涯を深く精神分析して見ると、實際にさう云ふことはあり得るのだ。かう云ふ對象選擇は特殊に決定されてをり、その戀愛態度は甚だ奇異であるやうに見えるが、實は常態者の戀愛生活に於いても同様な心理は働いてゐるのだ。かゝる對象選擇は母に對する幼兒時代の感傷的定着から發してをり、またこの定着からの歸結の一つを示してゐるのだ。常態的な戀愛生活に於いては、母が對象選擇の原型となつて居ることを察知せしめる特徴がほんの僅かしか殘つてゐない。例へば若い男はとかく年長婦人を偏好するが如き程度に於いてゞある。リビドーが母親から比較的早く離脱してゐる。ところが只今述べ來つた如き型の者に於いてはリビドーは思春期以後も長く母親に纏綿して去りやらず、後に選んだ對象にも母親的特質の刻印が殘つてをり、總てこれ等が一見して明かに母代償であることが分るほどである。これは丁度生れたての赤ん坊の頭蓋骨の構成と比較される。引出された赤ん坊は頭蓋骨に母の骨盤の出口の狹まかつたことが歴然たるのと同様である。

そこで我々は、右に述べて來たやうな型の戀愛條件並びに戀愛態度の特徴は、どうやら實際に母親的觀念から發生するものであるらしいとせざるを得ないことになるのである。この事はまづ第一の條件たる、主ある女なること、憤る第三者あることの條件には丁度宛てはまる。そこで我々は直ちにか

の不可分離の部分となると云ふこと、また慣る第三者がとりもなほさず父その人であると云ふことを――。丁度それと同樣に、愛人は唯一のものでありかけ代へのないものであると云ふ買被り的特徴が幼兒的な關係の內に這入り込むと云ふことは無理せずとも分ることである。何となれば、母ほど多くを有するものは他に何人もなく、また母に對する關係は一切の疑ひを離れた、又とあるべからざる出來事であると云ふのがその根柢となつてゐるからである。

かゝる型の戀愛者の對象が、就中、母代償であるとするならば、同じやうな戀愛が反覆されると云ふことは一見忠誠の條件に甚だ矛盾する如く思はれるが、實は極めて分り易いのである。他の實例をも精神分析して見て、それに依つて我々の知つたところに依ると、無意識に於いてかけ代へのないとせられるものは屢々それと類似なものが無限に連續することに依つてかけ代へのある事になつてしまふことが分る。何故に無限に續くかと云ふに、總て代償は如何に努力して見てもそれで滿足が得られるわけはないからである。で、子供と云ふものは或る年齡に達すると根掘り葉掘り物を訊きたがるものだが、それは次の事から說明がつく。彼等はたゞ一つだけの事を訊きたいのだが、それを彼は敢へて口にしないのだ。彼等の饒舌は丁度神經症的な憤りを持つてゐる人物が云ひたくても云へない秘密

の壓迫し來るまゝに無暗に口を動かすやうなものである。

それに對し第二の戀愛條件、即ち選ばれたる對象に娼婦性があると云ふこと、こいつはどうも母コムプレクスからは何としても說明がつきさうもないやうに思はれる。成人の意識的思想にとつては母は道德的に純潔無垢な人格と思はれる。で、もし外部からこの母の特質に對する疑ひが來れば非常に打擊を受けるし、內部からこの疑ひが來ると甚だ惱みを感ずるし、その効果に於いては變りはない。『母』と『娼婦』との間はこのやうに截然たる相反のあるものであるから、我々は却つてこれ等二つのコムプレクスの發達史と、その無意識的關係を調べたくなつて來るのである。ところで我々は、意識に於いては二つの相反となつてゐるものが、無意識に於いては屡々一つになつてゐることを旣に久しい以前から知つてゐるのである。調べてゐる內に我々はやがて或る時期を、即ち男兒が始めて成人間の性關係を十分に知悉する時期、つまり思春前期 Vorpubertät を問題とするやうになる。その時期に於いて男兒等は隨分露骨な、成人の權威を引下すやうな話を聽いて始めて性生活の秘密を知るのである。さうして性活動の實際を知つた上は、成人の權威も彼等にとつては打壞されるのである。この時期の入口に於いて新來者に最も強い影響を與へるのは、彼等自身の兩親に對する關係である。――關係は聽く者は直ちに拒否するのが屡々であるが、これを言葉にして見れば次のやうになる。――君の

兩親や他の人々は成程さう云ふ事をやるかも知れないが、併し私の兩親に限つてそんなことはしない。

性の話を聽く時に必ず缺けない景物として男兒等は、或る種の女（性行爲を商賣的になし、そのために一般から輕蔑される女）の存在を同時に知るのである。彼等にとつてはこの輕蔑は緣遠いものでなければならない。彼等は、これまでたゞ專ら『大人』のみのすることゝ思つて來た性生活の中に自分もまたその女に依つて導入せられ得るのだと知るや否や、この種の女に對して憧憬と恐怖との混合した感じを抱くだけである。やがて、一般の人々は醜い性活動をするが自分の兩親だけは例外だらうとの疑ひが支持しきれなくなつて來ると、彼はこれを皮肉に是正しつゝ云ふのである、母と淫婦との間の區別はさう大した事ではなく根柢に於いては同じやうなことをするのだと——。成人の性生活を說明せられて見ると成程、早期幼年時代の事が思ひ當りまたその願望が眼覺めて來て、そこからして或る感情が再び彼の內に活動を開始するのである。彼は新たに獲得した意味に於いて母の愛を求めるのである。さうしてその求愛に就いて邪魔になる父を競爭者として憎惡するのである。今や彼は我々の所謂エディポス・コムプレクスの支配下に立つてゐるのである。彼は母が性の交涉を自分に與へずして父に與へたことを忘れず、それを一種の反逆不義として見做すのである。この感情はそのまゝ過ぎ

去つてしまはないならば、空想となつて生殘るより外に出口はない。その空想の內容には種々な關係の下に於ける母の性活動が含まれてをり、この感情の緊張はまた特に容易に自慰的行爲となつて解消するのである。二つの衝動的動機（求愛と復讐）が不斷に働き合つてゐる結果、母の不義が遙かに多く空想される。その空想中で母が不義をなす相手の男はいつも自分自身の面影を具へてゐる。もつと正確に云ふならば、自分に似た、理想化された、年齢は長じて父の水準にまで達した人物である。私が他の個所（一）に於いて『家族譚』„Familienroman"として描いておいたことの內には、この空想活動の雜多な構成も含まれてゐるし、この時期の種々な自我的興味との錯綜も包含されてゐるのである。心理の發達にはこのやうな部分のあることを知つた以上は、戀人に娼婦性を求めることの條件が母コムプレクスから來てゐると云つても、敢へて矛盾してゐるとも不思議とも考へられないのである。以上述べて來た型の男の戀愛生活にはかゝる發達史の痕跡が見えてをり、またかゝる型は男兒の思春期空想の定着（その定着が後になつても現實生活中に出て來るのだ）として單純に解される。思春期に熱烈に自慰をやれば、右のやうな空想定着を助長すると云ふことは、これを考へるにさして困難でない。

註（一）オットー・ランクの著『英雄誕生の神話』（一九〇九年）參照。

かゝる空想が現實にのさばり出て來て戀愛生活を支配するやうになるのであつて、かゝる空想は戀人救助の傾向と、緊密ならぬ、表面的な、意識的に拵え上げられ得る關係の中に立つてゐるに過ぎないやうに見える。戀人(女)は不確實と不義との傾向があつてそのため危險に瀕するのである。そこで戀愛者(男)が彼女の婦德を監視し、その惡傾向を防ぐことに依つて彼女をこの危險から守護するために骨折ることは理解される。併し人間の隱蔽記憶、空想、夜の夢などを研究して見ると、右に述べたやうな解釋は無意識の動機を非常に巧みに『理窟付け』してゐるものであることが分るのである。丁度夢に於いて甚だ巧みになされてゐる第二次仕上げと同日に論ずべきものであることが分るのである。實際に於いて、この救助的動機なるものはそれ自身の意義と歷史とを持つてをり、また母コムプレクス(更に正しく云ふならば、兩親コムプレクス)の獨自の派生であるのだ。子供が自分の生命は母に負ふものであり、母が『生命を與へた』のであると聽かされると、母に對する感傷的な氣持と、大人になりたい、一人前になりたいとの氣持とが彼等に於いて一つになり、その結果兩親にこの與へられたものを返禮したい、同じやうなものを以て報いたいとの願望が起つて來るのである。それは丁度、剛情な子供のかう云つた云ひ草に似てゐる。卽ち、私はお父さんから何も貰はうとは思はない、私がお父さんにかけさせただけの費用はすつかりお返へしすると。そこで彼は父を人生の危險から救ふこ

との空想を築き上げる。救ふてやればそれで五分々々になるのだ。ところがこの空想は屢々皇帝、王或はその他偉大な君主などに轉位せしめ、この歪み（轉位）に依つて意識化され、また詩人にさへも利用されることになるのだ。父に對してこの救助空想が利用される場合には例の剛情な子供の云ひ草のやうな意味が重立つて來、母に對しての場合には大低はその感傷的（優しい）意味が向ふのである。母は子供に生命を與へたのである。この獨特な贈物をそれに等價の何物かを以て辨償すると云ふことは容易でない。無意識に於いては意味の變化と云ふことは容易に行はれるが、それほど意味の變化の多くない場合には——概念が互に流通する如き場合に比較することが出來よう——、母の救助と云ふことはかう云ふ意味を持つ、卽ちお母さんに子供を一人差上げよう、勿論自分に似た子供を……と。これは救助の本來の意味から離反してゐることがあまり甚し過ぎてゐるやうだが、さうでない。意味の變化があまりに出鱈目のやうだが、さうでない。母は彼に一つの生命を、自分自身の生命を、贈與したのだ。で、彼は母に對してその代りに一つの他の生命を、自分自身と酷似した一人の子供の生命を贈與する。息子は母に依つて一人の息子を、自分自身に似た息子を、持たうと願ふことに依つて自分の感謝を證明するのである。つまり、救助空想に於いて彼は自分自身を完全に父と同一化するのである。感傷、感謝、淫蕩、剛情、自主など一切の本能は彼自身の父となることとの願望に依つて滿足させ

られる。また危險の契機は意味の變化した場合にも失くなつてはゐない。分娩行爲それ自身は、彼が母の努力に依つて救はれた危險そのものに外ならない。出產はこのやうに人生の一切の危險の最初のものであり、その後の一切の危險にして我々が恐怖を感ずるものゝ原型であつて、出產の經驗あればこそ我々が恐怖（強迫(アングスト)）と名付ける感動は殘されてゐるものゝ如くである。スコットランドの傳說のマクフ Machuff（一）は母に產んで貰はず、母の胎內から切出されたものであるが、それ故また恐怖を知らないのである。

註（一）シェークスピアの『マクベス』の中にも出て來る人物。スコットランドの貴族。暴君マクベスを殺した英雄。（譯者）

昔の夢占者アルテミドロス Artemidoros は、夢は夢見た本人に依つてその意味が違ふと云つてゐるが、それは慥に正しい。無意識思想の表現に對して妥當する法則の如何に依つては『救助』と云ふこともその意味を變ずる。それを空想するものが女であるか男であるかに依つても意味が變る。それは子供を作る―生ませる（男の場合）と云ふ意味にもなるし、自分で子供を生む（女の場合）と云ふ意味にもなる。

夢や空想に於ける救助のこれ等さまざまの意義が水と關係を保つてゐる場合には、殊に判然と認識

される。男が女を水中から救つたとすれば、それは彼が彼女を母にしたと云ふ事である。これは右に論じて來たところに從へば、彼は彼女を彼の母にしたと云ふ事と、内容に於いて同じである。女が他人（子供）を水中から救つたとすれば、それはモーゼ傳説に於ける王女（一）と同じやうに、彼女が自分をその子供の母として、つまりその子を自分が生んだと云ふ事を認めるのである。

註（一）ランク前掲書參照。（原著者）この邊の論はまたわが桃太郎傳説にもあてはまる。（譯者）

時としてはまた父に向けられた救助の空想が感傷的な意味を帶びる場合もある。その場合にはその空想は父を息子にしたいとの願望、つまり父に似た息子を持ちたいとの願望を表はしてゐる。救助的動機は兩親コムプレクスに對してこの通りの關係を持つてゐるが故に、戀人を救助しようとの傾向は右に說いて來た型の戀愛者の本質的特徵を構成するものである。

右の論は私の肛門性感論と同じやうに、觀察の材料からしてまづ極端な截然と際立つた型をとり出して見たものであつて、私の論を實際に證明して見る必要はないと思ふのである。母コムプレクスの場合でも肛門性感の場合でも、これ等の型のため一二の特徵が現れてゐる、或はこれ等の特徵がたゞ漠然とした調子で現はれてゐるに過ぎない人々も澤山にあるのである。で、これ等の型が示されてゐる關係をまづ全體的に說明して見ることはこれ等の關係を正しく知る上に必要である事は云ふまでもない。

第二論文

戀愛生活の一般的卑しめに就いて

一

精神分析醫が最も屢々自分に救ひを求められるのは如何なる苦痛に惱む患者からであるか――さま〴〵の形の恐怖は別問題として――と自問して見ると、それは心的不能の故に訴へて來るのが最も多いことを認めざるを得ない。かう云ふ特殊な障害の起きるのはリビドーの强い男たちに於いてゞあつて、性慾の實施機關が性行爲の實行を阻むのである。そのくせ以前にも以後にも、その實施が無事に行へたし行へるやうにもなるのである。またその行爲を實施したいとの强い心的傾向も實存してはゐるのである。それは少しをかしいと思ひ出すのは患者自身である。さう云ふ不能が或る種の人物に對して試みた場合に現れ、他の人物に對しては決してさう云ふことがないと云ふので、自分ながら變だと思ひ出すのである。そこで彼は性對象のせいで自分の男性能力が禁制を受けるのだと云ふことを知るのである。さうして彼は支障の感を覺え、意識的意圖を美事に妨げる抗意志を知覺すると、彼は多くの

場合語るのである。彼は併しこの內的支障が何であるか、性對象の如何なる性質のためにかう云ふ結果になるのであるかに就いては、何の見當もつかないのである。彼がそのやうな不能を繰返し體驗すると、彼は誰しも知つてゐる通りの誤つた結合をなして、最初の時の記憶が障害的な强迫觀念となつてさう云ふ不能がどうしても反覆せられるやうになるのだと判斷するのである。而もその最初の場合をば彼は『偶然の』事に歸するのである。

この心的不能に對する精神分析的研究は旣に多くの著者たちに依つてなされ、また發表されてゐる。(一)總ての分析者はこゝに提供せられてゐる說明を、彼等自身の醫療的體驗から確認することが出來る。當人の全然與り知らざる何等かの心的コムプレクスの爲めに障害せられると云ふのが、實際の事情なのだ。この病的材料の一般的內容としては母又は姉妹に對する近親姦的定着のまだ克服されてゐないことがその主要なものとなつてゐる。その他、幼兒的性活動に結び付いてゐる遇然的な、苦痛な印象の存することも認ねめばなるまいし、また女性對象に向ふリビドーを一般的に低減せしめる一切の契機も考慮に入れなければならない。(二)

註（一）スタイナー　M.Steiner『男性の機能的不能、並びにその取扱方』(一九〇七年)――ステーケル　W.Stekel『神經的强迫狀態とその取扱方』(一九〇八年)――フエレンチ　Ferenzi『男に於ける性心理的不能の分析

的解釋と取扱方』(一九〇八年)

(二) ステーケル前掲書參照。

極端な心的不能の種々な場合を精神分析に依つて徹底的に研究して見ると、そこに働いてゐる性心理現象に就いて、我々は次のやうな知識を得るのである。この苦惱の根底はこの場合に於いてもまた――一切の神經症的障害の場合も同樣であるらしいが――リビドーがその常態的と名付くべき窮極的形態に達するまでの發達史中に於ける一つの障害である。この場合には二つの流れが合致してゐないのだ。二つの流れが一致して始めて完全に常態的な戀愛態度が確立されるのだ。その流れと云ふは感傷的(ツェルトリヒ)(優しい)と感覺的(ジンリヒ)との二つで、これ等を我々は區別することが出來るのだ。

これ等二つの流れの內、感傷的の流れの方が古いのだ。これは最早期の幼兒時代から發源し、自己保存本能の興味を根柢としてその上に成立し、家族の者等や幼兒の世話をする人々に向つて行くのだ。この流れは始めから性本能の寄與を受けてをり、色慾的興味の要素を頒前してをるのである。この要素は既に幼兒に於いて多少とも判然してをり神經症患者に於いては總ての場合に於いて後年の精神分析に依つて剔抉せられるのだ。この要素は最初の幼兒的對象選擇に相當するのだ。これに依つて見ると、性本能なるものはその最初の對象を、自我本能を尊重することの內に依憑しつゝ發見するも

場合語るのである。彼は併しこの內的支障が何であるか、性對象の如何なる性質のためにかう云ふ結果になるのであるかに就いては、何の見當もつかないのである。彼がそのやうな不能を繰返し體驗すると、彼は誰しも知つてゐる通りの誤つた結合をなして、最初の時の記憶が障害的な强迫觀念となつてさう云ふ不能がどうしても反覆せられるやうになるのだと判斷するのである。而もその最初の場合をば彼は『偶然の』事に歸するのである。

この心的不能に對する精神分析的研究は既に多くの著者たちに依つてなされ、また發表されてゐる。(一)總ての分析者はこゝに提供せられてゐる說明を、彼等自身の醫療的體驗から確認することが出來る。當人の全然與り知らざる何等かの心的コムプレクスの爲めに障害せられると云ふのが、實際の事情なのだ。この病的材料の一般的內容としては母又は姉妹に對する近親姦的定着のまだ克服されてゐないことがその主要なものとなつてゐる。その他、幼兒的性活動に結び付いてゐる遇然的な、苦痛な印象の存することも認ねめばなるまいし、また女性對象に向ふリビドーを一般的に低減せしめる一切の契機も考慮に入れなければならない。(二)

註（一）スタイナー M.Steiner『男性の機能的不能、並びにその取扱方』(一九〇七年)――ステーケル W.Stekel『神經的强迫狀態とその取扱方』(一九〇八年)――フェレンチ Ferenzi『男に於ける性心理的不能の分析

的解釋と取扱方』(一九〇八年)

(二) ステーケル前掲書參照。

極端な心的不能の種々な場合を精神分析に依つて徹底的に研究して見ると、そこに働いてゐる性心理現象に就いて、我々は次のやうな知識を得るのである。この苦惱の根底はこの場合に於いてもまた——一切の神經症的障害の場合も同樣であるらしいが——リビドーがその常態的と名付くべき窮極的形態に達するまでの發達史中に於ける一つの障害である。この場合には二つの流れが合致してゐないのだ。二つの流れが一致して始めて完全に常態的な戀愛態度が確立されるのだ。その流れと云ふは感傷的(ツエルトリヒ)(優しい)と感覺的(ジンリヒ)との二つで、これ等を我々は區別することが出來るのだ。

これ等二つの流れの內、感傷的の流れの方が古いのだ。これは最早期の幼兒時代から發源し、自己保存本能の興味を根柢としてその上に成立し、家族の者等や幼兒の世話をする人々に向つて行くのだ。この流れは始めから性本能の寄與を受けてをり、色慾的興味の要素を頒前してをるのである。この要素は既に幼兒に於いて多少とも判然してをり神經症患者に於いては總ての場合に於いて後年の精神分析に依つて剔抉せられるのだ。この要素は最初の幼兒的對象選擇に相當するのだ。これに依つて見ると、性本能なるものはその最初の對象を、自我本能を尊重することの內に依憑しつゝ發見するも

のであることが分る。丁度、最初の性滿足が生命保存に必要なる關係機能に依憑しつゝ經驗せられるのと同じやうである。兩親や世話してくれる人の『感傷性（優しさ）』の内に色慾的特質の存することは大抵の人々の否定しないところであるが、（現に、『子供は色慾的な玩具』と云ふ諺さへある）、子供の自我本能の纏綿に對して色慾の寄與を高め、後年の發達に於いて考慮しなければならない位（殊に或る他の關係がそれへの助勢を與へる場合には）の程度にまでその寄與をなすと云ふのは、この感傷性（優しさ）の力が大いに與つてゐるのだ。

子供のこの感傷的定着は幼兒時代を通じて繼續し、常に常に色慾を伴つて行くのだ。さうして色慾はこのためにその性目的を離脱する（つまり性的でなくなる）のだ。人生の思春期に至つて今や力強き『感覺的』流れがそこに附加はり、これはその性目的を忘れることはないのだ。この流れはどうやら決して幼兒時代の道程を行くことを怠らないものゝ如く、今や遙かに力強きリビドー量を以て最初の幼兒的選擇の對象に纏綿するのだ。ところがこの對象に就いてはそこに近親姦の障碍があつてそれに遮られるために、この自由にならぬ對象を出來るだけ早く離れて、他の、今まで知らなかつた對象へと移り行き、これに依つて眞實の性生活を營まうとの努力を示すのだ。だが、この見知らぬ對象は常に幼兒的對象の模範（イマゴー）に倣つて選擇せられるのだ。併しこの新たな對象は同時に、舊對

象に交渉のあつた優しさをそれ自身に引き繼ぐのだ。男子は――聖書の定めてゐる通り――父母の許を去つて自分の妻の方へと赴き、その時、感傷性と感覺(肉感)性とを持參する。最高度の肉感的惚込みは最高度の精神的買被りを伴ふのだ。(男子の側からは性對象を常態的に買被る。)

リビドーの發展がこのやうな歩みをどるに當つて、その失脚となるべき二つの契機がある。第一の決定的契機は新しき對象選擇を妨げてこれを馬鹿々々しく思はせるところの現實的の拒否である。實際、もし我々が對象を選ぶことも敢へてし得ず、普通の何者かを選び得べき目安も立たないとすれば對象選擇に向つて行くことは無意味である。第二の決定的契機は、今や離れ去られんとする幼兒的對象が表はし得る魅力である。さうしてその魅力の割合は、幼兒時代に於いてその舊對象がどれ位の色慾的纏綿の領前を持つたかと云ふ事にある。これ等二要素の力が十分に强いと、神經症的構成の一般的機制が効果を示して來る。リビドーは現實から離れて空想活動の取上げるところとなり(內向性)、最初の性對象の影像を强め、それに對して定着を起す。併しながら近親姦の障碍と云ふものがあるから、この對象に向ふリビドーは無意識に殘留してゐなければならないことになる。そこで今や無意識に屬してゐる感覺(肉感)的の流れは自慰的行爲となつて活動し、この定着を强めるために全力を盡すことになる。このやうにリビドーの進步が現實に於いては實施されずして、無意識に於いて完了せら

れる場合でも、自慰的滿足へと導いて行く空想的立場に於いて本來の性對象が新しい對象に依つて代償せられる場合でも、右に述べた事情に變りはない。空想はこの代償に依つて意識化し得るやうになるのであつて、本當にリビドーを無意識に抑壓してしまつてゐたならばリビドーの進歩と云ふことはあり得ないのである。

で、若い人の肉感性の全體が無意識に於いて近親姦的對象に結び付けられるのは、或は（かう云つてもよからうが）無意識的近親姦的空想に定着せられるのは、右に述べたやうな次第に依つてゞある。その結果はやがて絕對的な不能となり。而もこの不能はなほ同時に、性行爲に導くべき肉體機關が實現に弱まつて來るために愈々動きのとれないものとなるのである。

本來の意味での心的不能と云ふことが實際に生ずるためには、なほこれよりもゆるやかな諸條件が必要である。肉感的の流れは必ずしもその全量を感傷的流れの背後に匿してしまふにきまつたものではない。肉感的の流れは十分に强く、或は禁制し切れないのであるから、その幾分は現實の方へと迸り出るのだ。併しさう云ふ人々の性活動が最も明白に認識される徵象は心的本能力の全部がその活動の背後に立つてゐないと云ふ點である。彼等の性活動は氣まぐれであり、障害を受け易く、その實行に於いて不正確であり、享受の程も十分でない。就中、彼等の性活動は感傷的の流れを回避しなけれ

ばならない。かくて對象選擇に就いて一つの制限が確立せられるのだ。能働的となり得てゐる肉感的の流れは、この流れに禁ぜられてゐる近親的人物を彷彿させないやうな對象をのみ求めるのである。もし或る人物の印象が非常に高い心的評價に導く如きものであるならば、その印象は肉感を誘發せずして、色慾的には効果なき感傷性を誘發するのである。さう云ふ人の戀愛生活は二つの方向に分裂してをり、これ等を文藝は天國的戀愛と地上的(又は獸的)戀愛とに擬人化するのである。彼等が肉感するところ、彼等は戀愛し得ず、彼等が戀愛するところ、彼等は肉感し得ないのである。彼等はその戀愛するところの對象に彼等の肉感をさし向けないやうにしておくためには、彼等が戀愛する必要のない對象を求めるのである。で、心的不能はない筈だがど不思議に思ふことのあるのは、『コムプレクス感情』や『抑壓されてゐるものゝ復歸』などの法則に從つて生ずることで、つまり近親姦を避けるために擇んだ對象に於いて、避けてゐる對象の目に立たぬ特徴を想起する場合に起ることである。

かゝる性的障害の防禦手段の主要なるものとして人間がこのやうな戀愛分裂に感ずるところは、性對象を心理的に低める(卑しめる)ことである。而も性對象なるものは常態的には買被りして見るものであるが、この買被りは近親的對象並びにその代償にのみさし向けておくやうにするのである。この卑しめの條件が果されてゐる限りは肉感は自由に躍動し、重要な性的行爲並びに快樂は發展するの

である。この結果になほ他の一つの事情が附加はる。感傷的の流れと肉感的の流れとが普通に合流してゐない人物に於いては、大抵はその戀愛生活もあまり洗練されてゐない。變態的の性目的は彼等に於いて保存せられ、これが果されないと快樂感が減少するのである。併しこれが果されるのはたゞ卑しめられ、見縊られてゐる性對象に就いてのみ可能であるやうに思はれる。

第一論文(一)に於いて言及した男兒の空想（母を娼婦と卑しめる空想）は、今やその動機が我々に理解されて來た。それは二つの流れの間に存する間隙に、少くとも空想に於いて掛橋を架せんとする努力である。卑しめ見縊ることに依つて母を肉感の對象たらしめんとする努力である。

註（一）一〇頁以下參照。

二

吾人はこれまで心的不能と云ふことを醫師として心理學者として研究して來たのであるが、これは本論の題目にはあまり交渉がない。併し我々の本來の主題に這入つて行くためには、これだけの序論の必要であることは、やがて分るであらう。

吾人は、心的不能は要するに戀愛生活に於ける感傷的の流れと肉感的の流れとが合致しないためで

あると論じた。さうしてこの性生活の發展上の禁制それ自身は幼兒時代の强烈な定着と、並びに後年に於ける近親姦禁斷の干渉に依る實際上の拒否と、この二つで說明したのである。この說に反對するものとしては就中、次の意味がある。——御說は如何にも尤千萬であつて、これに依つて我々は何故に或る人達が心的不能を惱むかは明かになつたが、併し他の人々は別にかゝる惱みを惱まないと云ふは不思議であると。我々の目に見え、問題となるべき總ての契機（强き幼兒期定着、近親姦障碍、並びに思春期以後の發達に於ける自己禁斷）は殆ど總ての文明人に於いて存在してゐると認めざるを得ないから、心的不能と云ふことは一般的文明病であり各個人の症狀であると期待して當然であらう。

併し件の如き症狀が結果し來るのは右に擧げた個々の契機の多少に依るのである、つまり病源の量的要素が問題であると云ふことに依つて右の如き推論を避けようとすることは容易であらう。が、私としてはこの答辯を正しいと認めたくは思ふが、推論それ自身を拒否する氣持はない。それどころか私はかく主張したいと思ふ、心的不能は人々の思ふよりは廣く行亙つてをり、凡そ文明人としてこの病徵を多少とも具へないものは殆どないのであると。

もし人々が心的不能と云ふ事の概念を廣く解し、享樂の意圖はありながら、また性器組織は完全でありながら性行爲が出來ないといふ事だけならば、まづこれに入るべきは所謂心理的無感覺者 Psych-

anästhetiker（行爲をなすことは出來るが特に快樂を感じない人）である。かう云ふ無感覺者は人々が思つてゐるであらうよりは多いのである。さう云ふ人間を精神分析的に研究して見ると、我々はそこに狹義に於ける心理的不能者に就いて發見したのと同じ病源的契機を見出すのである。併しその症狀の相違には始めは何の說明もつかない。無感覺な男子と無數の不感症婦人との間には當然是認せらるべき類似を認めることが出來る。不感症婦人の戀愛態度は如何なるものかと云ふに、これは例の男子の心理的不能と比較して見るのが、これを說明し解釋する最上の方法である。(一)

註（一）比較は出來るが、併し婦人の不感症の場合には一つの錯雜した、他の方面から說かねばならない問題の存することは、勿論これを認めるべきである。

併し心理的不能の概念を擴げようとせず、これの症狀に就いての知識を暗くしようとすることを警戒するならば我々は、現代文明世界の男子の戀愛態度は一體に心理的不能の型を帶びてゐることを見遁すことは出來ない。感傷的の流れと肉感的の流れとは、敎育ある者の極少數者に於いて相互依屬的に融合してゐる。殆ど常に男子はその性活動を、女に對する敬意に依つて狹めてゐる。さうして彼が全能力を發揮するのは、自分の卑しんでゐる性對象を前にした場合である。殊に彼の性目的に變態的な要素が入込んでゐて、その要素をば自分が尊敬してゐる女に對しては到底滿足させることが出來な

いと考へてゐる如き場合には、愈々右の事情は強くなるわけである。完全な享樂をなし得るのは、例へば彼の貞淑な妻に對しては敢へてし得ないやうなことを夢中になつて滿足させ得る如き女に就いてゞある。さう云ふところから彼は自分が卑しんでゐる性對象を求めるやうになつたのである。つまり倫理的には價値の低い、美的な考慮を期待するに及ばないやうな、彼の他の生活關係には立入つたり批判したりしないやうな女を求めるやうになるのである。さう云ふ女に對して彼は最も好んでその性慾力を捧げるのである。よしんばその感傷性は全然他のもつと高尙な女に對して寄せてゐようとも――。最も社會的地位の高い階級の人々が低い位置の女を持續的に情人とし、或は配偶者に擇んだりする話は甚だ屢々聽くところであるが、これは如何にもありさうなことで、つまり心理的に滿足を得るには卑しめられてゐる性對象に俟たねばならないから、そのやうな對象を求めてかゝる結果になつてゐるわけである。

眞の心的不能に於いて働いてゐる二つの契機たる幼兒時代の激しい近親姦的定着と青年時代の現實的性拒否とが、また文明人の戀愛生活に於いて屢々起るこの性的無力の原因となつてゐるのだと私は云ふを敢て辭さない。誰でも戀愛生活に於いて實際に活潑であり從つてまた幸福であらうと欲する者は女に對する畏怖を克服し、母や姉妹との近親姦の觀念を承知してをらねばならない。かう云ふ事を

云ふのは甚だ殺風景であり、その上逆說的でさへもあるが、併し云ふだけは云つておかねばならない。右の如き提言を眼中において眞劍に自己を檢覆して見るならば、誰しも自分が性行爲を根柢に於いて卑しいことゝ考へ、單に肉體的以上に自分を濱すことだと考へてゐることを勿論自認するやうになるであらう。このやうに性行爲を評價してゐることは慥に何人も自分では唯々として承認はしないのであるが、かゝる評價が何時頃から起るかと云ふに、それは彼の青年時代に起つたに相違はない。その時分に彼の肉感的の流れは既に強く發展してゐたのだが、併しそれを近親以外の對象に就いて滿足させることは近親的對象に就いて滿足させることゝ殆ど同樣に禁斷せられたのである。

現代文明世界の婦人たちは教育の影響を受けてゐることに於いて男子と同樣であり、それのみならず男子の性的無力に對する反應をも示してゐる。女にとつては男が完全な性的能力を以て立向つて來ようと、始めの程は惚込みの買被りをしてくれるが、一朝手に入れて妻にして了ふとその買被りの氣がぬけてしまはうと、女にとつては勿論どちらでも大したことはない。性對象を卑しめて掛らねば都合が惡いと云ふやうなことは、女の側にはあまりないやうである。さうしてまた性對象を買被つた場合に男に起るのに類したことは女には大低はない。併し性慾を永く抑へてをり、肉感を空想中に制してゐると、女にとつてはまた別の重大な結果が生ずる。かうなれば女は屢々肉感的の活動と禁制との

結合を解除する事が出來なくなり、もう肉感的活動をしてもよい時になつても心理的に不能になる、つまり不感症になるものである。さう云ふ次第で、大低の婦人が或る秘密の戀愛關係に於いてこれを再び禁制しなければならない事情が復活して來た時に、許された關係に對しては暫くその秘密を守つて、他方に於いて常態的の能力を感じようとの努力をなすのはそのためである。大低の女は情人に對して第二段の忠誠を保持するために、夫に對しては不忠誠であり得るものである。

女の戀愛生活に於ける禁斷と云ふ條件は男が性對象を卑しめんとする要求と比較すべきものであると私は考へる。これ等二つの性の成熟と性の活動との間に相當の時間的隔たり――これを教育が文明的根據からして要求する――があるために生じたものである。これ等二者は感傷性と肉感性との不一致から結果する心理的不能を廢絶せんとするものである。同一原因からの結果が女に於けると男に於けると相違してゐるとすれば、それは恐らく兩性の態度に於ける或る他の區別に歸すべきである。文明婦人は性が成熟してその活動に入るまでの待望期間中には性活動の禁斷を犯さない習はしになつてゐるので、禁斷と性慾との間の內的結合が獲られるのだ。男は大低は、對象を卑しめたい要求からしてこの禁斷を破る。さうして爾來この條件をその後の戀愛生活中に持越すのである。

現代の文明世界に於いては性生活改造の努力が如何にも活潑に行はれてゐるけれども、精神分析的

研究は他の何れの學問とも同様に、傾向と云ふ事に就いて問題にしないのだと云ふ事を斷つておくのも無駄ではない。精神分析は顯在的なものを潛在的なものに歸することに依つてそこに存する關係を知らうとするだけなのだ。で、性生活の改造が有害なるものを避けて有益なるものを採るために精神分析的手段を利用することは、精神分析にとつて滿足しなければならない。併しかうなつた結果、精神分析以外の方法制度が他の、恐らくもつと重大な貢献をしないものとも、精神分析は豫言し得ないのである。

三

戀愛生活を文明的に制御するところから戀愛對象を必然的に卑しめて見るやうになると云ふ事實のために、我々は自然、眼を性對象から離して性本能それ自身に向けざるを得ないやうになる。性の享樂を始めに自分で抑へて了ふとその弊害は、その後結婚して自由に享樂出來るやうになつても十分に滿足の行く効果が味へないと云ふ事となつて表れて來る。さりとてまた始めから無制限に性の放肆に耽ると、これまた同様あまりいゝ結果は生まない。性の滿足が容易に得られるやうになると、戀愛の要求なるものは直ちにその心理的價値を低めて來るものであると云ふことは確言し得る。リビドーを

高きに驅り立てるためには或る障碍が必要である。で、性の滿足に對する自然な障碍が足りない場合には、人間は戀愛を享樂し得るためにあらゆる時に於いて習俗上の障碍を設置するのである。これは個人にもあることだが、民族にもある。戀愛の滿足が一向困難でない時代に於いては（例へば古代文明の沒落期などに於いては）戀愛は無價値となり人生は空虛となり、生きとし生けるものにとつて缺くべからざる感動の價値を恢復するために强烈な反動形成を必要としたのである。さう云ふ次第であるから、キリスト敎に於ける禁慾的傾向のために戀愛に對する心理的價値は高まつて古代の異敎時代には思ひも及ばなかつた程になつたのだと云ふことは出來る。戀愛が最高の意義にまで達したのは禁慾僧に於いてゞあつて、彼等の生活はリビドーの誘惑に對する鬪爭のみが殆ど全部であつたのだ。

ところが人々は、かう云ふ風にリビドーの誘惑に抗することの困難なのは、我々の有機的（肉體的）本能の一般的特質のためであると考へる傾向が慥にある。また或る本能の心理的意義はそれを自制し禁斷することに依つて高まつて來ると云ふことも確に一般的に正しい。人々は非常に違つてゐる多數の人間を一樣に飢渴狀態に置かうと試みる。抗すべからざる營養慾が增加して來るにつれて、一切の個人的差違は消失して、その代りに一つの滿たされざる本能が一樣に擡頭する。併しこの事は、一つの本能を滿足させればそれの心理的價値が一般に低下すると云ふことゝ同じであらうか。例へば酒呑

みの酒に對する態度を考へて御覽なさい。酒は酒呑みに何時でも同樣な酩酊的滿足（この滿足を人々は詩文に於いて屢々色慾的滿足と比較するが、また科學的見地からしてこの比較は許される）を供すると云ふは正しくないだらうか。同じ酒ばかり飮んでゐてはうまくなくなるから酒は始終變へてゐなければならないと云ふやうな話を我々は嘗て聽いたことがあるだらうか。それどころか、酒はやはり始終呑みつけたのに限ると云ふ話を聞くほどである。どうも近頃は酒があまりうまくないから、自由に酒の呑めないやうに酒の高價な國か禁酒國へ行きたい、などゝ云ふ話を聽いた事があるだらうか。一向に聽いたことはない。現代の酒豪、例へばベックリン Böcklin（一）などが酒に對する氣持を語つてゐるところを聽いて見ると、如何にもお酒と仲がむつまじさうで夫婦の間もかくあつてこそと思はれるばかりである。どうして戀愛者のその對象への態度はかうは行かないのであらうか。

註（一）　フレルケ G.Floerke『ベックリンとの交友十年』（第二版一九〇二年）

から云ふ事を云ひ出すと甚だ突飛な話のやうに思はれるかも知れないが、人間と云ふものはその性本能の性質中にこれを完全に滿足させないやうにする何物かを存せしめようとするものだと私は信じてゐる。この本能が永く掛つて困難な進展の歷史を閱してゐる間に、右に述べた如き何物かを生ぜしめたと思はれる二つの契機が發生してゐるのである。第一の契機と云ふは、抑々我々の對象選擇は近

親姦障碍の干渉を挿んで二度行はれるものであるから、性本能の窮極的對象は獨自な、自然なものではなくて、最初の對象の代償に過ぎないと言ふことである。然るに精神分析は、我々にかう敎へてゐる。――最初に獨自に選んだ對象が或る願望のために抑壓に依つて無意識に追込まれてしまふと、それに似た幾つもの代償的對象がそれの代りになつて次々と選ばれて行くことが屢々である。が、併し何れを以てしても最初の程氣には入らないと。成人の戀愛生活に屢々見られる浮氣、移り氣、相手が固定せぬことは、右の論に依つて說明がつく。

第二に我々の知つてゐることは、性本能は始めに一聯の多數の要素に分裂する（寧ろそれ等の諸要素から生じて來たのである）と云ふことである。これ等諸要素の內の全部が後の性本能の形態の內に採用せられるわけではなく、豫め抑壓され或は他方面に流用されることになるのだ。我々の美的敎養と氷炭相容れざることを示すものは、性本能の內でも嗜糞的な要素である。この本能要素は人類が直立步行し、嗅覺器關を地面から高くへ引離すやうになつて以來であるやうだ。（二）それからも一つ戀愛生活に屬する加虐性的（サディスト）本能の大部分である。併し總てこれ等の發展過程は錯雜なる構造の單に上層部分をなしてゐるに過ぎない。戀愛感情を惹起す基本過程は依然不變である。排泄物に對する感じと性的感じとは內的に非常に密接な關係を保つて發達して來た。性器――胎內と滓――の位置は決定的な

不變な契機となつてゐる。こゝで人々は大ナポレオンの周知の言葉を多少變へて、かう云ふことが出來る。――解剖は運命である。性器だけは人體が美的に進化するにとり殘されてゐる。性器はなほ動物的である。で、戀愛もまた根柢に於いて昔の通りになほ動物的である。戀愛本能は教育するに困難である。その教育は或は過大となり或は過少となる。文明は戀愛本能を如何に仕立てようと、それの快樂を多大に損傷せずしては何とも仕方がないらしい。利用の道のない感情が空しく存續してゐると云ふことは、性活動の場合に於いては不滿足として認識されるのだ。

註（一）『文明と不滿』（本全集第三卷、二八五頁）參照。（譯者）

そこで人々は恐らくかう考へたくなるに相違ない。――卽ち、性本能の要求と文明の要求とを一致させることは抑々不可能であり、人類の文明發達の結果は人類の自己放棄となり、苦惱となり牽いてはまたその絕滅の危險ともなると云ふことは避くべからざる數であると。かゝる悲觀的な豫診は、文明的不滿足は（性本能が文明に壓迫されて帶びるやうになつたところの）或る特殊性の必然的歸結であるとの唯一の推定に基いてゐるのだ。ところが性本能が完全な滿足を味ふことが出來なくなつたと云ふこの無力こそは（それが文明の最初の要求に服するや否や）、壯大なる文明的行動の源泉となるのである。この壯大な文明的行動は性本能の要素を昇華させて行けば行くほど愈々實現されるのだ。何

となれば性本能なるものは、それを何れか一方に注ぐことに依つて完全な快樂の滿足を得られると云ふのに、これを他の方面に流用する何の動機を人間は持つてゐるだらう。人間はまたその快樂を放棄しようとはしない、從つてこれ以上の進歩を齎さないであらう。そこで、人間と云ふものは、二大本能（性本能と自然本能）間の調停すべからざる相違のために、愈々高等な行動をなし得るやうになつてゐるのであるらしい。が、併しそこに一つの不斷なる危險がある。現に彼等の内贏弱なるものは神經症となつてこの危險に陷つてゐるわけである。

科學と云ふものは驚かさうとの意圖もないが、慰めやうとの意圖もない。併し私としては固より右に論じて來たやうな範圍の廣汎に亘る結論はもつと廣い基礎の上に立てられねばならないと云ふことを認めるものであり、從つてまた人類は更に他方面の事を發達させることに依つて、こゝにはたゞ單獨的に論じておいたことを是正し得るやうになるのであらうことを期するのである。

第三論文

處女性のタブー

原始民族の性生活の種々な方面の內でも、殊に我々を驚かせるのは彼等が處女性を、女の純潔を尊重したと云ふことである。我々にとつては、求愛する男子が處女性を尊重すると云ふことは甚だ當然自明の事のやうに思へて、何故尊重するのかと訊かれると却つて間誤つく位である。娘が男と結婚するに當つて他の男との性交の記憶を持參してはならないとの要望は、實は女に對する專有權の窮極的延長に外ならないのであつて、これこそ一夫一婦の實を果すものであり、この專有を過去にまで及ぼすものである。

そこで、始めの程は先入見であると思はれたものを、女の戀愛生活に關する我々の意見からして是認することはさして困難でない。少女が永い間骨を折つて抑制して來た戀愛憧憬を滿たしてやり、また少女が環境と教育との影響に依つて彼女の內に確立されてゐた抵抗を打破した者こそは、彼女に依つて持續的な關係の內に受容れられるのだ。その男こそは他の者よりも彼女との關係を持續し得る可

克ち得るのもそのせいである。これがためにまた婦女の所有が障害なく持續するやうにもなり、別な男への眼移りや他人の誘惑に打能性があるのだ。婦人が從屬的な地位に立つのは、かゝる體驗がその基礎になつてゐるのであつて、

『性的從屬』„geschlechtliche Hörigkeit" と云ふ語は一八九二年にフォン・クラフト・エービング(一)が、性的關係を結んでゐる一方が他方に對して異常に高度な依屬と非獨立とを持つに至る事實を云ひ表はすために造つたものである。この從屬狀態は時として甚だ極端となり、當人が獨立の意志を失ひまた自己の利害に關する最も困難な犧牲をも敢へて忍ぶに至るほどである。併し同著者は更に進んでそのやうな依屬の幾分は『兩人の結合が多少とも持續するためには全く必要である』と論ずることを怠つてゐない。その程度の性的從屬は文明的夫婦關係を保持するためには、またこの關係を脅さんとする多夫多妻的傾向を制止するためには、事實上必要である。また我々の社會的集團に於いてはこの要素は常に必ず採入れられてゐるのである。

註(一) v. Krafft-Ebing: Bemerkungen über „geschrechtliche Hörigkeit" und Masochismus. (Jahrbücher für Psychiatrie, X.Bd.,1892)

一方は『異常な程度の惚込みと性格の弱さ』のある女であり、他方は無限な自己家であつて、この

二つが合致した場合に性的從屬と云ふことが起るとクラフト・エービングは論じてゐる。併し精神分析の經驗から云ふと、このやうな簡單な說明では滿足は出來ない。我々は寧ろ如何程の大きさの性的抵抗が克服されたかと云ふことが決定的な契機であつて、その上にその克服と云ふ過程が集中的に、一度きりでなされたと云ふ契機が附け加はるのである。であるから從屬と云ふことは男に於けるよりは女に於いて遙に屢々であり、また激しくもあるのだ。併し男の從屬と云ふことも現代に於いては古代に於けるよりも遙に屢々起るやうになつた。吾人が男の性的從屬と云ふことを研究し得た限りではそれは男の心理的不能が或る女に依つて克服された結果であることが分つた。で、それ以來その女に對してその男は離れられない心持を抱くやうになる。多くの驚くべき破婚幾多の悲劇的な運命——而もその及ぼすところも重大なる——は右のやうな事情から來るものと解して始めて、合點が行くのである。

次に述べる如き原始民族の態度で見ると、彼等は處女性に何等の價値をおいてゐない、その證據に彼等は處女の破瓜を結婚以外に、結婚による最初の交接以前に行はしめるではないか、と云つてしまつてはこれを正しく說明したことにはならないのだ。寧ろそれは反對であるらしく彼等にとつてもまた破瓜は重大な意義を持つ行爲であるが、併し破瓜は一つのタブー（神聖にして同時に忌まはしきも

の）の對象となり、宗教的とも名付くべき禁斷の對象となつたのである。破瓜を花婿や後に少女の夫となるべき男に委せずして、習俗はこの行爲を新郎にはさせない事にしたのである。(一)

註（一）クローリー『神秘の薔薇』Crawley: The mystic rose, a study of primitive marriage, London 1902 バルテルス・プロス『博物學及び民間傳承に於ける女』Bartels-Ploss : Das Weib in der Natur-und Völkerkunde, 1891 フレーザーの『タブーと魂の危險』Frazer: Taboo and the perils of the soulの處々。ハヴロック・エリス『性心理研究』Havelook Ellis : Studies in the psychology of sex。

から云ふ禁斷が習俗中に嚴存してゐることに對する文献的證據を完全に蒐集し、地理的にはどの程度まで廣きに亘つてゐるか、またその形式には如何なる種類があるかなどゝ云ふ事を數へ上げようとする意圖を私は持たない。(一)私としてはたゞ、現在の野蠻人の間にも結婚者以前の者が處女膜を除くと云ふ風習が可成りに行亘つてゐると云ふだけで十分なのである。クローリーはかう云つてゐる。――『この結婚儀式と云ふは夫以外の或る指定された人物が處女膜を穿つことなのである。これは文明の程度の低いところ、殊にオーストラリアなどに於いては極めて普通である。』と。(二)

註（一）わが國では文學士二階堂招久(匿名なりと云ふ)著、廢姓外骨序『初夜權』(大正十五年初版南海書院發行)がこの種の事實を豐富に報告してゐる。(譯者)

（二）前掲の『神秘の薔薇』三四七頁。

併し破瓜が結婚に依る最初の交接に依つてなされないとすれば、すなはち破瓜は豫め——何等かの方法で、何れかの側からか——行はれなければならないことになる。私はクローリーの前揭書中から二三の個所を引用するであらう。それ等は我々にこの點に關して敎ふるところ大であるが、併しまた吾人はこれに對して二三の批評を試みなければならない。

一九一頁『ディーリー Dieri 並びに二三の隣接種族（オーストラリア）に於いては、處女が思春期に達した時に處女膜を破ると云ふのが一般の風習になつてゐる。ポートランド Portland 並びにグレネルグ Glenelg 族に於いては老婆が花嫁の破瓜をすることになつてゐる。また時としては白人がさう云ふ意圖で處女を破瓜するやうにとて依賴されることがある。』

三〇七頁『處女膜を故意に破ることは屢々幼年時代にも行はれるが、大抵は思春期に於いてゞある。それは屢々（現にオーストラリアに於いてはさうであるが）交接の儀式と同時に行はれる。』

一二四八頁『處女膜は人爲的に破られ、それからこれをなすことを許されてゐる男たちがこの少女と（よく云へば、儀式上の）交接をするのである。全行程は云はゞ二つの行爲から成つてゐる。——處女膜の破却とその後の性交とである。』

三四九頁『アフリカのマサイ Masai 族に於いては破瓜の操作は結婚準備の最も重大なる一つとな

つてゐる。マレーのサカイス Sakais 族に於いても、スマトラのバッタス Battas 族に於いても、セレベスのアルフォエルス Alfoers 族に於いても、破瓜は花嫁の父に依つて行はれる。フィリッピンに於いては、既に幼年時代に於いて處女膜がそれを仕事にする老婆に依つて行はれてゐなかつたならば、花嫁の破瓜を仕事とする一定の男たちに依つて行はれる。或る二三のエスキモー族に於いては、花嫁の破瓜は僧侶(アンゲコク)に一任されてゐる。』

私がこゝに引用した言葉に就いては二つの云ふべきことがある。第一に遺憾なことは、右引用の文章に於いては、交接なくして單に處女膜を破却することゝ、破却の目的のための交接との區別が細かくついてゐない。たゞ或る個所に於いてこの過程が二つの行爲に分れてゐることを、(手又は道具を以てする)破瓜とその後の性行爲とに分れてゐることを、告げてゐる。バルテルス・プロスの著は他の點に關しては材料極めて豐富であるが、今云つた如き目的のためには甚だ役に立たない。何故ならばこの書に於いては破瓜の解剖的効果の蔭にかくれてその心理的重大さが全然忘れられてゐるからである。第二には、かゝる場合に於ける『儀式的な』(純粹に形式的な、お祭り的な、お役目的な)性交と正當な性的交接とが何に依つて區別されるかを知つて喜ばしいのである。私が接した學者たちはそんな問題に言及することを恥ぢるか、或はさう云ふ性的な細かしい事の心理的意義を低く評價した。旅

行家や布教師の其の報告はもつと精細でありもつと曖昧でないだらうと思ふのであるが、併し今日ではこれ等の、大抵は外國の、文献は手に入り難くなつてゐるので、これ等に就いて何も確かなことは云へない。その他、この第二の點に於ける疑ひに關しては、かう考へ直して見ることも出來よう。即ち、この儀式的の假交接は既にこれより以前に完全に行はれてゐる假交接の代償であり仕直しであるに過ぎないのであらうと。(一)

註（一）花婿以外の人物、例へば花婿の世話人やお伴（ドイツの風俗で云ふ „Kranzelherren“）に花嫁を性的に自由にすることが許されてゐたと云ふことは、右に擧げた結婚式の無數の場合に就いては疑ひの餘地がない。

處女性のこのタブーを説明するために種々な契機を持出すことが出來るであらうが、それ等を私は玆にざつと述べて見よう。少女の破瓜に際しては流血を見る。そこで説明の第一の試みとしては原始人が元來血は生命の座であると考へてゐたほどであるから、この流血を嫌つたゝめだと云ふ説がある。この血のタブーは性慾には緣のない種々多樣な規則の證明するところに依ると殺す勿れの命令と關係があり、本來血に渇ける原始人が殺人の快を制する因となつたことが分る。かゝる考へ方に於いて處女性のタブーは、殆ど例外がなく保持されてゐる月經のタブーと關係がある。原始人は月々に流血を

見ると云ふ不可思議な現象をサデスィティッシュな觀念なしに見ることが出來なかつた。月經、殊に最初の月經は或る靈獸に嚙付かれるためであるとは彼等は解した。恐らくその靈體と性的交接の徵象と解した。時としてはこの靈體を祖先のそれと認めてゐる。そこで我々は或る他の觀察にも依憑して月經の出る少女をこの祖先の靈の所有なるが故のタブーであると解するのである。

註（一）『トーテムとタブー』（本全集第七卷）參照。

併し他の方面を見ると、あまり流血の忌みなどゝ云ふことは重視すべきでないかも知れぬと云ふ氣もする。現に男兒の陰皮を切斷したり、更に殘酷なのは女兒の陰核や小陰唇を切取つたりする風習が上に述べた同じ民族間に或る部分行はれてゐたり、またこれ以外にやはり流血を見るべき儀式が平氣で行はれてゐるところを見ると、流血の忌みだけで處女性のタブーを說明し切れない。であるから、始めての合衾に際して、この流血の忌みが新郎にとつて都合よく克服されると云ふことは、敢へて驚くに足りない。

第二の說明は同樣に性から離れた見方であるが、併し遙かに一般的なものゝ中に這入り込んで行く。曰く、原始人は不斷に或る强迫に捕はれてゐる。丁度吾人が精神分析からして强迫神經病患者がさうであると斷ぜられると同樣に――。そのやうな强迫癖が最も强烈に擡頭するのは、如何樣な點に

於いてか普通とは違つた機會、何か新しい、豫期せざる、譯の判らぬ無氣味なところのある機會に於いてゞある。そこからして儀式が生じてこれが後に宗教となつたのであるが、この儀式なるものは何でも新しい事をやり出す始めに、一切の時期の始まりに人間、動物、果實の最初兒の出産に結び付いてゐるのである。强迫癖ある者が危險の脅威を感ずるのは始めて或る危險な立場に立たんとする場合にしくはない。そこでさう云ふ危險な立場に對して自己を防禦すると云ふことは甚だ合理的でなければならない。結婚に依る最初の性交と云ふことはその意義から云つても愷に、さう云ふ警戒の標準となるべき規則に依つて指導せられたいと云ふ要求があるわけである。これ等二つの説明の試み（流血の忌みからの試みと初穗の恐怖からの試みと）は相互に矛盾せず、寧ろ相互に助け合ふ最初の性行爲は、もしそれに依つて流血を見るとすれば、愷に愈々心配になる行爲でなければならない。

第三の説明——これはクローリーが殊に支持する説であるが——は、處女性のタブーと云ふことが性生活の全體を抱括する廣大な關係に屬すると云ふことを强調するものである。女と最初の性交がタブーであるばかりでなく、性交一般がタブーである。一歩を進めて、女は全體としてタブーであると云つてもいゝのだ。女は性生活と密接な關係のある月經、妊娠、分娩、産褥などの特別の立場に於いてタブーであるばかりでなく、それ等以外でも女との交接は重大な制限をいろ〳〵と受けるもので、

野蠻人の性生活でさへも、これは一見自由無拘束のやうに見えるが、種々な理由からして實はさうでないのだらうと思はざるを得ないほどである。原始人の性慾は一定の機會に於いては一切の禁制を超越することは本當である。併し普通には彼等の性生活は文明程度のもつと高い人間の性生活以上に強い禁斷に拘束せられてゐるやうである。男子は長旅、狩獵、遠征など何か特殊なことを企てるや否や妻と、妻との性生活から離れなければならない。でないと彼等の力は減じ、失敗を招くであらう。また日常生活に於いても兩性を互に引離しておかうとの傾向は見遁すことが出來ない。女達は女達と共に生活し、男等は男等と共に暮す。現在の如き意味に於ける家庭生活は大抵の原始民族に於いては見られない事であつた。その隔離は時として極端であつて一方の性は異性の個人的の名を口にするさへ許されなかつたほどであつた。女の言語はその特別の語彙を以て發達したほどであつた。性的要求はこの隔離の障碍を常に新たに突破することを許されたが、併し多くの種族に於いては夫婦の會見と雖も屋外や祕密裡に行はれなければならないのである。

原始人の間に一つのタブーが確立されると、彼等はそこに一つの危險を感じた。で、總てこれ等の回避の掟に於いて女に對する畏怖が主要になつてゐた。恐らくその畏怖の根抵となつてゐるところは女は男と違つて永遠の謎であり祕密であり、得體の知れないものであり、從つて男には何となく敵對

的であると云ふにある。男は女に依つて弱蟲にされることを畏れるのだ。女らしさに感染して段々墮弱になることを虞れるのだ。性交が人を睡眠にさそひ、緊張を弛める効果は右の畏怖の原型となつてゐるものであるかも知れない。また性交に依つて女が男の上に及ぼす影響を知覺し、かくてまた女に心を牽かされることを思へば、かゝる畏怖の一般に廣がつてゐることは當然である。總てこれ等の畏怖は古くなつてしまつたことではなく、我々の間になほ生き殘つてゐる。

現存してゐる原始人を觀察した多くの人々はみな、彼等の戀愛生活が比較的弱く、我々が文明人の戀愛生活に於いて見るほどの激しさを持つてゐないと斷じてゐる。中にはこの判斷に反對してゐるものもあるが、併し彼等とても原始人の間に或る力が存在し、その力がタブーを振ふので彼等は戀愛を避け女を怪しきもの、敵對的なものとしてゐるとは必ず云つてゐる。

精神分析の常用術語と極僅かしか違はない言葉で以てクローリーは云つてゐる、各個人は『個人的孤立のタブー』に依つて他人から區別され、他の諸點ではよく似てゐるのに僅かに違つてゐると云ふだけで他人視と敵視とが彼等の間に行亘つてゐると。この觀念を追及し、この『小異のナルチスムス』からしてあの敵愾心（あらゆる人間的關係に於いてそこに存する共同聯結の感情に矛盾して存在し、また一般的な人類愛の命令を克服するのを我々が見るところの敵愾心）を論證せんとするは、甚だ興

味ある問題であらう。男はとかく女に對して獨尊的(ナルチスティシュ)な(屡々輕視と感違ひされてゐる)擯斥を與へるものであるが、その根抵の主要なるものは次の事にあると精神分析は判知したのである。即ち、去勢コムプレクスなるものがあつて、それの影響に依つて女に對する判斷が固まつてしまつてゐるのである。

併しこの最後に云つたことは、我々の只今の問題を逆に飛越えてしまつてゐることを我々は氣付くのである。女一般のタブーだけでは、何故に個人として處女との最初の性交に對して特殊の掟が生ずるのかと云ふことに就いての說明がつかない。これに關しては我々は最初の二つの說明(流血の忌みと初穗の忌みと)を與へられてゐるだけで、これでは我々も問題のタブーの命令の核心を指摘してゐないと云はざるを得ないであらう。このタブーの明かに根抵をなしてゐるのは、後に來るべき夫に何物かを拒否し何物かを與へざらむとする意圖である。最初の性交と離すべからざる何物かを與へざらむとする意圖である。而も吾人がこの問題を論じ始めたあたりに於いて云つた通り、女がさう云ふ最初の男に特別な執着を持つものであるのだが....。

ではこのタブーの掟の由來は何であるか、窮極の意義は何であるか、それを論ずることは我々の只今の仕事ではない。その仕事を私は拙者『トーテムとタブー』の中で致しておいた。同書中に於いて

私はタブーに對して本來的にアムビヴレンツの條件ある事を明かにし、またタブーの起源が前時代の過程（そこから人間の家族の基礎が出來るやうになつた）から生ずるとの説を辯護しておいた。今日觀察せられる原始人のタブーの風習からは、さう云ふ前時代的意義はもはや認識することは出來ない。さう云ふ認識を得ようとするに當つて我々はとかく忘れがちになることは、彼等野蠻人も時代的には我々のと同じやうに古い文明の中に、よしんばその後の發達こそ違つた段階を示すやうにこそなつてをれ、同じ程に古い文明の中に生きてゐるのだと云ふことだ。

今日我々が野蠻人に於いて見出すタブーは旣に作爲的な體系に編み上げたものになつてをり、丁度我々の間の神經症患者がその强迫症中に作り上げる體系と同じやうであり、また舊い動機は調和的に統一された新しい動機に依つて置換へられてゐるのだ。で、我々はタブー發生上の問題を放棄してしまつて、原始人は凡そ危險を感じたところへは何時でもタブーを持出したのだとの見解を持したいと思ふ。この危險は一般的に見れば心理的な危險である。何となれば原始人等は我々には認めざるを得ないやう思はれる二つの區別を假定するに及ばなかつたからである。彼等は物的の危險と心的の危險とを區別しなかつた。現實上の危險と想像上の危險とを區別しなかつた。從つて彼等の世界觀は萬靈的（アニミスティッシュ）となり、その世界觀中に於いては彼等と同樣靈を具へたる森羅萬象は總て敵對的意圖を持つと云ふ

危險があるわけになる。即ち自然力からも他人や動物からも危險がせまつて來ると云ふことになる。併し他方に於いて彼等は、自分の心內の敵對感情を外界に投出する習慣があつた。つまりその敵對感情を對象（彼等が好意を持たず、また赤の他人として感じた對象）に、塗りつける習慣があつた。さう云ふ危險の源泉としては今やまた女が認められることになる。そこで女との最初の性交は特に激しい危險であると見做されるやうになつた。

この大袈裟に考へられてゐる危險とはどんな危險か、また何故にこの危險を後に夫たるべき者が怖れるのか、これ等に就いては、我々が今日の文化段階に於ける婦人が同樣な事情に於いて如何なる態度をとるかを調べて見れば、その說明がつくと私は信ずる。これを調べて如何なる結果に達するか、それを豫想して見ればかうである。さう云ふ危險は實際存在してゐる、原始人等はよしんば心理的な危險にもせよ、その危險の存することを正しく豫感して、それに對する防備として處女性のタブーを作り上げたのである。

婦人は性交の後に滿足の高潮に於いて男を抱き締めるが、これは常態的な反應として吾人の認めるところであり、またそれは彼女等の感謝の表現であり末長く從屬することの誓ひであると見られる。併しながら我々の知つてゐる通り、最初の性交の結果に於いて女がこの態度を必ずしも常に示すもの

とは限つてゐないのだ。最初の性交は女にとつては、屢々失望を意味する。それで女は冷淡な不滿な樣子をしてゐる。女が性交に於いて滿足を覺えるやうになるのは相當永い時期を經、幾度も性交を反覆して後に於いてゞある。かう云ふ冷感が始めの内だけでやがて漸次に薄らいで行く場合もあるが、それには程度があつて、いつまでも冷感が去りやらぬと云ふ誠に困つた場合もあつて、かう云ふ場合には男は幾ら柔しくして骨を折つても駄目である。女のかゝる冷感はまだ十分に理解されてゐるとは私は信じない。で、男の方に十分な性交力がないためにかゝる結果になつてゐる場合は別として、それ以外の場合は恐らくその密接的な現象からこれを説明し得ると思ふ。

最初の性交以前に逃出さうと試みる者が屢ゝあるが、これは私はこの場合問題にしないでおかうと思ふ。何となれば、これはその意義が多樣であり、また第一に（全然とは云はないまでも）婦人に一般的な防禦的努力の表れとして考へらるべきものであるからだ。然るに私は信ずるのである、或る病理的な場合が女の冷感の謎に側光を投ずると云ふことを。その病理的な場合と云ふは、女が最初の交り（いや新たな交りの場合には何時でも）に男に對して公然と敵意を表はし、男を罵つたり、手を擧げたり、時には實際に毆つたりすることである。この種の著しい場合を私が精神分析的に立入つて研究して見たことがあるが、その妻君は夫を非常に愛し、性交を自分の方から常々求めてをり、また性

交を明かに滿足してゐるに拘らず、さう云ふ事が起つてゐるのである。私の考へでは、成功の結果が反對になると云ふこの不思議な反應は、普通にはたゞ冷感となつて表れるのと同じ感情であると思はれる。つまり性交の成功に依る滿足を感じてゐながらそれを表はさないやうにし、柔しい反應を禁壓することの出來る女なのである。右に擧げた病理的な場合に於いては、普通にはたゞ冷感として一つに合致してゐる（合致してゐる場合の方が遙に多い）要素が云はゞ二つに分裂してゐるのである。それは丁度、强迫神經症の徵候が、旣に久しく我々の氣付いて來た通り、二つの時期に別れて（或時にはなつかしがり、別の時には恐れる）表れるのと同じやうである。で、女を破瓜することに依つて危險が迫來ると云ふのは、それに依つて女の敵意を招くと云ふことなんである。であるから、後に夫となるべき男がさう云つた敵意を避けようとするのは至極尤なことである。

ところで、さう云つた逆說的(パラドクス)な態度は女の如何なる感情がその存在に與つてゐるかと云ふに、これを判知するに精神分析を以てすればさして困難でない。最初の性交に依つて一聯のさう云つた感情（望ましい女らしい心持とはなり難い感情）が動き始める。それに後の性交にはまたと起つて來ないやうな要素もその內には二三含まれてゐる。第一にこの場合に人々の考へることは、處女が破瓜に際して苦痛を甞めると云ふことである。實際人々は恐らくこの契機を決定的なものと思ひ、他の男を求める

心持を絕ち切ると考へる傾きがある。併しさう云ふ意義は苦痛のために生ずると云つて果していゝかどうか。寧ろそれよりは性機關を破られたところから來る自尊心の毀損と云ふ點を想定しなければならない。破瓜せられた者がその後に性的價値を低く見られることを知つて憤慨すると云ふは、右の自尊心の毀損の合理的代表である。併し原始人の結婚の風習を見ると、そのやうな買被りをしないやうに警戒してゐるところがある。我々の聞及んでゐるところに由ると、大抵の場合に於いて儀式は時期を別にして二度行はれる。一度は手叉は道具を以て處女膜を破却し、その後法式的の性交、叉は假性交が夫の代表者に依つてなされる。それに依つて見ても、タブーの掟の意味は解剖上の破瓜だけでは充足されない。痛い目に會はされたことに對する妻の反應以外になほ夫たるものゝ爲めには回避してやらねばならない何物かの存することが分るのである。

最初の性交に依つて失望する事の原因としてなほ他に次の事が存するのを我々は知るのである。即ち、少くとも文明婦人の場合に於いては最初の性交に對する期待と實現とが一致し得ないと云ふことである。性交と云ふことはこれまで禁斷と云ふことゝ最も強く聯想されてゐた。合法的な、許されたる交りはそれ故に、禁斷の感じがなかつた。性交と禁斷とが如何に內的に結合されてゐるかは、大抵の新婦の態度を見ても殆ど滑稽なほどそれが現れてゐる。彼女等は實際上さう云ふ必要もなく、また

何處からも苦情の出る筈がない場合にでも、總ての他人にその事をひた匿しに匿しておく、いや兩親にまでもそれを秘密にしておくと云ふ有樣である。娘たちは他人に知られては自分等の戀愛の價値が失くなると判然云つてゐる。時々はかゝる動機があまりに猛烈になつて來ると、戀愛から結婚に進展して行くことさへ阻まれるほどである。女のなごやかな（感傷的）感情は公然許されてゐない、秘密のものとなつてゐる關係に於いて始めて發動するのである。つまり何人にも影響されない自分自身の意志を確實に知つてゐるその關係に於いて始めて發動するのである。

併しながらまたこの動機は十分に深くは達しない。この他、これが文明的條件に結付くと、原始狀態へのよき關係の失はれたことを嘆ぜしめるやうになる。で、最初の契機、リビドー發達史に基く最初の契機が愈々その意義重大となるのである。幼兒時代に於けるリビドーの抑制と云ふことが如何に萬人に必然的であり、如何に强烈であるかは精神分析の努力に依つて我々にまでよく分つてゐるのである。その抑制と云ふのはつまり、幼兒時代に於いて性的影響を禁壓することである。女に於いては大抵は父またはその代償たる兄に對してリビドーを定着させることである。またその願望とは、性交以外の何事かに屢々向けられた願望であるか、或は漠然それと認識される目的として性交を包含してゐる如き、さう云ふ願望である。夫はいつでも云はゞ代理人である、決して本人ではない。女が意中

の第一の人は夫以外の者（その典型的な場合には父）であつて、夫は次席候補に過ぎない。であるから、この定着が如何に激しく、その保持が如何に執着であるかどうかに依つて、代償者たる夫が不滿足として拒否せられるかどうかと云ふになつて來るのである。從つて女の冷感症と云ふことは神經症發生の條件に基いてゐるのである。女の性生活に於ける心的要素が強くあればあるほど、最初の性交の感動に對するリビドーの配分への抵抗が強くなつて來るし、肉體を自由にされることの効果も愈々微弱になつて來るのである。そこで冷感と云ふことは神經症的禁制となつて定着するし、また他の神經症の生ずべき素地を供することになる。また男の性的能力が非常に低められて來ると、これだけでも女の冷感を助長するものとして大いに問題になつて來る。

早期の性的願望が如何なる動機から生ずるかに就いて考慮すべきは、原始人の性的風習であるやうに思はれる。彼等の風習に於いては處女の破瓜は最年長者に、僧侶に、神官に、つまり父代償に（右の論を參照せられよ）委任せられてあつた。中世君主の初夜權（Jus Primae noctis）と云ふことは屢々論議せられたが、これを説明するものは右の父代償への破瓜委任の風習である。ストルファー(一)はこの立場を代表する者であるが、それのみならずまた彼は、廣く行き亘つてゐる『トービアス結婚』（„Tobiasehe,“最初の三夜を禁慾にて過す風習）の制度をも長老者の特權を容認したものとして解釋

してゐる。尤も、それは彼より以前に、既にユング(二)がその解釋を下してはゐる。で、この破瓜を委任されてゐる父代償を神の姿として認めるならば、我々の期待する如き結論がそこから出て來るわけである。インドの多くの地方に於いては、新婚者は處女膜を木製の男根形神(リンガム)に捧げることになつてゐる。また聖アウグスチヌスの報告に依ればローマの結婚儀式(彼の當時?)に於いて同じ風習が存在してゐた。但しそれが多少弱められて、處女は豐饒の神(Priapus)の巨大なる石造男根の上に載せられなければならないと云ふだけになつてゐた。(三)

註(一) A.J. Storfer : Zur Sonderstellung des Vatermordes, 1911(父殺しの特殊の意味)

(二) C.G. Jung: Bedeutung des Vaters für das Schicksal des Einzelnen. (個人の運命に對する父の意義。)

(三) プロス、バルテルス共著『女』Pross u.Bartels: Das Weib. デュロール著 Dulaure: Des Divinités génératrices. Paris 1885. 譯者曰、日本の道祖神(サイノ神又はコンセイ様)も正にこれと同じ意味を持つものであることは疑ひの餘地がない。次に中山太郎氏の『道祖神を撫でる娘達』(講談雜誌、昭和五年三月號)の一節を引用しておく。

『山形縣の酒田町では、現今でも町内で道祖神と稱する祠を祭り、毎年正月に三尺ほどある木製の神體を持ち廻つて、若い娘達に××せる風習があり、これを××と早く良縁が得られると信じてゐる。然してこの風習に似て、更に露骨なものが九州に殘つてゐる。肥前國北高來郡有喜村大字鶴田の田圃中に、一基の石製××がある。近郷の娘達は結婚式が迫つて來ると、夜更に母か姉に連られて此の石神に參詣

する。同地方では「神さまを撫でたか」と云ふことは、即ち「×あげを濟したか」と云ふことだと傳へられてゐる。かうした風習はまだ姿を變へて各地に殘つてゐるが、その起源は、我國では古く神々が處女の初夜權を有してゐたことを説明してゐるのである。

『三河の長篠町附近の村々では、結婚して三日の間は「お蛭子樣にあげる」とて、新郎新婦は合衾せぬことになつてゐる。上州高崎市の茶問屋久保田孝次郎の家では、家風として新婚の若夫婦を七十五日間同棲させないので、若夫婦が驅落したことさへある。そして此の初夜權が神から人の手に移ると、代々の將軍や大名などが、好んで用ゐた××權利である。』云々。

なほもつと深い層にはまた他の動機がひそんでゐる。男に對する逆説的な反應を女が示すその主なる責がこの動機に存することは明かである。この動機の影響が女の冷感となつてまだ表れてゐると私は考へるのである。最初の性交に依つて女に於いて、先に説明した感情（女の一般的な機能や役割に撞着する感情）とは違ふ、古い感情が活動を始める。

多くの神經症的婦人を分析して吾人の知つたところに依ると、彼女等は嘗てその兄第を男の徵象を持てるが故に妬んだ、さうして自分にはその徵象が缺けてゐる（本當は小さいのだが）が故に退け目を感じた時代があつたのである。吾人はこの『男性器嫉妬』“Penisneid”を『去勢コムプレクス』“Kastrationkomplex”に包含せしめるのである。もし『男性的（メンリヒ）』を男性的たらんとする意志 Männ-

lichseinwollen と云ふ意味に曲解するならばかゝる態度を『男性的抗意』,,männlicher Protest"(アードラー Alf. Adler の造語)と名付けて、神經症者一般にこれを認めることは必ずしも不適當ではなからう。この時代に於いて少女はその兄弟に對する嫉妬並びにそれから生ずる敵意を別に匿しはしない。彼女等はまた兄弟と同等であることを空しく示さむとて立小便を試みたりするものである。他の時には非常に愛してゐる夫を性交の後に無制限に攻撃する女の話を前に述べたが、この場合には對象選擇前にかゝる心境の存してゐたことが確認せられたのである。後になつて始めてこの少女のリビドーは父に向つたのである。その時、彼女は男性器を望む代りに、子供を望んだのである。(一)

註(一)『肛門性感論』,,Triebumsetzungen insbesondere der Analerotik." 1916(本全集第八卷)參照。

また別の場合にこの感情の時間的順序が逆になつてゐやうとも、さうして去勢コムプレクスのこの部分が對象選擇に成功した後に始めて效果を示さうとも、私は敢へて驚かないのである。併し女のこの男性的心境(男性器がある故に男兒を羨むこの心境)は、發達史的には常により古いのであつて、對象愛よりも自然發生的の自己愛(ナルチスムス)の方に一層近接してゐるのである。

さき頃私は偶然の機會で或る新婚夫人の夢を分析することになつたが、その夢には彼女がその處女性を失ふことに對する反應が認められた。その夢には若い夫を去勢しその男性器を自分の方に取つて

おきたいとの願望が歴然と表れてゐた。そこには慥にもつと無難な解釋（その行爲を長びかせておき又繰返したいとの願望であるとの解釋）を下し得べき餘地もあつたが、併しこの夢の多くの個々の部分はこれだけの意味以上のものを示し、また夢の本人の性格やその後の態度を見ると無難でない方の解釋の當つてゐる證據が見えるのである。この男性器嫉妬の背後に女の男に對する敵視的惡感性が表れて來る。この惡感情は兩性間の關係に於いては必ず何時でも認められるもので、その證據はこの惡感情から『解放された女』の努力と文献的所産に於いて最も判然と窺はれるのである。女のこの敵對感情をフェレンチは――氏が最初の人であるかどうか私は知らないが――或る太古生物學的思辨の中で兩性の分離時代にまで溯つてそこから發源してゐると斷じてゐる。氏の考へに依れば、始めには同樣な二人の個人の間に結婚が成立つたが、併しその内の一方が強くなつて行つて弱い方に性的結合を强ふるやうになつた。この屈辱に就いての憤りがなほ女の今日の位置にまで續いてゐる。かう云ふ思辨的考察を認めることは自由であらうと思ふが、併しあまりに買被ることは避けなければなるまい。性的冷感に於いてその痕跡の繼續の認められる女の男に對する逆說的反應の動機を右のやうに數へ上げて見たが、今や我々はこれを一纏めにして次のやうに云ふことが許されるだらう。女の未完成な性感が、始めて女に性交を敎へる男に對して憤りとなつて爆發するのだと。併しかく觀ずれば處女性の

タブーと云ふことはなか〳〵意味深長となる。さうして當の女と永く生活を共にすべき男に對しては特にさう云ふ危險を避けるやうに命じた掟は成程と我々にも理解出來るのである。文明の程度がもつと高くなると從屬の見込がこのやうに危くなることをあまりに重要視しなくなるのである。女の方から進んで來なくなることの危險をあまり重要視しなくなるのである。處女性は財產として考へられ、男はこの財產を放棄することを肯んじなくなるのである。併し結婚生活の數々の支障を分析して見ると、女が破瓜せられたことに對する復讐をなさんとする動機は文明婦人の精神生活に於いてもまたなほ完全に解消してゐないことが分るのである。と云ふのは、如何に多くの場合に於いて女はその最初の結婚には冷感的で不幸であつたが、その結婚が破鏡に終つて第二の夫に對しては柔しい滿足げな妻となる事實は屢々人々の目擊して驚くところであると云ふことである。古代的の反應は云はゞ最初の對象に就いて解消してしまつたわけである。

處女性のタブーは、併しながらそれとは別の意味ではやはり我々の文明生活に於いても低落しては居ないのだ。民衆の心はよくこのタブーを心得て居り詩人はまたこの材料を時々利用してゐるのである。アンツェングルーバー Anzengruber (1) の或る喜劇の中で、單純な百姓の若者が自分の嫁になる女と結婚することを抑制するのである。何となれば彼女は『始めて結婚する者にはその生命に拘はる

程な賣女だ』からである。そこで彼はその女を他の者に嫁がせ、それから出戻りとしてそれを迎へよう、さうすれば危險はないと云ふわけである。その作の題たる『毒見』(ドクミ),,Das Jungferngift" と云ふのからして、まるで蛇使ひが毒蛇を扱ふにまづその蛇をして布片を嚙ませて毒をなくしてしまふのに似てゐる。(二)

註（一）ギイン生れの農民劇詩人。（一八三九年――一八八九年。）（譯者註）

（二）シユニツツレル Arthur Schnitzler の非常に引き締つた傑作『ライゼンボク男爵の運命』,,Das Schicksal des Freiherrn v. Leisenbogh" は立場に多少違つたところもあるが、やはりこの類に入れることが出來る。戀愛戰場の古武士たる或る女優と關係した男が不幸にして彼女と別れることになつたが、別れるに際してその男は、自分の次に彼女を手に入れる男には死の呪ひをかけると云つた。そのためにその女には云はゞ第二の處女性が與へられたのである。このタブーを掛けられた女は自分でもその後暫くは戀愛交渉を絕つてゐた。ところがやがて彼女は或る聲樂家と戀愛することになつたが、その聲樂家との關係に入る前に、永い間彼女に云ひ寄つてまだ思ひを果さなかつたライゼンボツク男爵に一夜を與へることにしようと云ひ出した。男の方でこの望ましからぬ戀愛の幸福を味つたならば、卒中で倒れるだらうと云ふやうな恐れを感ずるのであつた。

處女性のタブー並びにその動機の一部分は或る有名な戲曲中の人物に於いて最も力强き表現を得てゐる。即ちヘッベル Hebbel（一）の悲劇『ユウディットとホロフェルネス』,,Judith und Holofernes" の

女主人公ユウディットがそれである。ユウディットはその處女性がタブーに依つて守護されてゐる如き女の一人である。彼女の最初の夫は新婚の夜に力萎えて、再び彼女に觸れる事を敢へてしなかつた。『私の美しさは毒草の美しさぢや』と彼女は云ふ。『彼女の美を味へば氣は狂ひ、生命は亡ぶ。』アシリアの戰將がこの町を襲ふた時、彼女は已れの美を以て敵將を惑はし陷れてやらうとの計畫を立てた。かくて愛國的の動機を性的動機の下に匿して出掛けて行つた。暴虎憑河の力を自慢にする男に無理やりに破瓜せられた後に彼女はむら〳〵と反逆の心を燃え立たせ、遂に見事に敵將の首を掻き切つて故鄕の町を危急から救つたのである。首は去勢の象徵的代償として我々によく知られてゐることである。從つてユウディットは自分を破瓜した男を去勢した女である。新婚者から私が聞いたと云ふ夢が正にこのユウディットの如くに去勢せんとの意志を示したものである。ヘッベルは舊約の秘經の中の愛國的の物語を意圖的に性慾化してゐることは明かである。何となれば秘經の中では歸つて來てから自分が男に瀆されなかつたことを誇つてゐるからである。また聖書の文中には彼女の無氣味な結婚の夜の事に就いては何の示唆もないからである。併しヘッベルは詩人の敏感を以て處女性タブーの古き動機を、(聖書などゝ云ふ傾向的な書物の中に教訓として書いてあるに拘らず)直覺し、この材料に古き內容を復活して盛り直したのである。

註（一）オーストタリ劇詩人（一八一三年—一八六三年）その作品は殆ど全部吹田順助氏により邦譯せられてゐる。（譯者）

サドガー I.Sadger は非常に見事な分析に依つて、如何にヘッベルが兩親コムプレクスからこのやうな材料選擇をなすやうになつたかを、また兩性の鬪爭に於いては常に女性の味方となり、また女性の最も秘めたる心の動きを感じ得るやうになつたかを、細論してゐる。（一）彼はまた、詩人が何故に材料を變更したかその動機に就いて語つたところを引用してゐる。さうしてその變更が如何にも當然な變更であることを知り、また如何にして詩人自身には無意識的なものが表面的には尤らしくなり、內面的には匿されるやうになつたかを發見してゐる。聖書の物語では寡婦となつてゐるユウディットが何故に處女寡婦とされることになつたかに就いてのサドガーの說明を私は云々しようとは思はない。」そこには兩親の性交を否認して母を淸淨なる處女と見ようとの幼兒的空想の意圖がそこに見られるとサドガーは云つてゐる。併し私の考へを續けて見ればかうである。——詩人がその女主人公を處女性であることにしてしまつた後に、彼の同情的空想は處女性を傷けられることに依つて發動し來る敵意的反應と云ふことについて停滯してゐた、と。

註（1）„Von der Pathographie zur Psychographie," Imago I, 1912,

結論として吾人はかく云ふことが出來る。――破瓜は妻を永く夫に結付けておくと云ふ文明的結果を持つのみならず、また夫に對する敵對感情と云ふ古代的な反應を解放するものである。この反應は結婚者の愛情生活が禁制されると云ふ現象となる事に依つて病理的形態をとることがある。また第二の結婚が第一の結婚よりも甚だ屢々成効に終ると云ふことはこの古代的反應のせいであると見ることが出來る。處女性タブー、原始時代の夫をして破瓜を避けしめたかの嫌忌、これは一見不思議のやうに思はれるが、このやうな敵對的感情がそこから反應し來ることを思ふては、尤至極でなければならない。

我々が分析眼を以て婦人を觀察して居ると、從屬と敵對との對立的反應が二つながら表れてをり、而も最も內奥に於いてはこれ等兩者が緊密に結び付いてゐるのを見るのは甚だ興味あることゝなつて來る。世にはその夫と全然分離してゐるやうに見えてゐて而もやはりどうしても別れられないと云ふ婦人が隨分あるものである。その愛情を他の男に向けようとするといつでも最初の、今では愛してもゐない夫の面影がそれを禁制するものゝ如く立塞さがつて來る。それを分析して見ると、それ等の女はやはり從屬的にはその最初の夫にひかされてゐるのだが、併し感傷的(ツエルトリヒ)な心持からではない。彼女等はその夫に對してまだ復讐を果してゐないので、彼等から離れられないのだ。念入りな場合に於

いては、復讐をしたい感情が一度も意識されないことさへある。

『文明的』性道德と近代の神經病

始めて雜誌『母性擁護』（一九〇八年）に發表。原書全集五卷に收載。原名は
„Die kulturelle Sexualmoral und moderne Nervosität"

フォン・エーレンフェルス von Ehrenfels はその最近著『性倫理』(一)の中で、『自然的』性道德と『文明的』性道德との區別に就いて相當の紙數を費してゐる。自然的性道德とはそれを守ることに依つて或る人間族が健康と生活適合力とを保持し得る如きものであり、文明的性道德とは、これに從ふことに依つて人間が激烈な、生產的な文明的仕事に促される如きものであると云ふのである。この對立を最もよく闡明するものは、或る民族の體質的及び文明的の所有である。この意義深き思考をなほ調べて見たい人々は直接エーレンフェルスの著書に就かれることをお薦めしておいて、只今私はたゞ自分の論に必要な限りに於いて彼の論を引用して見よう。

註(一) Grenzfragen des Nerven-und Seelenlebens, herausgegeben v. L. Löwenfeld, LVI, Wiesbaden 1907.

文明的性道德の支配するところには個々人の健康と生活適合力とが損傷せられること、彼等に課せられる犧牲に依つて窮極的に彼等の被る損傷は非常な度に達すること、またこの迂路のために文明それ自身の窮極的目的が危殆に瀕することなどは、これを想像するに難くない。エーレンフェルスは、また實際に我々の現在の西歐社會を支配してゐる性道德に就いて一聯の有害なる點を指摘し、それ等の點がこの性道德から來てゐることを明かにしてゐる。さうして彼はよしんばそれ等の性道德は文明

促進のために大いに力あつたことを十分に認めはするが、然し改造を要するものであるとの斷定に到達してゐるのである。我々を支配してゐる文明的性道德の特質としては、男性の性生活の上に女性的要求が傳染して行つてゐること、並びに一夫一婦以外の一切の性交が禁止されてゐることである。併し考へて見れば自然は人間の性を種々にしてゐるのであるから、男の些細な誤ちはとにかくあまり嚴しく罰せず、さうして事實上二重の道德を男に對しては許す必要が生じたのである。併しこのやうな二重道德を容認してゐる社會は『眞理愛、名譽(正直)、人道』(一)に於いて一定の、狹く限られた程度以上に出でることは出來ないし、その成員をして眞理を隱蔽し、醜惡を粉飾し、自他を欺瞞せしめることにならざるを得ないのである。文明的性道德がなほもつと有害な効果を及ぼすのは、一夫一婦を讃美する事に依つて優良なる男性選擇と云ふ要素(この要素の感化に依つてのみ體質の改善はなし得られるのに)が缺けることになる。現に文明人の間に於いては優良なる生活者選擇と云ふことは人道や衞生に依つて最低位にまで下落してゐるからである。(二)

註(一)『性倫理』Sexualethik, S, 32ff 參照。

(二)右同書三六頁參照。

文明的性道德の重荷となつてゐる弊害の內にこの醫家が見落してゐる一つがあるから、それの意義

を私はこゝで細論して見よう。その一つと云ふのは起源がこの弊害から發して或る事の方へ近代人が愈々進んで行きつゝあると云ふ事である。つまり、我々の現在の社會に於いて速かに擴まりつゝある神經過敏のことである。時々に神經病患者自身が次のやうなことを云ふことに依つて、彼等の病苦の原因の中に體質と文明的要求との對立の觀察せられることを醫師に氣付かしめる。曰く。――『我々は家族中みな神經質になつてゐる。何となれば、我々は自分たちの素性が示してゐるよりはいさゝかよくなりたいと思つてゐるからである』と。また醫師は次の如き事を觀察して、屢々大いに考へさせられるのである。その父が單純剛健な田舍から出て來てゐる如き、さう云ふ人達が、粗野にして有力なる家族の後裔が、征服者として大都市に侵入し來り、その子供等が短時日の間に文明的に高い水準に昇つた如き、さう云ふ人達が神經病に罹つてゐるのである。併し就中、神經醫たちは『いや增し行く神經病』と近代の文明生活との間に明かに關係の存することを聲明してゐる。では、何處に彼等はこの關係の根抵を求めてゐるか、それを優秀なる觀察者たちの言葉からの二三の引用に依つて示して見よう。

エルブ W. Erb (一)曰く。――『そこで問題は自然に生じて來る。我々の現代の生活に於ける神經病の原因は只今卿等に說き聞かせた通りであるが、それ等の原因は今日のこの盛んなる病狀を說明し

得るほど、それほどの程度にまで達してゐるのであるかと。——さうしてこの問題は我々の近代生活とその形態とをざつと見亘したゞけで分る通り、恐らくあまり愼重に考込んで見なくとも肯定出來ることであらう。』

註（一）『現代のいや増し行く神經病について』„Über die wachsende Nervosität unserer Zeit,“1893.

『既に一聯のありふれた事實を眺めたゞけでもこの事は明かに判るのである。——現代の異常なる文化的成果あらゆる方面に於ける發明と發見、いや増し行く競爭に對して遲れをとらぬことなどは、たゞ偉大な精神的勞作を以てこれを獲得し、また保持することが出來るのである。生存競爭は愈々劇甚を極めこの競爭に參與すると云ふこと、それ自身が大きな實力を要することゝなつた。さうしてたゞ彼の精神力の一切を擧げて漸くそれを滿たし得るのである。それと共にまた個々人の要求、あらゆる方面に於いて生活享樂の慾望は增長し、前代未聞の贅澤は、今までそんな事には關係のなかつた民衆層の間にも浸潤して行つた。無宗教、不滿、慾望增大などは一層廣汎な民衆層の中に入込んで行つた。極度に繁劇を極める交通、世界を包まむばかりなる電信電話網などは通商往來の關係を全然變革した。一切は迅速と繁忙の中に過され、夜間は旅行のために費され、晝間は商務に利用される。『靜養旅行』さへもが神經組織に對して勞役となる。政治上、產業上、財政上の偉大なる危機は以前よりもつと廣

汎な範圍に亘る民衆を動亂せしめる。政治生活に參與する者は愈々普きに及んで來た。政治的、宗教的、社會的の闘爭、黨派の仕事、選擧の煽動、極度にまで走つてゐる結社制度などのために頭は上氣し、精神は常に新たな緊强を强ひられ、靜養・睡眠、休息の時間は奪はれる。大都市に於ける生活は常に愈々繁劇と不安とを增してゐる。衰へたる神經はその休養を激しい刺戟的な享樂に求めるやうになるが、その結果は一層疲勞を增すことになる。近世の文學が主として取扱ふ問題は、一切の情熱、肉感、享樂を煽り、一切の倫理的根本原則や一切の理想を蔑視せしめる底のものである。そこに現れる人物は病理的であり、讀者の前に提示される問題は病的性心理の問題、革命的、その他の問題である。我々の耳を襲ひ來るものは騷々しい、壓倒的な音樂であり、劇場は亢奮的表現を以て一切の感覺を奪ひ去る。また造形美術は厭はしいもの、醜いもの、亢奮を與へる如きものを好んで取扱ひ、凡そ現實が提供し得る最も忌まはしいものを我々の眼に提示することを敢へて辭さないのである。』

『近代文明の一般的樣相を右のやうに述べて見たゞけでも、そこに如何にその文明發展の一聯の危機が含まれてゐるかゞ分るのである。なほそれ等危機の各々に就いて、二三の特徵を說いて見ることにしよう！』と。

ビンスワンガー Binswanger は(一)曰く。――『人々は特に神經衰弱は全然近代的病氣の一つであ

ると云つてゐる。またビヤド Beard はこの近代病を全般的に説明してゐるが、彼は特にアメリカの土壤に發生した新しい神經病を發見したと信じてゐる。この信念は勿論誤りであつたが、併し始めてアメリカの醫師がこの病氣の特徴を豐富な經驗の上に立つて把握し、確證することが出來たと云ふ事實は間違ひのないところである。近代生活の金錢所有への狂奔、技術方面の異常なる進步、そのために交通生活上の一切の時空上の障害が幻の如くに見えて來たことなど、これ等の近接せる諸關係がこの病氣を促してゐるのである。』と。

註（一） Die Pathologie und Therapie der Neurasthenie, 1896.

フォン・クラフト・エービング v.Krafft-Ebing（一）は曰く。――『多數の文明人の生活の仕方においては今日では幾多の非衞生的な契機が見られる。それ等に就いて見ても神經病が膏肓に入りつゝ擴がつて行くことが直ちに理解される。何となれば、これ等危險なる契機はまづ大抵の場合、頭に來るからである。文明國の政治的、社會的、殊に商業的、産業的、農業的關係は最近の十年間に變化を遂げ、そのために職業、市民の立場、財産などは非常な變革を受けた。さうして、よしんば神經組織は犧牲にするともこの高まつた社會的、經濟的要求のために、不十分なる休養の間に殘る僅かの彈力を驅り立てゝ働かねばならないと云ふ始末である。』と。

註（一）Nervosität und neurasthenische Zustände, 1895, p. 11.(In Nothnagels Handbuch der spez. Pathologie und Therapie.)

私はこれ等の――並びにこれ等に類似した――意見が間違つてゐるとは云はないが、併し神經障害の個々の狀態を說明するに不十分であり、また病源的に効果を及ぼしてゐる正に最も重大なる契機を看過してゐると云ふ點を難ずるものである。たゞ『神經的』であると云ふだけの漠たる種類から眼を離して、神經病の本來の形成を明確に見るならば、文明の本來の障害的影響とは、本質に於いては、文明民族（或は文明階級）が彼等の間に支配してゐる『文明的』性道德に依つて影響をされ、そのために、その性生活に障害を來たすと云ふ點に歸せられる。

この主張に對する證據として、私は一聯の專門的論策（一）を公にしておいたが、それをこゝに反覆することは出來ないから、たゞその內の重要なる二三の論旨をこゝに紹介しておきたいと思ふ。

註（一）Sammlung kleiner Schriften zur Neurosenlehre, Wien 1906, (4 Auf., 1922)

神經病狀を臨床的に鋭く觀察して見ると、そこにつの二群が區別される。それは本來の神經症と精神神經症とである。前者に於いては障害（症狀）は、それが身體的行動となつて現れようと心理上の行動となつて現れようと、中毒的性質を帶びてゐる。卽ちその樣子は或る神經毒藥があまりに過ぎた

場合か或は不定した場合に見られる現象と酷似してゐる。これ等の神經病——大抵は神經衰弱として總括されてゐる——は、遺傳的病苦の助けに依つて促進されることはなく、性生活に何等かの障害的影響を與へられるために生ずるのだ。而も病氣の形式がこの障害の種類と相應じてゐる、臨床して見た樣子から直ちに、それが特に性的病源から來てゐることを屢々斷定し得るほどである。併し病氣の形式と、障害を與へる他の文明的影響(諸學者が病氣の原因として嘆じた諸影響)との間にいつもそのやうな相應一致があると云ふことは、全然見落されてゐる。これを認めると人々は、本來的神經症の原因の中に本質として性的要素の存するのを明にすることが出來る。

精神神經症に就いては遺傳的影響が一層重要であつて、後天的原因はあまり判然してゐない。併し精神分析法と名付けられてゐる獨特の探究方法を以てすれば、この病苦の徵候(ヒステリー、脅迫神經症、その他)は心理發生的であり、無意識的の(抑壓されたる)觀念コムプレクスの出現と云ふ事と關係のあることが知られるのである。併しながらこの同じ方法に依つて我々はまたこれ等の無意識的コムプレクスなるものゝ存在を知り、且つそれ等のコムプレクスが、一般的に云へば、性的內容を有するものである事が分つたのである。それ等は滿足を得てゐない人々の性的要求から生じ、彼等のために一種の代償的滿足を供するものである。そこで我々は、性生活を障害し、その活動を禁壓し、

その目的を轉位する一切の契機に於いて精神神經症の發源的要素を認めざるを得ないのである。

中毒的神經症と心理發生的神經症との區別を理論的に打樹てることの價値は勿論、大抵の神經症者に於いて二種の障害が共に觀察されると云ふ事實に依つて動搖を來しはしない。

神經病の病源を就中、性生活に障害を與へる何等かの影響に認めることに於いて私と同意見の人々は誰しもみな、次なる論にも從ふことであらう。次なる論に於いては、いや增し行く神經病の問題は更にもつと一般的な關係に置くことになつてゐるのである。

我々の文明は、あまねく本能を禁壓することの上に成立つてゐる。一切の個々人はその所有、その全力、その性格の攻擊的、復讐的傾向の一部分を失つてゐる。この寄與からして物質上及び觀念上の財貨に於ける文明的所有は成立してゐるのである。何が個々人をしてこのやうな放棄(寄與)をなさしめたかと云ふに、それは生活の必要以外には、恐らくエロティック(社會結合感情)から派生した家族感情であらう。この放棄は文明の發展の過程に於いては進步的であつた。個々の進步は宗教がこれを嘉した。人々が放棄した部分の本能滿足は、神への犧牲にとて捧げられた。かくして得られたる共通善は『神聖』であると說明された。不屈の資質あるためにこのやうな本能禁壓に從ひ得なかつたものは、『社會』に對して犯罪者となり、『追放者(アウト・ロー)(法律の庇護を奪はれたる者)』となつた。但し彼の社會

的地位、並びに彼の優秀な能力に依つて、彼が偉人となり『英雄』となつて了つた場合は別である。

性本能——更に正しく云へば、諸々の性本能（何となれば分析的研究に依れば、性本能なるものは多くの要素、部分本能から合成されてゐるからである）——は人間に於いては、大抵の高等動物に於けるよりは一層力强いやうであり、また如何なる場合にも一層常住的である。何となれば、動物の性本能は時期と云ふものに從つてゐるのに、人間の性本能は殆ど全然これを克服して了つてゐるからである。人間の性本能は文明の作業に對して異常に大きな力を給與してゐるのである。それと云ふのもつまりは、人間の性本能に別して具はつてゐる特性（本質的にはその激しさを失ふことなしに、その性目的を轉位することの出來る特性）のためである。我々はこの能力（本來は性的である目的を、既に性的ならぬ、併し心理的にはこれと關係のある他の目的に轉向するこの能力）を昇華 Sublimierungの能力と名付けてゐる。この轉向（にこそ性本能の文明的價値は存するのだが）とは正反對に、性本能に於いてはまた特に頑固な定着が現れる。この定着のために性本能は活用されなくなり、また時には所謂變態となる。性本能の本來の强さは個々人によつてその區々であるやうである。性本能にして昇華されるやうになるのはどれだけの額か、それは慥に不定である。性本能のどれほどの部分が昇華され、また活用される事になるかは、當人の持つて生れた有機組織に依つて決定されるのだと我々は

考へる。その他、それ以上の部分が昇華せられることのあるのは、生活上の種々な影響が働きかけたり、精神裝置の上に知的の感化が及ぶからである。併しこの轉向的過程はどこまでも押進めて行くことは出來ない。丁度我々の機械に於いて熱をどこまでも働力に轉向させることが出來ないのと同じやうである。或る程度の直接的性滿足は、大體の有機體に於いては已むを得ないことであるらしい。その程度は個人に依つて變化はあるが、この程度を全然自分に許さないと因果は報いて來て、機能の障害となり、主觀の不快となつて我々から見れば病氣と認めざるを得ない狀態となつて來るのである。

人間の性本能なるものは元來蕃殖の目的のために資するものではなく、一定の種類の快樂獲得を目的とするものであるとの事實を考慮に入れて見るならば、また次なる見地が展開して來る。(二)現に人間の幼兒時代に於いては性本能はどうかと云ふに、この時分にはその快感獲得の目的を單に性器に於いて果すのみならず、また他の肉體的個所(性的帶域)に於いても果すのである。それ故にこれ等の便宜上の對象以外の對象は別になくともよいのである。我々はこの段階を自己情慾 Autoerotismus の時代と呼ぶ。さうしてこの情慾を制限することの任務を敎育に歸するのである。何となれば性本能の發達がこの段階で停滯すると後年になつてこれを自由に活用することは出來ないからである。性本能の發達はそこで、自己情慾から對象愛へと進むのである。各性的帶域の自律から、蕃殖の任を負ふてゐ

る性器の支配下にそれ等が立つに至るまで進むのである。この發達の間に、自らの肉體から供せられた性的亢奮の一部分は蕃殖機能には使用すべからざるものとして禁制せられ、さうして具合のよい場合には昇華せられるのである。で、文明的な仕事の方に利用され得べき諸勢力は、大部分は、所謂變態的な部分の性的亢奮が抑壓せられることに依つてその力となるのである。

註（一）『性説に關する三論』（文本全集第五卷）參照。

右のやうな性本能發達史に關して我々は三つの文明段階を區別する事が出來るであらう。――第一の段階に於いては、性本能の活動はまた蕃殖の目的を超越して自由である。第二に於いては、蕃殖に資する以外の性本能に關する一切が抑壓されてゐる。第三に於いては、たゞ合法的な蕃殖のみが性目的として許されてゐる。この第三の段階に相當するものは、我々の現在の『文明的』性道德である。

これ等三つの段階の內、第二のを標準にとるならば、多數の人々はこの段階の要求するところを、身體上の根據からして、十分に果してゐないことをまづ確言しなければならない。全部の個人に就いて見るに、右に述べた如き性本能の發達（自己情慾から、男女性器の合一を目的とする對象愛への發達）は十分でない、申分なく徹底的に完了してゐない。さうして發達上のこのやうな障害からして、二重の變態が生じてゐるのである。卽ち、文明促進的の性感である。その性感の態度が殆ど積極的で

あると共に消極的の如くである。これ等はまづ――その性本能があまりに強くて禁制すべからざるやうな人々一般は別として――種々なる變態 Perversen である。（これ等に於いては、豫備的性目的に關する幼兒的定着があるために蕃殖機能の主權が發動しなくなつてゐるのである。）次には同性愛 Homosexuellen oder Invertierten である。（これ等に於いては、如何にしてゞあるかはまだ明かになつてゐないが、とにかく或る事情に依つて性目的が異性に向はなくなつてゐるのである。）性發展上のこれ等二種の障害が思つたよりもその弊が少いとすれば、それは實に性生活の錯雜した關係にその所以を歸せねばならないのだ。性本能の一つ又はそれ以上の要素が發達途上で脱落したとしても、右の錯雜した關係に依つて性生活がなほ役に立つ窮極的な形態をとり得るやうになるのである。例へば同性愛者の素質はその性本能が屢々文明的昇華の方へ特に活用されるのが特色である如きである。

これよりももつと強烈な、もつと極端な變態や同性愛になると、當人は社會的には役に立たない人間となり、また不幸である。であるから第二段階の文明的要求も或る部分の人達に對しては苦痛の源泉であることを認めざるを得ない。素質上他の人々と違つてゐる人間の生涯は多種多様である。つまり彼等の生れつきの性本能が絶對的に強いか、或はもつと弱いかに依つて區々である。最後の場合、即ち一般に性本能の弱い人々に於いては、變態なる當人をしてかの諸傾向（彼等が自分の文明段階に

於ける道德的要求と鬪爭せしむる本能的要求）を完全に抑制せしめることが出來る。併しこれは、觀念的に考察すると、彼等がなし得る唯一事である。何となれば彼等の性能をこのやうに抑壓するために、彼等が當り前ならば文明的仕事のために利用し得べき力をその方に浪費してゐる事になるからである。彼等は云はゞ、內に阻まれ、外に遮られてゐるやらなものである。吾人が後に男女の節慾（これは第三段階に於いて要求せられる）に就いて繰返し述べるであらうところの事柄が、彼等に對して適てはまるのである。

もつと激しい、併し變態である性本能に於いては、その歸結として、二つの場合が可能である。第一の（これ以上に進んで考察して見やうのない）場合は、當人が依然變態であつて、而も彼が文明的標準から離反してゐることとの歸結を負はねばならない場合である。第二はこれよりも遙に興味がある、卽ち、敎育や社會的要求の影響を受けてともかくも變態的本能の抑制はなし遂げられてゐるが、併しそれは一種の抑制で本來の抑制ではなく、寧ろ抑制の一つの仕損ひと云ふべきものである。禁制せられたる性本能はかくて性本能としては現れない。――それは成功ではあるが、併しまた形を變へて現れて來る。それは當の個人にとつては同樣に弊害があり、社會に對してはその抑制されたる本能を昇華させずに滿足させてゐるのと丁度同樣に無用である。この點に於いてこの過程としては失敗である。

何となればこの失敗が永く續く間には成功の償ひになるからである。この代償現象はこの場合には本能抑壓の結果として生じ來るのであるが、この現象に依つて我々の所謂神經病が、殊に精神神經症が生ずるのである。（本論の始めを參照せられよ。）神經症患者とは、有機組織が反抗するに拘らず文明的要求に影響されてそれを外見上だけで抑制し、而も常に抑制し損つてゐる如き一團の人々である。またそれ故に彼等が文明の仕事に參與するためには非常に大量の力の支出を要し、內面を貧困にし、やがて病氣にならざるを得ないことになるわけである。併し神經症を私は變態の內の消極と呼ぶのである。何となれば、彼等に於いては變態的感情が抑壓後に精神の無意識中から現れるからである。積極的變態者が『抑壓』狀態に於いて表はすのと同じ感情を彼等は表はすからである。

經驗に依つて知り得たところに依ると、大抵の人間にはその素質が文明的要求に從ふに際して越え得ざる一つの限界が存する。彼等の素質が彼等に許すより以上に崇高な人間にならうと思ふ者は神經病になる。彼等はそんなに崇高でなくともよかつたならば、もつと幸福で健康であつたらう。變態と神經症とは互に積極的並びに消極的の如き關係があるとの洞察は、同じ生れの者の間を觀察することに依つて、疑ひがないとの確證を得ることが屢々である。兄弟姉妹の內で兄弟は性的に變態であり、姉妹は女だけに性本能が弱いから神經症者となることが誠に屢々である。ところが彼女等の神經症の

症狀は性的に能働的な兄弟の變態と同じ傾向を現はしてゐる。さう云ふわけであるから、一般的には大低の家族に於いては男達は健康であるが、併し社會的には望ましからぬ程度に於いて不道德であり、女達は崇高であまりに洗練され過ぎてゐるが、併し――甚だしく神經質である。

もし文明の標準が萬人に對して同樣にその性生活を規律せよとの要求をするならば、それは明かに社會的の不正である。或る者はその人の身體組織のせいでその要求に難なく從ふことが出來るであらうが、他の者はそのために甚だしい心的犧牲を拂はせられる。これは勿論不正であるが、併しどうせ道德の定めなどには從はないのだから、そんな犧牲は實際には拂ひはしないのだ。

我々はこれまで我々の考察の根柢には、第二の（我々に假定せられたる）文明的段階の要求を置いて來た。從つて一切の所謂變態的性活動を禁止して來た。これに反し、常態的と名付けられてゐる性交は許容されてゐる。また性的の自由と制限とをこのやうに配分するに際し、一群の人々は變態として一隅に押遣られ、他の（變態的であるまいと骨折るが、素質的にさうなのだから遂に變態的とならざるを得ない）一群の人々は神經病的ならざるを得ないのである。そこで、もし人々が性の自由を更に制限し文明的要求を第三段階の標準の上に高めるならば、つまり合法的な結婚に於いて以外の性活動を一切禁止するならば、如何なる歸結が生ずるかを豫め語ることは容易である。文明的要求に對し

て公然反抗する强者の數は異常な程度で增加し、それと同時に、文明的影響の壓迫と自分の素質との間の葛藤からして神經病に陷つて行く弱者の數は、激減する。

こゝに於いてか三つの質問が生じて來るが、それに對して吾人は答辯を與へることにする。その質問とは――(一)　第三段階の文明的要求は如何なる課題を各個人に提出するか。(二)　容認せられたる合法的性滿足はこれまで放棄してゐたものゝ補償として受容し得るものであるか。(三)　この放棄に依つて嘗て蒙つてゐた損傷は、これを文明上に利用したところと如何なる關係に立つてゐるか。

第一の質問への答へは、屢々取扱はれたが併しこゝでは十分に論じ盡くすことの出來ない問題に、卽ち性的節制の問題に觸れてゐる。我々の第三の文明段階が各人に要求する事は、結婚するまで男女ともに節制せよと云ふにある。合法的結婚に入らない總ての人々に對しては一生の間節制して居よと云ふにある。總ての權威者たちは性の節制は有害でないまた節制し通すことは左程困難でないと主張するが、これをまた醫者の方でも色々に賛同してゐる。併し凡そ性本能のやうな力强い亢奮を滿足させる以外の方途で支配することは、個人の全力を擧げて掛らねばならない仕事である。昇華に依つて支配すること、卽ち性的本能力を性目的から引離してもつと高尚な文明的目的に轉向させることに依つて支配することは、たゞ少數者のみのよくするところである。而もまたこれはたゞ一時的によくす

るのみであつて、その最も困難なのは生活力に燃えてゐる青年時代である。それ以外の多數者は神經症となるか、それ以外の弊害を被る。經驗の示すところに依ると、我々の社會を構成してゐる大多數者は節制と云ふ仕事には素質的に不向に出來上つてゐるやうである。一寸した性的制限にも惱むものは、我々の今日の文明的性道德の下に於いては一層迅く、一層激しく病氣になる。何となれば出來損ひの仕組みや發達上の弊害に依つて常態的の性生活が脅されるならば、これに對して我々はこれを滿足させる以上によき安定の法を知らないのである。人々は神經症になればなるほど、愈々節制には堪えられなくなるのである。前に述べて來たやうな意味に於ける常態的發達を脫し得なかつたところの部分本能は、同時にまたそれだけ禁制し難きものとなつてゐる。併し、第二の文明段階の要求に對して健康を保持し得て居るであらう人々もやはり、今度は大多數は神經症になつて行く。何となれば、性滿足の心理的價値は、それが拒否せらるればせらるるほど愈々高められて來るからである。堰かれたるリビドーは今や性生活の構造中に何處か弱點はないかと搜し廻るやうになり、さうしてそこから選出して神經症的な代償滿足を病的徵候の形で得ようとすることになる。神經病の條件を洞察することを心得てゐる者は誰しも、やがてまた、我々の社會に於いて神經病の增加し行くは、性的制限が甚しくなり行くところに由來してゐるとの信念を持つやうになるのである。

そこで我々は更に質問の歩を進めて、果して合法的の結婚に於ける性交に依つて、結婚前の制限に對する補償を完全に得ることが出來るであらうかと問ふて見る。この質問に對しては否定的な答を與へる材料が豐富に與へられてゐて、我々は義務として斷乎たる事を云はなくてはならぬ。就中我々の想起することは、我々の文明的性道德は結婚に於ける性交をさへ制限し、大抵の夫婦は最少限度の子供を持つて滿足しなければならないと云ふ强迫を感じてゐる。このやうな顧慮をしなければならない結果として、結婚に於いても滿足の行く性交はたゞ數年の間だけで、而もその上衞生上の根據からして妻君をいたはらねばならない時代も天引きとして加はつてゐる。このやうな三、四、或は五年の後には、性的必要を約束した限りに於いての結婚と云ふものは駄目になる。何となれば、これまで妊娠を防止するために用ゐた一切の手段は性的享樂の邪魔となり、兩方の微妙な感じを障害し、或は直接的に病氣の原因となるのである。性交の結果を恐れるために、まづ夫婦相互の肉體上の愛情が消え、引いてはまた大抵その精神上の傾到(始めの頃の暴風雨の如き情熱の遺產を受嗣ぐべき精神上の傾到)が失せる。このやうに大抵の結婚生活は精神上には失望し肉體上に節慾しなければならないので、男女ともに結婚前の早期の狀態に逆轉するのであるが、併し結局幻想は貧困となり、性本能を支配し轉向しようとの確乎たる努力を新たに始めなければならないことになるのである。併しその努力が果し

てどの程度にまで成人男子に於いて成功するかは調べるまでもない。經驗に從へば、男子が今や自由にし得る性の部分は、最も嚴酷な性的秩序が暗默の內に、いや〳〵ながら容認してゐる部分であることが分る。我々の社會に於いて『二重』の性道德が妥當してゐることは、抑々そのやうな秩序を作り出した社會それ自身がそれの徹底を信じてゐないことを何よりもよく告白するものである。併し經驗の示すところではまた、婦人たちは抑々人間の性的興味を負ふものとして本能昇華の天分はたゞ僅かしか與へられてゐないものであるが、その婦人達は性對象の代償として、成長しつゝある子供よりも乳兒の方を好むものである。また婦人は結婚に失望して生活を永く悲慘にする重き神經症に罹るやうになるのだと私は云ふ。結婚は今日の文明的條件の下に於いては既に、婦人の神經病的惱みの治癒策たり得なくなつて久しい。さうしてもし我々醫師がまたそのやうな場合に助言を求められるとすれば寧ろ反對に、娘は將來結婚に堪え得るために健康であらねばならないと云ふことを我々は承知してゐる。我々の許へ相談に來る男子に對しては結婚前から神經症的であるやうな娘を妻に娶るやうなことはよせとて注意するであらう。結婚から神經症になるやうならば、その治療法としては寧ろ結婚に不忠實になるのがよからう。女は嚴格に躾けられてゐればゐるほど、文明的要求に對して眞劍に服從的であればあるほど、愈々彼女はこの出口を恐れ、彼女の慾情と義務感との間の葛藤に依つて彼女は再

びその血路を――神經症に求めるやうになる。彼女の婦徳を擁護するものとしては、この病氣ほど確かなのはない。文明人の性本能はその青春時代には結婚狀態に依つて慰撫せられるが、これが右に述べて來た通りに一生涯の間は續かない。況んや若い時分に放棄したところの補償などには到底なり得ない。

また文明的性道徳に依る弊害を自認するものは、我々の第三の質問への答辯として次の如く主張することが出來る。卽ち、今日まで押進めて來た性的制限に依つて文明的に獲得したところは、この惱み(この惱みを重い形で受けてゐるものは少數者であるにしても)を相當に重からしめてゐるやうである。そこでこの得失を相互に計量することは私には出來ないが、併し損失の方を計上する段になれば、私はいくらでも云ふことがある。節制と云ふ問題には前に一寸觸れておいたが、その問題に戻つて私はかう主張しなければならない。――節制なるものは神經症以外になほ別の弊害を齎す、さうしてまたこの神經症は大抵はその全的の意義を評價されてゐないと。

現代の教育と文明とは性の發達と活動とを成るべく遲らせやうとしてゐるが、これは確に弊害のあることではない。教育ある階級の若者が一人前となつて獨立の生計を營むやうになるのが如何に後年の事であるかを思ふならば、これは慥に必要なことになつて來る。こゝに於いて人々がまづ考へなけ

ればならなくなる事は、現代の總ての文明的制度が如何に緊密な關係を有してゐるか、またその全體を考量せずしてその一部分だけを變更することの如何に困難であるかと云ふことである。二十歳を遥かに越えてはなほ節制してゐることは併し、若い男子にとつては既に重大事でなくはない。よしんばそこに神經症の傾向はなくとも、他の弊害が現れよううする。力強き本能と戰ひ、その際精神生活中の一切の倫理的及び美的の力を必要のまゝに强調することは、その人格を『鍛へる』と云ふ人々もある。而してこれは特にそれに都合よく本性が出來上つてゐる者に就いては眞である。また、現代に於いては個人的性格の截然たる相違が見られるのは、このやうな性の制限があるために始めて可能であるのだと云ふことも容認する。併しこれよりも遥かに多數の場合に於いて、肉感への闘爭は性格に必要なるエネルギーを蠶食するのである。而もそれが、若者としては社會に自分の地位と立場とを高めるべくその一切の力を要すべき時代に於いてゞある。どの程度まで昇華されまたどの程度まで性的活動に必要であるかその關係は、勿論個々人に依つて區々であり、また職業の種類に依つても別々である。節制的な藝術家と云ふものは殆どあり得ないが、節制的な若い學者は必ずしも稀ではない。後者は控へ目になる事に依つて餘力を研究に捧げ、前者はその性的體驗に依つてその藝術的活動を刺戟されるのであるらしい。全般的に云ふならば、性的節制に依つて精力的な獨立的な實行家や、獨創的な

思想家や、大膽な解放者や、改革家が出來上るものではないやうに私は思ふ。それに依つて屢々出來上るのは、後には群集の中へ解消して了ふやうな善良な弱者、强き個人に依つて與へられた衝動に常に反抗しつゝ服從してゐる善良なる弱者であるやうだ。

性本能となるものは總じて自己意志的に、剛情に振舞ふものであることは、また節制の努力の結果にも現れて來る。文明的教育なるものはまづ結婚に至るまで暫定的に性本能を抑壓し、やがてこれを解放して自由に振舞はせることを意圖するものである。併し本能なるものに對して適度の抑制よりも極端な影響の方が成功し易い。抑壓は屢々藥が利き過ぎて望まなかつた結果を生じ、性本能は自由を與へられた後にも永く障害を受けてゐるやうに思はれる事がある。それ故に青年時代に完全に節制してゐると云ふことは、若い男子にとつては結婚に對する最良の準備ではないことが屢々である。婦人たちはこれを豫感し、彼女の求愛者等の內から、既に他の女に對して男として試驗濟みの者を選ぶのである。結婚に至るまで嚴格な節制を要求することに依つて、女の本質の上に如何なる弊害が及ぶかと云ふことは甚だ判然してゐる。教育は、娘が結婚するやうになるまではその肉感を抑壓しておくことの任務を明かに輕視してゐない。その證據に仲々細心の注意を以て努めてゐる。教育は性交を許さず、貞操の保持を高く評價するは勿論、また成熟しつゝある總ての女にも、やがては彼女等が果すべ

き役目についても何事も教へず、結婚に導かざる一切の戀愛感情を許容せざることに依つて、彼女等を誘惑から遠去けるのである。その結果はどうかと云ふに、娘が急に父兄から戀愛してもよいと云ふお許しを得ても心理の働きが十分でなく、結婚に對する自分自身の感情と云ふものが不確である。戀愛機能を不自然に遲らせておいた結果、彼女等は自分のために一切の慾情を節して來た夫に對してたゞ失望を與へるのみである。彼女等はその精神上の感情に於いてはなほ、自分の性の抑制を權威的になし遂げた兩親の方に引かされてをり、肉體の態度に於いては冷感的で、これは男の尊重する一切の性的享樂を妨げるものである。不感症的な型の妻は、文明的教育以外にでも現れるものであるかどうか私は知らないが、併し現れさうに私は思ふ。如何なる場合にもこの型は教育に依つて立所に作り上げられる。さうしてこのやうな婦人は何等の快樂なくして受容してゐるので、屢々苦しい分娩をすることを段々肯んじなくなつて來る。で、結婚への準備をすることに依つて結婚の目的それ自身が駄目になつてしまふ。やがて女に於いて發達の遲延が一人前となり、彼女の女としての存在の最高頂に於いて完全なる戀愛能力が目覺めた時には、結婚の夫に對する彼女の態度は既に毀されてしまつてゐるのだ。彼女がこれまで從順にして來た褒美として不忠實か神經症か、已むに已まれぬ憧憬としてこの二つの內から一つを擇ばねばならないことになるのだ。

人間の性的態度と云ふものが模範となつて、その人の世間に對する自餘全體の態度も決定されるのだ。男としてその性對象を精力的に征服する者は、また他の目的の追及に於いても同樣に猪突的な精力を示すであらうことを我々は期待し得る。これに反し、彼の强き性本能の滿足をいろ〳〵な顧慮から放棄するものは、人生の他の方面に於いても實行力があると云ふよりは寧ろ引込思案的であり諦觀的であらう。性生活が模範となつて他の機能も實行されると云ふこの命題は、また直ちに移して女性の全體にも適用することが出來る。女性は性問題に對して非常に大きな知識慾を持つて生れてゐるに拘らず、敎育はこの問題を知識的に取扱ふことを彼女等に許さない。そのやうな知識慾は女らしくない、罪を犯す前徵であるなど〻云つて彼女をおどかしてゐる。そこで女性は思想なるものを總て忌避するやうになり、知識は彼女には價値のないものとなつた。思想禁止は性的分野を越えるのである。それは一部分は避け難き關係のある結果であり、一部分はまた自律的にである。それは丁度、宗敎上の思想禁止が男子に對して行はれ、忠君的思想禁止が善良なる臣民に對して行はれるのと似てゐる。メビウス Moebius は知的活動と性的活動とは生物學的に云へば反對の活動であると論ずることに依つて女が『生理上から愚鈍』であると或る書中で說明して種々の方面から反對を受けてゐるのであるが、私もメビウスの云ふ所を信じない。それとは反對に、女が知的に劣等であるのは性の抑壓上から

思想の禁止が必要であるところから來てゐることは疑ふべからざる事實であると考へる。
人々は節制の問題を取扱ふに當つて、節制の二つの形式をあまり嚴格に區別しない。一口に節制と云つても、廣い意味に於ける性活動一般を摒することゝ、異性との性交を摒することゝある。美事に節制をなし遂げたことを誇る人々は多いが、彼等はその節制を自慰やそれに類似した滿足（卽ち幼兒時代の自己慾情的な性活動に關する滿足）の助力を俟つて漸くなし得てゐる場合が多いのである。併し自慰的滿足は幼兒的活動と關係があるからして、性滿足のかゝる代償的方法は決して無害とは云へないのである。このやうな方法をどるために神經症や精神症の種々な形式が生じて來るのだ。さうしてそれ等の形式の元を正せば幼兒的形式が條件になつてゐるのである。手淫はまた文明的性道德の理想的要求に決して相應するものでない。それ故に若い人々は節制に依つて對應せんとして教育理想に對して再度同じ鬪爭を試みなければならない事になるのである。手淫は更にまた當人の人格を數々の方面から毒害する。第一にこのために人々は重大な目的を骨折らずに、安易な方法で全力的な緊張をせずに得ようとするやうになる。卽ち性的模範の原則から云つて不都合なことになる。また第二に、滿足を果す時に伴ふ空想中に現れて來る性對象が、現實では容易に再發見されないやうな秀絕な者に高められることである。ギインの『炬火（ファッケル）』紙上でカール・クラウスと云ふ才智ある文藝家がかうした

事柄について書いてゐたが、もし氏が鋒先を逆轉して『性交は自慰の代償のみ、及ばざること遠し！』と云ふ風に、眞理を皮肉で表現し得たらばと思はれる。

文明的要求の嚴酷と節制を守る事の困難とが相合して効果を及ぼしたゝめに、異性同志が合することを避けると云ふことが節制の核心となり、それとは違つた種類の性慾が榮えるやうになつたのである。これは云はゞ半分しか服從してゐないのと同じである。常態的性交が道德に依つて――また傳染の可能性があると云ふので衞生方面からも――甚だやかましく迫害されて以來、男女兩性間に於いて所謂變態的種類の交りが（それに於いては普通とは違つた肉體的個所が性器の役割を引受ける）社會的意義を疑ひもなく帶びるやうになつた。併しこのやうな活動は戀愛の交りに於ける類似の反則のやうに無難であるとも云ひ去れない。かゝる活動は倫理的に批難さるべきである。何となればこのために二人の人間の戀愛關係が眞劍な事柄から、危險もなく精神もこもらない容易な遊戲に墮して了ふからである。常態的性生活を困難にしたことの更にそれ以上の歸結としては、同性愛的滿足の廣まつて來たことを擧げておかねばならぬ。既に身體の組織から同性愛者に出來上つてゐる者、或は幼兒時代にそれになつた者が多い上に、更に年頃になつてからリビドーの主要な流出口を阻まれたゝめに同性愛的側道に洩れ出した多數の人々が居るわけである。

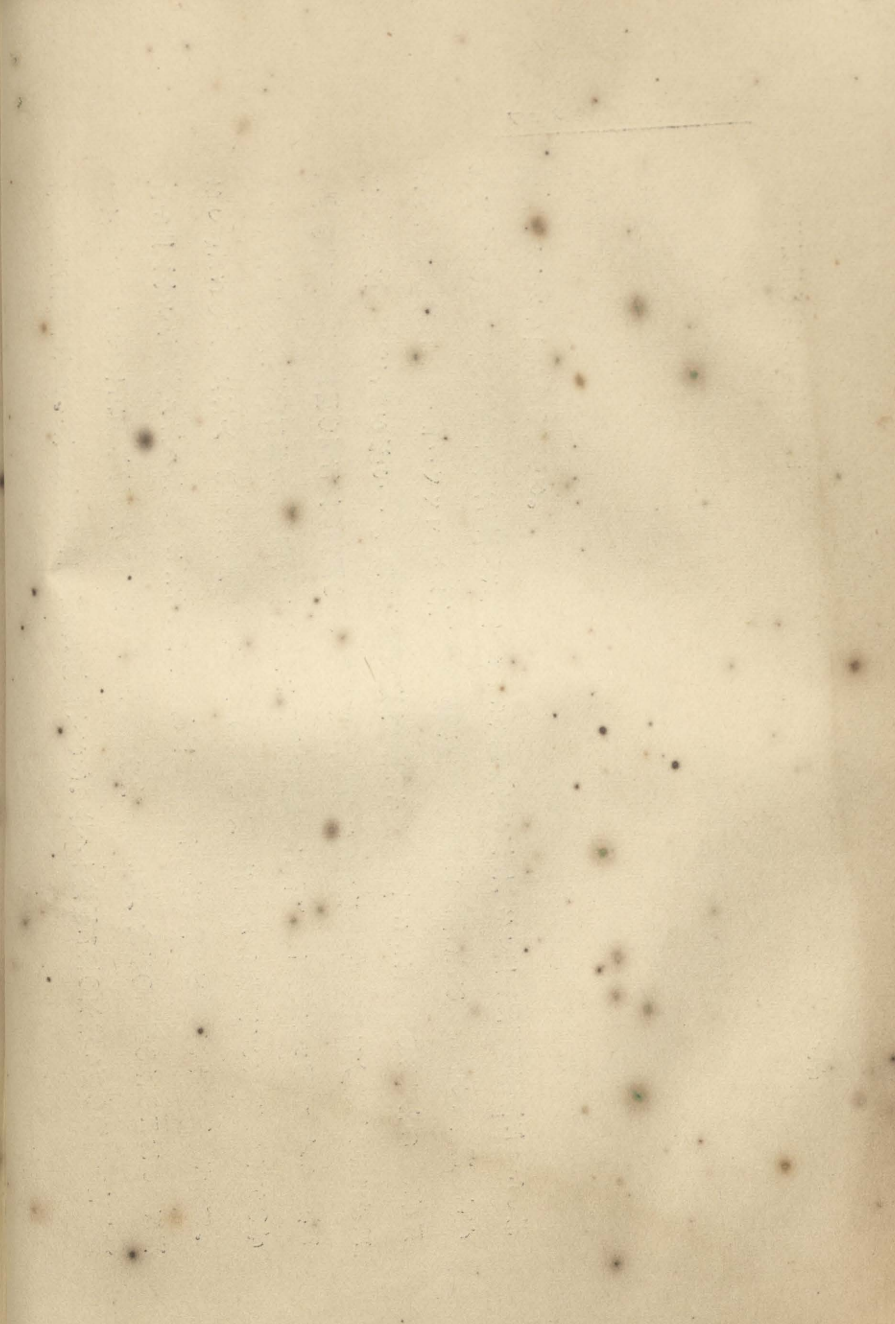
總てこれ等は節制命令の避くべからざる、併し意圖せざりし歸結であるが、これ等に於いて共通する一點は、これ等の歸結が結婚に對する準備を根本的に破壞すると云ふことである。而も結婚こそは文明的性道徳の意圖としては、性的苦鬪に依つて得べき唯一の遺產であるべき筈であつたのだ。手淫をしたり變態的に性を實行したりした結果、そのリビドーの滿足を常態的の立場や條件以外で得慣はしてゐる男たちは、結婚してもその性交力が非常に弱い。またその處女性を同樣な方法に依つてやうやく保持して來た女たちは、結婚しても常態的な交りに對して不感である。男女ともに戀愛能力が低下してゐる者同志が結婚したとしても、これは普通よりは迅く離緣になるだけのことである。男の能力が弱ければ女はそれだけ滿足を得ないわけである。從つて彼女が敎育に依つて與へられた冷感的傾向が強い性的體驗さへあれば克服されたであらう場合にでも、やはり不感のまゝに殘つてゐなければならないわけになる。そのやうな夫婦は子供の保護に就いても健全な夫婦よりは困難を感ずる。何となれば、男の力が弱つてゐればその力を保護の方に適用することに堪え得ないからである。さう云ふなさけない狀態では、性交などはして見てもいやな思ひをするだけの事であるから、やがてやめて了ふ、從つて結婚生活もおさらばになつてしまふわけである。

以上私の說き來つたことは決して私の誇張ではなく、ざらに見られるほど屢々起つてゐる實狀であ

ると云ふことを、世の所謂識者たちに承知して貰ひたいと思ふ。如何に常態的な性能力が男には缺け如何に屢々妻に於いて冷感が發見せられるか、如何に彼等は現代の文明的性道德に支配せられて兩方ともに諦めて結婚を續けてゐるか、永らく憧憬してやうやく求め得た結婚生活に如何に束縛されてゐるか、這般の消息に通ぜざるものゝ殆ど信じ難いほどである。このやうな事情の下に於いては、神經症にその血路を見出すことが最も容易である事は、既に私の述べた通りである。併し私はなほ附言しておきたい、そのやうな事情の間に生れ出た――たつた一人か、或は多くもない――子供の上に、このやうな結婚が如何に影響するかを……。その影響は一見すると遺傳のやうに見えるけれども、仔細に調べて見るとそれは幼兒時代の力強い印象の効果であることが分つて來る。その夫に依つて滿足を與へられない神經症的の妻は、母として子供に對してあまりに優しく感傷的で、あまりに强迫的であつて、子供等に對して彼女は自分の戀愛の要求を轉向するやうになる。そのために子供はどうしても早熟になる。兩親の和合が面白くないと、やがて子供の感情生活は刺戟されて、年頃になつて愛憎や嫉妬を激しく感ずるやうになる。嚴格な敎育はこのやうな早熟な性生活を許さないものであるから、この敎育が抑壓の力を助けて、さうしてこの年齡に於けるこの鬪爭からして、生涯中神經症の原因たらしめるに必要な一切が生じて來ることになる。

私は今や始めに主張したところに還つて、人々は神經症の判斷に於いては大抵はその全的意氣を考慮に入れないものである事を云はう。と云ふのは、かう云ふ病狀を輕くあしらつて、近親の者等の方ではこれを呑氣に片付けてをり、醫者の方では何すぐ癒して上げるなどゝ安受合をし、二三週間冷水浴をすればよいとか、或は一二ケ月靜養すればよいとか、云つて困ると云ふだけの事ではないのだ。寧ろ、全然無智な醫者や素人の意見なのだ。意見と云ふ程のものでなく、單なる云ひ草なのだ。が、その云ひ草たるや、結局病人にお座なりの氣休めを與へるだけのことなのだ。慢性の神經症者になると、生存の力を全然失つてゐない場合にでも、就中結核や心臟病の階級では、自分の生命を重荷に考へるもので、これは寧ろ誰でも知つてゐることである。併し一層薄弱な一群の人々が神經病のために文明の仕事から除外せられ、他の一群の者等が單に主觀的な重荷を犧牲にして文明の仕事に參與する事になれば、まづこれも仕方のない事は人々は諦めることが出來るであらう。私としては寧ろかう云ふ見地に注意を向けたいと思ふ、卽ち、神經症は相當ひどくなつて常に正氣でないほどであると、文明的意圖に反することを知つてゐる。と共に、抑壓されてゐる反文明的精神力の働きを助けるものである。そこで社會の立入つた命令に對して從順であることに依つて神經症が增加することになつたとしても、社會は犧牲に依つて購はれた所得物を放棄することにはならず、結局何の所得をも放棄しは

しないのである。例へばざらにある夫人の場合を考へて見てもよい。彼女はその夫を愛してはゐないのだ。何となれば、彼女はその結婚の條件からしても結婚後の經驗からしても夫を愛すべき何等の根據を持たないのだ。然るに彼女はその夫を何とか愛さうと思つてゐる。何となればさうすることが、彼女の受けた教育からすれば結婚の理想だからである。そこで彼女は自分の内なる一切の感情を殺して眞實の事に表現を與へまいとし、彼女の理想的努力に抵抗し、さうして優しい、親切な甲斐々々しい妻らしく振舞はうとする。このやうな自己抑壓からして結局生じ來るものは神經病である。さうしてこの神經症はやがて愛してゐない夫に對して復讐をするやうになる。で、夫としても、本當は妻は自分を愛してはゐないのだと分ると共に、また不滿や憂慮も十分に湧いて來るわけである。この實例は神經症の行動としては典型的である。これと同樣な報償の得損ひはまた、直接性的ではないが、反文明的な感情を人々が抑壓してその結果がどうなつてゐるかを觀察すれば自ら分る。例へば素質的傾向としては冷酷殘忍な人でありながら、それを無理に抑壓するとあまりお人よしになつてしまつて、その際にエネルギーが費されて、彼の報償感に相當するだけの一切をなし遂げ得なくなる。さうして全般から云へば、結局抑壓しなければ爲し遂げ得たであらうだけの善事さへ、爲し得ないで終るのである。

吾人はなほ附言する、或る民族が性的活動を抑壓すると、全く一般的に生の不安と死の恐怖とが增加して來る。さうしてその增加のために個々人の享樂能力が障害され、何かの目的のために自ら死を擇ぶと云ふやうな勇氣もなくなり、またその不安の增加のために子供を作る力は減少する傾向を示し、さうしてこの民族又は人々の群は未來に於ける役目を阻まれ、遂に人々は疑はざるを得なくなるのである、『文明的』性道德は我々に犧牲を强ふるがその犧牲は果して堪えるに價するものなりやと。殊に我々の文明發達の目的の下に或る程度の個人的幸福を放棄することが出來る位にさへ我儘心をまだ自由にし得ない有樣であるから……。自ら改革の動議を提げて乘り出すことは醫師のなすべきことではない。併し私はフォン・エーレンフェルスが文明的性道德に依る弊害を論じてゐるところを敷衍してそれが近世の神經症の蔓延に重大な意義を有することを暗示する以上、さう云ふ改革の緊急なりとの主張を支持せんとするものである。

ヒステリー空想と、兩性具有性に對するその關係と

『性科學雜誌』„Zeitschrift für Sexualwissenschaft" I. 1908（ヒルシュフェルド編輯）に始めて發表。原書全集第五卷に收載。原名は „Hysterische Phantasien und ihre Beziehung zur Bisexualität."

妄想症者の妄想は一般に知られてゐる通り、自分の自我の偉大と苦痛とをその內容とし、さうして甚だ典型的な、殆ど單純な形式をとるものである。多くの學者の報告に依つて吾人は更らに、或る種の變態者をしてその性的滿足――觀念上の滿足にせよ、或は現實の滿足にせよ――を場面に出して見せる如き、さう云ふ特殊の事情の存することを旣に十分に知つたのである。然るにそれと全然類似の心理的構成が總ての精神神經症に、殊にヒステリーに、必ず起るものであり、またこれ等の構成（所謂ヒステリー空想）が神經症的症狀の原因に重大な關係を有することが分ると云つたならば、如何にも新しい事を云ひ出すやうに聞える。

總てこれ等の空想的產物の一般的源泉、並びに常態的手本は、所謂靑年の白日夢である。この白日夢なるものは旣に文獻に於いて多少の觀察の對象となつてゐるが(一)、併しまだ十分ではない。男女兩性に於いて白日夢は恐らく同樣に屢々起るが、併し少女及び婦人に於いては色情的性質を帶び、男子に於いては色情的又は名譽慾的性質を帶びる。併し男子に就いてゞも色情的契機の意義を第二段的重要さしかないなどゝ考へてはならない。男子の白日夢を更に仔細に調べて見ると、總てこれ等の英雄的行爲はその結果が女に氣に入られやうための、他の男よりも自分が特に女から認められようための

仕業であることが、大抵の場合判るのである。(二)これ等の空想は斷念や憧憬から起る願望の滿足である。これ等を白日夢と呼ぶのは正しい。何となれば、これが夜の夢を理解すべき鍵を供するからである。夜の夢に於いてもその夢の構成の核心をなすものは、丁度このやうな錯綜した、歪められた、意識的心理には理解されない白日の空想に外ならないのである。(三)

註(一)參照すべき文獻。——

Breuer u. Freud: Studien über Hysterie, 1895.

P. Janet: Névroses et idées fixes, I 1898.

Havelock Ellis: Geschlechtstrieb und Schamgefühl (deutch von Kötscher) 1900.

Freud: Traumdeutung, 1900. 邦譯『夢の註釋』(本全集第一卷)昭和四年十二月。

A. Pick: Über pathologische Träumerei und ihre Beziehung zur Hysterie, Jahrbuch für Psychiatrie und Neurologie, XIV, 1896

(二)前註所揭書中でハヴロック・エリスも同樣の意見を述べてゐる。

(三)Freud: Traumdeutung, 7. Aufll. S.335『夢の內容に對し、これに形式を與へる第四の契機として我々は「第二次的仕上げ」なるものを認めるが、これは白日夢の構成に際しては何物にも影響されることなしに働くのである。この第四の契機は、それに提供せられてゐる材料を、白日夢の如くに形作らんとするものであると、我々は直ちに云ふことが出來る。併しながらそのやうな白日夢が夢の思想に關係して旣に

構成せられてゐる場合には、その時には夢の仕事のこの要素はこの夢を取入れて、それが夢の內容中に入込んで來るやうにするのである。』云々。

この白日夢は非常に關心を拂はれ、細心に庇護せられ、人から窺知されることを恥づるものゝ如くに取扱はれ、人格の最も奥秘の寶でゞもあるかのやうである。街頭に於いて我々は急に放心的に微笑したり、一人言を云つたり、走るやうに歩みを速めたりする人々を見ることがあるが、これ等は何かを白日に夢見てゐる明かな證據である。――私がこれまで調べて見ることの出來た一切のヒステリー發作は、そのやうな、本人の意志なきに入込み來る白日夢であることが分るのである。そこでこれを調べて見ると、次の事は疑ふまでもないと知れるのである。卽ちそのやうな空想は、意識すると無意識なるとを問はず同樣に起るものであり、またこれ等の空想が無意識となるや否や病的となる事があるもので、つまり發作となり症狀となつて表れる事があるのである。事情が都合よければそのやうな無意識的空想を、意識的に捕へることが出來る。私の婦人患者の一人に私は彼女の空想が斯々だと知らせてやつたことがあつたが、彼女は嘗て私にかう話した。――彼女は嘗て街上で急に涙が出て來た。一體何だつて泣くのだらうと自分で急いで考へて見たら、自分はかう云ふ空想に耽つてゐるのであつた。卽ち彼女は町で有名なピアノ彈奏家（併し彼女と別に個人的の知合ひでない）と戀に陷り、その

間に一兒を擧げたが（彼女は子供はなかつた）、やがて子供と一緒に悲慘な境遇の內に見捨てられてしまつた。ロマンスがこゝまで來た時に、彼女は淚にむせんだのであつた。

無意識的空想は始めから無意識的であり、無意識內で構成されることもあるが、併し一層屢々であるのは、嘗て意識的空想であり白日夢であつたのが、やがて故意に忘れられ、『抑壓』に依つて無意識界に陷れられたものである。そこでその內容は意識的時代のまゝであることもあるが、或る時は變化を受けて、今や無意識となつてゐるものが嘗て意識的であつたもの丶派生であることもある。無意識の空想は今や當人の性生活に對して重大な關係に立つてゐる。この空想は實は、當人が手淫を行つた時代にその滿足を助けたところの空想とつまり同じものである。手淫的（最も廣い意味に於いては、自慰的）行爲は當時は二つの部分から成立つてゐたのである。卽ち空想の喚起と、自己滿足の高潮への行爲と、この二つからである。この一致は明かにそれ自身が不自然なつぎ合はせである。(一)本來はこの行爲は、性的帶域と呼ばれる一定の身體個所を快適ならしめんとする純粹に自己慾情的の企てゞある。彼にはこの行爲は對象愛の範圍からの願望觀念と混合して、この空想の頂點を劃する心身狀態を部分的に實現するに役立つのである。やがてこの人物がこの種の手淫的・空想的滿足を放棄するやうになると、行爲も熄んで來るが、併し——空想は意識的から無意識的となる。性的滿足の他の方法

がそこへ這入り込んで來ないと、當人はいつまでも禁慾狀態にあつて、リビドーを昇華させることは出來ない。つまり、性感をより高き目的に轉向させることが出來ない。そこで無意識空想が復活し、增大し、戀愛要求の全力を擧げて少くともその內容の一部分に於いて病徵となつてのさばり出て來るだけの條件が今や具はるのである。

註（一）『性說に關する三論文』（本全集第五卷）參照。

ヒステリー徵候は數々あるがそれ等の全體に對して、右のやうな種類の無意識的空想はまづ第一に來る精神的段階である。ヒステリー徵候は『轉換』„Konversion"に依つて表現にまで齎されるやうになつた無意識的空想に外ならない。さうしてそれが身體上の徵候である限りは、それ等は（當時はまだ意識的であつた空想に本來伴つてゐたのと）同じ性的感情並びに言動的神經作用の範圍內から取つて來られる事が甚だ屢々である。このやうに自慰の習慣を離れることは本來退行的になされるのである。さうしてこの全然病理的な過程の窮極目的は、卽ち當時の第一次的性滿足の復活は、今度は決して完全にはなされないが、併しやゝそれに近い遣方でなされるのである。

ヒステリー研究者の興味は直ちにヒステリーの徵候から離れて、この徵候が發して來た空想の方へと向ふのである。精神分析の技法に依つて我々は、種々の徵候からしてまづこれ等の無意識的空想を

看破し、次いでこれを患者に意識させる。この技法に依つて今や我々は、ヒステリー患者の無意識的空想が、變態者の意識的になす滿足の得方に內容から云つて丁度相當するものであることを知つたのである。で、もしから云つた種類の實例に乏しいならば人々はたゞローマ皇帝たちの世界史上の行爲を想起すれば足るのである。彼等の狂的行爲は彼等が無制限な力を具へた宮中樓閣築造者であつたことが勿論條件になつてゐる。戀愛病者の妄想は丁度これと同じやうな空想であるが、併し直接的に意識化してゐる空想である。これ等の空想はマゾヒスティッシュ・サディスティッシュ的要素の性本能に伴ふてゐるものであつて、同時にヒステリーの或る無意識空想中にもこれと瓜二つのが發見せられ得るのである。その他また實踐上重大な意味のある場合として次の事が知られてゐる。即ちヒステリー患者はその空想を徵候としてゞなく、意識的實現として表現する。で、つまり、殺人、惡事、性的攻擊などを眞似し、またその場面を演じたりする。

精神神經症者の性感に關して我々の知り得る一切は、このやうな精神分析的研究法に依つて、即ち外へ出てゐる徵候に就いて匿れたる無意識の空想を探る方法に依つて、摑み得るのである。で、それ等一切の內には、この一小論文の始めにまづ報告しておかなければならない事實も包含されてゐるわけである。

無意識空想がそれ自身を表現せんとする努力にはさま〴〵の困難が伴ふ恐らくはその結果、徵候（症狀）に對する空想の關係は決して單純なものではなく、いろ〳〵錯雜したものである。（一）大抵の場合に於いては、と云ふのはつまり神經症が十分に膏肓に入り、相當長く續いた後には、徵候はたつた一つの空想を示すものではなく、返つて澤山のさう云ふ空想に應じて生じてゐるのである。それも出鱈目に生じてゐるのではなく、一定の法則に協つて生じてゐるのである。病氣になりたての頃には、かう云つた込入つた事は總てまだ生じてゐないやうである。

註（一）同樣な事はまた夢の『潛在』思想と『顯在』內容との間の關係に就いても云へる。拙著『夢の註譯』參照。

一般には興味がないであらうから、茲ではこれ等の報告は見合せておいて、ヒステリー徵候を十分に云ひ盡した一聯の公式を擧げておかう。これ等の公式の各々は相互に矛盾するものではなく、寧ろ或る部分互に細かい理解を助け合ひ、また或る部分種々な見地を適用し合つてゐるのである。

（一）、ヒステリー徵候は或る効果的な（外傷の殘つてゐる）印象や經驗を想起して、これを象徵化したものである。

（二）、ヒステリー徵候はこの外傷的經驗を聯想的に復活させんとして、『轉換』に依つてその代償を得たるものである。

（三）、ヒステリー徵候は――他の心理的構成（夢、白日夢）とても同樣だが――一つの願望充足の表現である。

（四）、ヒステリー徵候は願望充足に役立つ無意識的空想の一つを實現するものである。

（五）、ヒステリー徵候は性的滿足の役に立ち、また當人の性生活の或る部分を表はしてゐる。（當人の性本能の諸要素の一つに相應して――。）

（六）、ヒステリー徵候は幼兒生活に於いては現實であつたところの、さうしてそれ以來抑壓されてゐるところの、性滿足の一方法を復活させてゐることを意味してゐる。

（七）、ヒステリー徵候は二つの相反なる感動又は本能の間の妥協として生じてゐるものである。それ等二つの內一つは部分本能又は性の一要素を表現せんと骨折り、他は同じものを抑壓せんと骨折るのである。

（八）、ヒステリー徵候は種々の無意識的な、性的ならぬ感情をも代表することはあり得るが性的意味ある感情は總てこれを代表せずと云ふことはない。

これ等種々なる定義の內、第七番目のが、ヒステリー徵候の本質を無意識空想の實現として最も申分なく云ひ表はしてゐる。また第八のは性的契機の意義を正しく述べてゐる。一から六までの公式は

これ等二つの公式の內にその前階として包含せられてゐる。

徵候（症狀）と空想との間にはこの通りの關係があるために、徵候の精神分析から個人を支配してゐる性本能の要素を知るやうになること（私が『性說に關する三論文』で試みたやうに）は必ずしも困難ではないのだ。併しこのやうな硏究から多くの場合、意外の結果に到達するのである。卽ち、多くの徵候に對してはこれ等を一つの無意識的、性的空想に依つて解決する事は、一聯の空想（その內の一つが、最も重要にして最も中心的の一つが性的性質を帶びてゐるところの一聯の空想）に依つて解決する事は不十分である。寧ろこの徵候の解決には二種の性的空想を以てしなければならない（その內の一つは男性的特質を帶び、他の一つは女性的特質を帶びてゐる）、それ故にこれ等の空想の一つは同性愛的感情に相當するものである事が判る。第七公式に云ひ表はしてある命題は、この新しい要件に依つて動搖を來さない。それ故にヒステリーの徵候は必然的にリビドー感情と抑壓感情との間の妥協である。併しながら同時に、相反する性的特質の二種のリビドー的空想の統一にも相當する。

右に述べたことの實例を擧げることは控へておかう。私が經驗に依つて知つたところに依れば、肝要なところを短く拔萃して示して見ても分析に依つて得たほど確かな證明としての印象を與へ難いものである。十分に分析した病氣の實例もあるにはあるが、それはまた他日報告することにしよう。で、

私はこゝではたゞその命題を確言し、その意義を説明するに止めておかう。

（九）、ヒステリー徴候は一方に於いては男性的の、他方に於いては女性的の、無意識的性的空想の表現である。

この命題に對しては、私が他の公式に對して認めたほどの普遍妥當性を認め得ないと云ふことを私は明言しておく。この命題は、私の知り得る限りでは、或る場合の總ての徴候にもあて箝らないし、またあらゆる場合にもあてはまらない。これに對し、相反對立の兩性的感情が特殊な徴候的表現を示してゐる場合（卽ち異性愛及び同性愛の徴候が、その背後に隱れてゐる種々の空想と共に、相互に截然區別されてゐる場合）を指摘することはさして困難でない。併し第九の公式で云つてある事柄は非常に屢々遭遇することであつて、それがある以上は特にそれを擧げておくことも十分に意義のある事である。それは凡そヒステリー徴候の決定が達し得る最高の複雜さを意味するものゝやうに私には思はれる。從つて神經症が相當長びき、その神經症内に大きな組織化作用が行はれた場合に期待すべきものである。（一）

註（一）サドガー I.Sadger は最近に、こゝに論じてある事柄を彼自身の精神分析に依つて獨立的に發見した。（„Die Bedeutung der psychoanalytischen Methode nach Freud," Zentralbl. für Nerv. v. Psych., Nr.

229, 1907）併し彼はこの命題が普遍的に妥當すると論じてゐる。

ヒステリー徵候が兩性的意義を帶びてゐることは多くの場合に於いてこれを證明することが出來るが、この事は私が『性説に關する三論文』(一)の中で論じておいた事（人間が兩性的であると云ふ假定は精神神經症患者を精神分析することに依つて殊に明白に知ることが出來るとの説）に對して慥に興味ある證明である。同じ方面からの一つの全く類似した過程としては、手淫者がその意識的空想中でその立場に於ける男として並びに女として自分を感じようと試みることである。またこれよりもつと嵩じた類似が或るヒステリー發作に於いて示される。即ち、患者は根本に存する性的空想の二つの役割を同時的に演ずるのである。例へば私の觀察した或る患者の如きは、一方の手では（女として）着物を身體に押付け、他方の手では（男として）その着物を無理に引きはがさうとする。かう云ふ矛盾したことが同時になされるために、大低の發作に於いては、明白に造形的に現れてゐることが理解出來なくなるのである。大部分の原因はそこに存するのである。またこの同時に起る矛盾のために意識的空想が效果的に實現されてをりながら美事に匿されることになるのである。

註（一）本全集第五巻一三八頁參照。

精神分析の取扱中に、兩性具有的の意味ある或る徵候に逢着した場合には、それは甚だ重要である。

我々が或る徴候の種々の性的意義の一つを既に解決して了つてゐるに拘らず、なほその徴候が弱まらずに存續してゐるらしい場合には、疑つたり迷つたりすることはないのである。それは恐らく思ひも及ばなかつた相反兩性的なものになほ依憑してゐるのだ。またそのやうな場合を取扱つて見ると、我々は、患者がその一つの性的意義の分析の間には、思ひ付きに依つて反對の意義の分野中に、まるで近くにある待避線中にでも遁れるやうに、逃げ込んでしまふものであることを觀察することがあるものである。

ヒステリー發作の一般的徵象

『心理療法及び心理醫學雜誌』（モール編輯）第一卷（一九〇九年）に始めて發表。
原書全集第五卷收載。原名は „Allgemeines über den hysterischen Anfall"

A

その苦痛が發作となつて現れるヒステリーを精神分析にかけて見ると、これ等の發作は運動に移されたる、動作に投出されたる、默劇的に表現せられたる、空想に他ならぬことを、容易に信ずることが出來る。固より無意識的空想ではあるが、併し人々が白日夢の中に於いては直接的に摑むことの出來るもの、夜の夢の中からは分析解釋に依つて引出すことの出來るものと、多くの點に於いて同種なる無意識的空想である。屢々夢は發作の代償となるが同じ空想が夢に於けると發作に於けると別々の表現をとるために、夢が發作の説明となる事は更に屢々である。そこで我々は、發作を觀察することに依つてそこに現れてゐる空想を知ることが出來ると思ふであらうが、併し滅多にそれが知れないのである。大抵の場合、空想の默劇的表現は檢閲の影響を受けて夢の錯覺的なところと全く類似した歪みを示すやうになるものである。そこで空想の默劇的表現も夢の錯覺的なところも、まづ本人に意識されないと同樣、傍觀者にも理解し洞察することは出來ないものとなるのである。ヒステリーの發作はこのやうに、我々が夜の夢を解釋するに就いて必要としたと同樣なもみほぐしを要するのである。

その技巧は夢の解釋に依つて我々には既に分つてゐるのである。

併し、その歪みを生じた力、この歪みの意圖のみならず、歪みの技巧さへも兩者全く同樣であつて、

(一)發作の意味が判りにくいのは、その發作を材料として澤山の空想が同時的に現れるからである。つまり凝縮作用 Verdichtung のためにわけの分らぬものとなつてゐるのである。二つの(もしくはそれ以上の)空想に共通的なものが、夢に於けると同樣に、表現の核心となるのである。このやうに相互に重なり合つてゐる空想は全然別種類のものであることが屢々である。例へば、最近の願望と幼兒時代の印象の復活とが一つになつてゐることが屢々ある。そこで同じ神經作用が二つの意圖に、最も巧妙な遣方で、奉仕するのである。盛んに凝縮作用を用ふるヒステリー患者はその發作の形式としては二三通りあれば事足りるのである。それ以外のヒステリー患者は發作の形式を多種多樣にする事に依つて澤山の病理的空想を表現するのである。

(二)發作が洞察し難くなるのは、患者が空想中に登場する二人物の活動を、一人二役で演じようとするからである。つまり二重三重の同一化のために、判りにくゝなるのである。私がヒルシュフェルド Hirschfeld の性慾學雜誌、第一卷、第一號に載せた拙論『ヒステリーの空想とその兩性具有性への關係』(一) 中に擧げておいた實例を參照せよ。その中の患者は一方の手では(男として)着物を剝がさ

うとし、他方の手では（女として）着物をしかと身に押付けてゐるのである。

註（一）　本書一一〇頁參照。

（三）甚だ異常に歪みの効果の表れるのは神經作用の逆轉である。これは夢の仕事の中に常に見られる、一要素がその反對のものに變化するのと似てゐる。例へば、發作に於いては抱擁は如何なる形で表れるかと云へば、それは腕が痙攣的に後方に引きつけられ、兩手が脊柱の上で合するほどになるのである。――非常なヒステリー發作として背反弓 Arc de cercle は誰しも知つてゐるが、これは多分性交に特有な身體つきをその反對の神經作用に依つて力強く否定したものに外ならない。

（四）表はされてゐる空想中に於いて時間の順序が逆轉してゐることも、これまた同樣に我々を面喰はせることとである。が、これまた多くの夢に於いて丁度これに似たことが見られ、まづ終りから始まつて始めに至つて終ると云ふやうなことは夢では始終見られることとである。例へば或るヒステリーが誘惑の空想をその內容としてゐるとすると、彼女は着物を多少持上げて公園で坐して物を讀んでゐる。そこへ一人の紳士が近付いて來て彼女に話しかける。彼女はやがてその紳士と他の場所に行き、そこで柔しく彼と交ると云ふことになる。ところが彼女がこの空想を發作に表はすとなると、まづ彼女は性交に相當する痙攣狀態から始め、やがて立上つて他の部屋に行き、そこで本をよみ空想上の對話を

一人でブツ〳〵やつてゐると云ふ風である。

最後に擧げた二つの歪みは抵抗の如何に激しいかを我々に思はせる。抑壓されてゐるものがヒステリー發作となつて勃發するに際しては、やはりこの抵抗と云ふことを問題にしなければならない。

B

ヒステリーの發作が起るのは如何なる法則に從つてゞあるか、それは容易に分る。抑壓されてゐるコムプレクスはリビドーの纏綿と觀念の內容（空想）とから成立つてゐるからして、發作は（一）つには聯想的に assoziativ 起され得る。即ち、十分にリビドーの纏綿を受けてゐるコムプレクス內容が意識生活と結付く事に依つて動き出す場合である。（二）つには身體的に organisch である。即ち、內面的、身體的(ソマチッシュ)の原因に依つて、並びに外部からの心理的影響に依つて、リビドー纏綿が一定量を超えた場合である。（三）つには現實が苦痛になり或は厭はしくなつた場合に『病氣への遁逃』の表現として、即ち自己慰撫としてゞある。要するに第一次的傾向に奉仕するものである。（四）つには、第二次的傾向に奉仕してゞある。發作が起きることに依つて病人に有用なる或る目的が達せらるやう

になるや否や、病氣であることゝこの第二次傾向とは結付くのである。最後の場合に於いては發作は或る人々に對して適當するのである。彼等にとつては時間的に延ばしておくことも出來るのである。從つて假病をつかつてゐるやうにも見えるのである。

C

ヒステリー患者の幼兒時代の經驗を調べて見ると、そのヒステリー發作は當時は始終やつてゐたがそれ以來久しくやらないでゐる自己慾情的滿足 autoerotische Befriedigung の代償となつてゐるのだと云ふことが分るのである。この滿足（局部に觸れたり、大腿部を壓したり、舌を動かしたりなどして得る自慰）はまた意識の失くなつて發作の起きた場合にも再び起るのである。リビドーの昂まりに依り、また第一次的傾向のために自己慰撫として、發作が起つた場合には、また例の諸條件（患者がその下にて自己慾情的滿足をその當時に求めるやうになつたその諸條件）が十分に繰返される。その患者の忘れてゐるところを呼覺まして見ると、次のやうな諸段階が分つた。

（a）觀念內容なしの自己慾情（自慰）的滿足。

(b)滿足行爲となつて迸出する空想に同じく附加つてゐる自慰的滿足。
(c)空想を保持してゐる行動の放棄。
(d)變化してゐる場合もあるし變化してゐない場合もあるが、而も新しい生活印象に適應してヒステリー發作となつて出て來るこの空想を抑壓すること。
(e)抑壓されてゐて一見その習慣がなくなつてゐるやうに思へる滿足行爲も必要の場合には復活すること。幼兒的性活動の典型的循環。――抑壓、抑壓の失敗、並びに抑壓されてゐるものゝ復活。

思ひがけない時に尿の排泄があると云ふのはヒステリー發作と一致しないと考へる必要はない。尿の排泄がそのやうであるのは、單に幼兒時代の寢小便の形式を繰返したものに外ならぬ。また確にヒステリーに相違ない者で舌を嚙む者に時々我々は出會す。この舌嚙みがヒステリーに起つてもをかしくないことは、これがいちやつきに起つてもをかしくないのと同じである。患者が醫者の診察に依つて微細な點を如何に苦しんで診斷するかを知るやうになると、この舌嚙みが發作の中に出ることが一層容易になる。ヒステリーの發作に於いて自分を傷害することも(男子の方に多いが)起り得る。それは子供の時分の不幸(例へば格鬪の結果)をその傷害が繰返してゐる場合である。

意識喪失、卽ちヒステリー發作の恍惚は瞬間的な、併し確に見落し難き意識消失(總て激しい性滿

足――自慰滿足も同樣――の高潮に於いて感知することの出來る意識消失）から起るのである。若い女が性滿足の高潮に於いてヒステリー的な恍惚を示すのは、丁度右の如き事情に由ることが慥に分るのである。所謂催眠術に掛つた如き狀態、夢想中の恍惚、これはヒステリー患者に於いて最も屢々見られるところであるが、それまた同じところから由來してゐることが分る。この恍惚の機制は比較的單純である。まづ一切の注意は滿足過程の進展に集中されてゐる。と、滿足の高潮に入るや、この注意の纏綿の全體が急に中絕されて、瞬間的に意識の空白が生ずる。この所謂、生理的意識空隙はやがて抑壓の任務を受けるやうになるまで擴がる。さうして遂には抑壓者（檢閱）が引受けない一切をこの方が引受けるやうになるのである。

D

抑壓されてゐるリビドーが發作に於いて言動となつて出て來るのは如何なる仕掛に依るかと云ふにそれは一切の人間に於いて（女に於いても）既に存してゐる性行爲の反射機制である。この性交の反射機制は性活動の無制限な沒頭狀態に於いて我々が明かに見得るところである。既に古人も性交は一

つの『小さな癲癇』であると云つてゐる。吾人はこの言葉を變へることが出來る。ヒステリーの痙攣發作は性交に等しいものである。癲癇發作に似てゐると云ふだけでは、我々にあまり役に立たない。何となれば癲癇發作の起源は、ヒステリー發作の起源ほどにはよく分つてゐないからである。

總體的に云へば、ヒステリーの發作と共に、(ヒステリーそのものが既にさうだが)女に於いて性活動の一部分が復活するのだ。即ち子供時代に嘗て存在してゐて、當時は非常に男性的特質を示してゐたところの性活動の一部分が再び入込んで來るのである。多くの場合に於いては、ヒステリー神經症とは思春期に至つて男性的性感を清算してしまつて女をして女らしくならしめたところの例の典型的な抑壓力の極端な刻印に相當するものである。(『性說に關する三論文』――本全集第五卷――參照。)

子供の嘘二つ

『國際精神分析醫雜誌』"Internat. Zeitschrift für ärztliche Psychoanalyse" I, 1913 に始めて發表。原書全集第五卷に收載。原名は „Zwei Kinderlügen."

子供が大人の眞似をして噓をつくのはあるが、併し躾けのよい子供が噓をつくのは多くは特別の意味があるから、教育者たるものはそれを無暗に叱らずに注意させねばならぬ。それ等の噓はあまりに强烈な愛情が動機となつて生じたものであるから、もしその噓が子供とその愛する人との間に誤解を生ずるならば、大變なことになつて來る。

一

七歳の女兒（小學二年生）が復活祭の卵を彩るために繪具を買ふ金をお父樣に頂戴と云つた。父親は金がないからと云ふので、それを斷つた。それから間もなくまた女兒は、亡くなつた皇后樣の王冠のために醵金するとてお金を父親に乞ふた。父親は女兒に十馬克（マルク）を與へた。女兒は自分の醵金を收めて九馬克を父の机の上に返しておき、殘りの五十片（ペニヒ）で繪具を買つて、それを玩具箱の中に匿しておいた。食事の時に父親は五十片だけ足りないがどうしたか、繪具を買つたのぢやないのかと疑ふやうに尋ねた。彼女はそれを否定したが、併し彼女が一緒に卵を彩色する筈になつてゐた二歳年長の兄が彼

女を裏切つて繪具は玩具箱の中に這入つてゐると云つた。父は憤つて悪いことをした娘を母に托して叱らせたので、母はひどくこれを折監した。その後子供があまりにがつかりしてゐるやうな風なので、母親の方で心配した。母親は娘をたしなめて後に散歩に連れ出し種々に慰めた。併しその經驗の効果は拂拭すべからざるものとなつた。患者自らこの時の事を、自分の少女時代の轉換期を劃したと云つてゐる。その少女はそれまでは野性的な、希望に滿ちた子供であつたが、その時以來憶病な小心な子供となつた。花嫁になる時に母親が嫁入道具を整へたり色々に心配してくれるのが、自分でも不思議に腹立たしかつた。それは自分の金で何人もそれで何かを買つてはならないと思つた。若い妻になつてから、自分で入用な金を夫に出して貰ふのが妙にいやで、必要以上に『自分の』金と夫の金とを區別してゐた。分析取扱をしてゐる内に、夫からの送金が遲れて無一文で他所の町に居なければならなくなつた事が二三度あつた。嘗て彼女が私にさう云つた時に、では今度さう云ふ事があつたら私に云ひなさい、少し位なら立替へておきませうと云つた事があつた。ではどうぞお願ひしますとその時は云つてゐたが、併しその次に送金の遲れた時にはやはり私に默つて寶石を質入れした。私から金を借りる事がどうも出來ないと彼女は云ふのであつた。

子供の時分に五十片の金を自分で使つたことには、父親の思ひも寄らない意味があつたのだ。學校

へ行く少し前に、彼女には金の事で一寸した役割を演じたことがあつた。懇意にしてゐる近所の小母さんが彼女にお金を持たせ彼女よりまだ年下のその小母さんの男の子を連れて店へ買物に遣らしたことがあつた。買物をしたお釣りを彼女は年長者として家へ持つて歸るところであつた。併し途中でその小母さんの家の女中さんに出會した時彼女はそのお金を舗道の上に投出した。彼女自身にも何とも説明のつかない行爲を分析してゐる內に、彼女は自分の主を賣つて得た銀貨を投げ出したユダを思ひ出した。彼女は慥に學校へ行く前に既にキリスト受難劇を見たことが確にあつたと云つた。併しどうして彼女は自分をユダに同一化することになつたのか。

三歲半の時に彼女には非常にお氣に入りの子守娘がゐた。この子守は或る醫者と情を通じてゐたがその醫者の診察所へ行く時に子守はこの子供を連れて行つた。子供はその時種々な性的經緯を見せられたものらしい。醫者が子守娘に金を與へるところを見たかどうかは慥でない。併し娘は子供に小金を握らせ、お家へ歸つても默つてゐて頂戴よ、默つてゐるならこれで途中で何か（多分お菓子ぐらゐであらう）を買つてもいゝと云つたことは疑ひがない。醫者もまた時々は子供にお金を與へたらうと思はれる。併し子供は嫉妬心からして母に子守娘の事を告げてしまつた。母親は子供がお金を持つてゐるのを怪んで、何處から持つて來たかと尋ねたに違ひない。子守娘は暇を出された。

このやうに何人かから金を受取ると云ふことは彼女にとつては幼時から身體を許すことを、戀愛關係に入ることを、意味するやうになつてゐたのだ。父から金をとることは愛情を說明する價値があつた。彼女は父親が自分の愛人であると思ひ込んでゐたゝめに、その空想の力をかりて復活祭の卵の繪具の欲しさから禁斷を容易に犯すことになつたのである。併し金を着服したことを彼女は告白することが出來なかつた。その行爲の動機が彼女には無意識的であり、告白すべきことでなかつたから、彼女は否定したのである。それ故、父親の難詰は父にさし向けられてゐた子供らしい愛情をはねつけたことになつたのである。侮辱を與へたことになつたのである。それ故に彼女は勇氣が失つたのである。分析取扱をしてゐる中に非常に不興な心的狀態が出て來たことがあつた。それをもみほぐして行つてゐる。内に右に述べた記憶が出て來たのである。と云ふのは、彼女が私のところへよく花を持つて來るので、もう花を持つて來てくれるなと嘗て云つたゝめに、幼兒時代に受けたのと同樣な侮辱を彼女は感じたのであつた。

精神分析者にとつては敢へて事新しく云ふまでもない通り後年の戀愛生活中に幼時の肛門性慾が持續されることは非常に屢々あるものだが、さう云ふ場合の一つが幼兒の一寸した經驗の内に存するものである。また、卵を彩色したいといふのは、これまた同じ源泉から出てゐるのである。

二

生活上に或る失望があつた結果、今日では重病に罹つてゐる或る婦人は、嘗て以前には活潑な、眞理を愛する、眞劍な善良な娘であつたし、さうしてやがてはまた柔しい妻君となつた。併しそれよりもつと以前には剛情な、我儘な子供であつた。さうして彼女が可成り急速にあまりに善良なあまりに良心的な子供となつて行つたその間に、まだ彼女が小學生徒であつた頃に、或る事が起きた。その事は彼女の病氣の間に非常に自已批難の種となり、自分が根本的に出鱈目な人間である證據として考へられるのであつた。彼女の思ひ出はかうであつた、當時彼女は屢々自慢をしたり嘘を云つたりした。嘗て學校への途上で學友の一人がかう云つて自慢した。――昨日私はお晝に氷（アイス）を喰べたのよ。彼女は答へた、なんだ氷なんか自家（うち）では毎日喰べてるわよ。實は彼女はお晝食に氷（アイス）を喰べるとはどんな事か判つてはゐなかつたのだ。氷と云つては車に載せて運んで行く長い塊の氷しか彼女は知らなかつた。併し彼女は氷とは何でも素晴らしく美味いものに相違ないと考へたので、何くそ友達になど負けてたまるものかと思つて、そんな事を云つたのであつた。

彼女が十歳の時に、圖畫の時間に、嘗て道具を使はずに圓を描いて御覽なさいと云はれた事があつた。併しその時彼女はコムパスを使つて見事な圓を描き、誇りかにそれを隣席の友に示した。教師はやつて來て自慢をしてゐるその女生徒の云ふ事を聽いたが、圓周のほとりにコムパスの線のあとを發見し、本當の事を云へとなじつた。併し女生徒は頑固に否認し、どんな證據をつきつけられても降參せず、知らぬ存ぜぬで押通した。教師はそれに就いて父親と相談したが、併し平常はこの娘は非常によい子だから、今日のところは大目に見ておくと云ふ事に二人の意見が一致した。

この子供の二つの嘘は同じコムプレクスから發してゐるのだ。五人の兄弟姉妹の中の最年長者として彼女は早くからその父親に異常に激しい感情を寄せてゐた。が、やがて一人前になつてからは彼女の生涯の幸福は、その父親への感情に於いて破れねばならなくなつた。彼女は程なく、自分が思つてゐたほど父親が偉い人間ではないことを發見せざるを得なかつた。彼は金の問題で困つてゐたが、彼女の思つてゐたほど有力でもなくまた高潔でもなかつた。併しこのやうに自分の理想を引おろすことは彼女にはうれしくなかつた。女と云ふものは自分の愛する人間のためには非常に名譽心の強いものであるが、彼女もその例に洩れず、世間に對して父親を支持してやらうと云ふ強い衝動を感ずるやうになつた。そこで彼女は、父親を友達の前でつまらない男に見させないために、自慢をしたのであつ

た。後に彼女は晝食の時の氷（アイス）とは『冷氷食物（グラーセ）』の事であると知つて、この記憶の故の自己批難がまたやがて硝子の碎片や木片に對する恐怖と一致するやうになつた。

父親は非常に優れた製圖家であり、その技能を示すことに依つて屢々子供の驚嘆と賞讃とを購つた。彼女が學校で、コムパスの力を借りて始めてなし得るやうな例の圓を描いたのは、そのやうに父親に同一化してゐたせいである。それはまづかう云つて誇りたい氣持であつたのだ。――これ御覽、私のお父さんはこれくらゐ巧いのよ！　あまりに強く傾倒してゐることの罪惡を意識してゐる證據は、欺かうとしてゐることに表れてゐる。告白が同じ理由から不可能である事は前にも述べた通りである。それは匿れたる近親姦的愛情を告白することでなければならなかつたからだ。

子供の生活に於ける以上のやうな挿話を輕く見ることは出來ない。さう云つた子供時分の事から將來子供の不道德な性格を發展させるやうになつたならば、由々しい間違であらう。併し恐らく、子供の德性の將來如何は子供の心理の最も強い動機と關係があり、また後に如何なる人間となり、或は神經症となるかどうかは、やはり子供時分の扱方如何に依つて豫想することが出來るのである。

或る婦人同性愛者の心理的源因

『國際精神分析雜誌』第六卷（一九二〇年）に始めて發表。原書全集第五卷。
原名は „Über die Psychogenese eines Falles von weiblicher Homosexualität."

一

女の同性愛は男の同性愛よりも慥に稀ではないが、併し男のほど騷々しくはないので、刑法に看過されてゐるばかりでなく、精神分析的研究からも等閑に附せられてゐる」であるからあんまり變つた場合でない限りは、そこから女の同性愛の心理的發生史を見落しなく、非常に確實に認識し得る如き場合であるならば、その場合に就いての報告は人々の注意を呼ぶべき價値があるであらう。その報告の言葉が事件の一般的輪廓とそれを觀察して得た結果とだけに止まり、一切の個々の特徵に亘つてゐないとするならば、そのやうな約筆は事件が最近の話であるために醫師として他人の迷惑を思ひ圖つたゝめであることは明かである。

十八歳になる、美しい悧巧な、社會的地位の高い家族の或る娘さんが失敗をして、自分より十歳ばかり年長の夫人に感傷愛（ツェルトリヒカイト）を捧げ『社交界に出られないほど』追蒐け廻したので、娘さんの兩親が大層心配したとの事實がある。その夫人は高貴の名あるに拘らず妖婦（コケット）であるとその兩親は云ふのである。彼女は多くの男を誘惑してそれと關係を結んでをりながら同時に或る有夫の女友達と別懇の關係に這

入つてゐることをその兩親は知つてゐるのである。娘さんはこの悪い噂に反對しようとはしなかつた。またその噂が不適當だとか不純だとか云ふわけではないに拘らず、そのためにその夫人に對する愛敬を失ふこともなかつた。如何に禁斷しても如何に監視しても、彼女はその隙を見ては僅かの機會を逼さず捕へてその愛人と會はうとし、その動靜を探り、幾時間も愛人の門前や電車停留所に佇んでゐて花を贈つたり、なんかするのであつた。この一つの興味がこの娘さんに於いて他の一切の興味を撥無してゐることは明かである。彼女は自分の將來の敎養などには拘泥してゐないし、また社交や娘らしい娯樂などには何の價値も認めないで、たゞ自分の親友となり力となつて呉れる二三の女友達との交りにのみ一所懸命になつてゐるのであつた。その娘さんと例の怪夫人との間がどれくらゐ深くなつてゐるか、感傷的な有頂天の限界を既に越してゐるのかどうか、それは兩親にも分らない。若い男に興味を持つたり彼等からチヤホヤされて喜ぶやうなことの彼女にないことは兩親は認めてゐる。併し一夫人に對する彼女の現在の傾向が一層高い程度に於いて存續するやうになり、遂には他の女たちに對して同樣な愛情を寄せるやうに慥になつたことを兩親は認めてゐる。そこで父親はこれは怪しからぬ大いに嚴格にしなければならないと考へるやうになつた。

一見互に相反と思はれる彼女の態度の二つの部分が娘に於いて一番困ると兩親は云ふ。卽ちその一

つは彼女は醜名のあるその愛人と公然と衆人環視の街頭に出沒し家名を傷けることを何とも思はないと云ふことゝ、二つにはその愛人と會ふやうにするためには、また會つたことを胡麻化すためには、どんな出鱈目でも嘘でも平氣で云つて除けて恬として恥ぢないと云ふことである。このやうに一方に於いてはあまりに公々然とやつてのけ、他方に於いては全然匿し立てをするのである。或る日から云ふ事があつた――實は右の如き事情では到底いつかは起らねばならないことであつたらうが――即ち彼女の父は娘と連れ立つてゐる問題の夫人に街上で出會した。彼は如何にも腹立たしげな眼差しで――その眼差では後にいゝ事のない事は分つてゐた――二人を睨みつけて行過ぎた。直ぐその後に娘さんは夫人と別れて、そこから程近い市內鐵道の切通しの中へ塀を越えて飛込んだ。彼女のこの行ひは疑ひもなく眞劍に自殺を試みたものであつたが、永い間病床に臥することになつて後悔をした。併し幸にして怪我は大して永引きはしなかつた。彼女が恢復してからは總ての事情は彼女のために以前よりも好都合になつた。兩親はも早これまでのやうに決然たる態度で反對を敢へてせず、また娘さんの求愛に對してこれまで控目勝にあしらつてゐた例の夫人は疑ふまでもなく明かに情熱を起し、彼女を一層親密に扱ふやうになつた。

この不幸事のあつて約半年の後に兩親は醫者にこの娘を何とか常態にしてくれぬかと賴んだ。娘に

自殺を企てられて以來、兩親は家庭でガミ〳〵云つて見たつて當面の事情を何ともよく仕樣がないと悟つた。併しこゝでまづ、父母がどんな風であるかを斷つておくのがよいと思ふ。父は眞面目な尊敬すべき、根柢に於いては感傷愛を持つた人であるが、あまり嚴格であるために子供等にいさゝか厄介がられてゐる。父が一人娘に對する態度は娘の母卽ち自分の妻に對する顧慮に依つてあまりに甚だしく決定され過ぎてゐた。彼が始めて娘に同性愛的傾向あることを知つた時、彼は激怒に燃え、威赫に依つてこれを彈壓しようと思つた。彼は當時、娘を何と見てよいものか考へ惑つた。娘を不良少女と見るべきか、變質者と見るべきか、精神病者と見るべきか、その判定に迷つたが、何れにしても彼はその迷ひに苦んだ。またその災難の後に彼は勝れたる諦めに達することが出來なかつた。私の同僚の一人は彼の家族の一員がこれと似たやうな脫線的行爲を仕出來した時に『こいつもやつぱり災難の一つさ!』と立派に諦めてゐたが、この場合はさう云ふ高らかな諦めをすることが出來なかつた。娘の同性愛は彼を完全に憤激させる或るものを含んでゐた。彼はあゆらる手段を盡して娘の同性愛を撃滅すべき決心をした。ヰイン人は一般に精神分析を輕視する風があるが、彼はさう云ふ類でなく、何とか精神分析の力を借りる事にした。この方法でも駄目とあつたならば、彼はなほ最も力強い對抗方法を豫備してゐた。早速結婚させてしまへば娘の自然的本能は目醒め來り、その不自然な傾向は壓潰さ

れるに相違ないと云ふのである。

娘さんの母親の心持はあまりよく分らなかつた。彼女はまだ若々しい夫人で、自分の美を以て愛されたいと云ふ要求が、まだ明かに殘つてゐた。彼女は娘さんの夢中の戀愛を、父親ほどには悲劇的に考へてはをらず、またそれほどく〳〵心配してもゐなかつた。母親は娘が例の夫人に對する惚込みを祕密にしてゐたことを永い間寧ろ樂んでゐた。併し娘さんが例の夫人に對する自分の感情をあまりに公然と世間に見せつけるために、彼女も實は反對的態度をとるやうになつたやうである。彼女自身も久しく神經症的になつてゐた。夫の方から非常に甘やかされることを喜んでゐた。その子供等の扱方は甚だ不公平で、元來あの娘さんに對しては酷で、三人の男兒に對してあまり柔しすぎた。その內の季の兒はうら生りつ子で、まだ三歲であつた。彼女の性格に對して何がもつと決定的な要因となつてゐるかを知ることは容易でなかつた。何故ならば、どうしたわけか（それは後になつて漸く分つたことだが）患者（娘さん）に母親の事を訊いてもいつも控目勝ちにしてゐて多くを語らなかつた。父親の事だとそんな風はなかつた。

この娘さんの分析取扱を引受けることになつた醫師は一種の懸念を持つたが、それには相當の理由があつた。彼の扱ふ症狀(?)と云ふのが是非とも分析しなければならないと云ふわけのものでなかつ

た。精神分析にのみその効果を期待しなければならない底のものでなかつた。ではどう云ふ症狀に對して最も理想的に分析は有効であるかと云ふに、平常は自分自身を完全に支配することの出來る人でありながら、或る内部の葛藤のために惱み、それを自分だけでは何とも始末を附け兼ね、そこで分析者のところへ來て何とか助けて欲しいと云ひに來る如きさう云ふ場合である。そこで醫師は、病的に二つに分裂してゐる人格の一方の部分と提契し、葛藤の他方の相手と戰ふのである。これと違つた場合だと分析は多少とも都合が惡い。元來の內的困難の上に新たな困難が附加はるわけである。建築主が自分の趣味や要求に合つた家を建築家に建てゝくれと注文したり、或は敬虔なる建立者が畫家に聖畫を描かせ、その一隅に禮拜者として自分自身の像を描込んで貰つたりするのとは、精神分析の條件は根本に於いて一致しない。家內は神經質で困ります、どうも二人の仲がうまく行かない、家內を健全にして下さい、結婚生活が再びうまく行くやうにして下さい、などと云つて亭主が分析醫の許へ來るのは殆ど每日のやうにである。併しさう依囑通りにはならないで、つまり亭主が分析取扱ひを懇願した當の目的通りにならないことが甚だ屢々あるのだ。妻君に神經症的な禁制がなくなると、彼女は結婚を絕切つてしまふことがある。つまり結婚を續けてゐたのは彼女が神經症的であつたゝめで、この條件がなくなると結婚も續けられぬと云ふ事がある。或はまた、自分の子供は神經質で剛情で困る

から何とか健全にしてくれと云つて來る兩親がある。彼等は健全な子供とは兩親に厄介をかけず、兩親の喜びとなる如き子供であると考へてゐる。子供を健全にする事は分析醫師に首尾よく出來ようが、さて全快して見ると愈々決斷的な足どりで自分自身の道を步み、兩親は以前にも增して不滿を感ずると云ふ場合もある。約言すれば、本人が自分で分析を受ける氣になつて來たか、或は他人に行けと云はれて來たか、彼が自分自身で已れを變更したいと願望してゐるか、或は彼を愛し、また彼から愛されねばならない彼の身邊の者がそれを願望してゐるか、これは大事のことである。

なほもう一つ困つたことは、その娘さんは別に病人でも何でもないと云ふ事である。彼女は內的の根據から惱んでゐるのではないのだ。自分の事を別に困つたものだとは思つてゐないのだ。で、與へられた問題は、神經症的な葛藤を解決するのに存するのではなく、一種變つた性器上の性組織を別の性組織に變轉させることに存するのだ。この同性愛を取除くと云ふ仕事は、私の經驗では生やさしいことゝは思へない。私の知り得たところでは、寧ろこの仕事は或る特別に都合のいゝ事情の下に於いてのみ成功するのである。また成功した場合と雖も、その成功とは要するに、我々がその同性愛的になつてゐる人物のためにこれまで閉ざゝれてゐた異性への道を切開いてやると云ふ、つまり兩性的機能を完全に復活してやると云ふだけである。そこで他人をして世間から尊敬されてゐる道を避けしめ

ようとしめまいと、それは分析者の勝手である。また個々の場合に實際にそれを行つて來たのだ。また常態的の性感は對象選擇の制限に依存すると我々は云はなければならない。さうして一般に、完全に發展してゐる同性愛者を異性愛者に變へる企ては異性愛者を同性愛者に變へる企てよりも別に大して容易だと云ふわけではない。たゞ善き實踐的の根據からして後者を決して人々が試みないだけである。

何れにもせよ同性愛の形態は甚だ多樣であつて、これを分析療法に依つて取扱つて成功したことは、數から云へば實際には大したことはない。概して云へば同性愛者はその好きな對象を放棄し得るものではない。同性愛者が只今放棄した快樂は、異性愛者へと變轉した後には異性的對象に於いてやはり再發見し得るのだと納得せしめることは出來ない。彼等が分析取扱を受けに來るとしても、それは大抵は外的動機に强ひられて來るので、彼の對象選操が社會的に不利であり危險であるからだ。で、さう云つた自己保存本能の諸要素は性本能の働に對抗しては甚だ微力であることが分るのである。そこで人々は直ちに秘密の計畫を發見し、此の試みが明かに失敗となればそれに依つて氣安めを――自分は自分の變態に對して出來るだけの事をしたから、この上はその變態に任せても良心にやましくないとの氣安めを得るやうになるのである。愛する兩親や身邊の者等に對する顧慮からして治療して貰ふ氣になつてゐる場合には、少々樣子が違ふ。その場合には同性愛的對象選擇に反對するエネルギーを

發展させ得るリビドーの努力が實際に存在してゐるのだ。併しその努力が達せられることは極稀である。同性的對象への定着がまだあまり強くなつてゐない場合に於いてのみ、卽ち異性愛的對象選擇が殘つてゐる場合に於いてのみ、つまり性組織がふらついてをり、明かに兩性具有的である場合に於いてのみ、これに精神分析的療法を施す甲斐があると申すべきである。

これ等の論據からして私は、兩親に對して、必ずしも彼等の希望通りになるかどうか分らぬと云ふことを豫め斷つておいた。私は旣に說明しておいた、この娘を二三週間又は二三ケ月間、仔細に硏究するのであると。それから後でないと、分析を續け影響を與へて如何なる結果になるかと云ふことが出來ないからである。總ての場合に於いて、實は分析は二つの截然區別される二つの時期に分たれてゐる。第一の時期に於いては、醫師は患者に就いて必要な知識を得ようとする。精神分析を受けるためにはかうかうして貫はねばならぬと云ふ事について患者に知らせる。さうして分析に依つて得た材料からして當然からうでなければならないと醫師が信ずるやうになつた患者の病苦の發生具合を患者に說明して聞かせる。第二の時期に於いては、患者は自分に與へられた材料を自分でこなし、自分で加減し、自分が空しく抑壓してゐたものを自分で想起し、またその他の材料をも一種の復活のやうな方法で再經驗せんとするのである。その間に患者は醫師の云つたことを確證し、補充し、是認する。か

ゝる仕事の間に始めて患者は抵抗を克服することに依つて、目指す内的變化を經驗するのである。さうして漸く納得が行くのであるが、この納得は醫師の權威には關係なく獲られるのである。これ等二つの時期は分析治療の全期間中に常に互に截然區別されて起ると云ふわけではない。抵抗が或る條件を寛和する場合に、さう云ふ事が起るのである。併しそれが起る場合にはこれを旅行の二つの部分にそれ〴〵相當させて比較することが出來る。旅行の第一の部分とは一切の必要な準備で、これは今日甚だ錯雜してゐて、さうして十分にするに困難な程である。つまり切符を買ひ、乘車場に赴き、車中に座席をとるまでの用意である。この用意が整へば、今や人々は遠國に旅立つべき權利と力とを得たことになるのだが、併しこの準備が出來たゞけでは目的に向つてはまだ一歩も半歩も踏み出してはゐないのである。一驛から他驛へと本人が自ら進んで始めて目的に向つてゐることになるのである。さうして旅行はこの部分に入つて始めて分析の第二の時期に比較し得るのである。

私の只今の婦人患者の分析はこの二つの時期に分れてをつたが、併し第二の時期の始まりをあまり多く超えるに至らなかつた。それにも拘らず、抵抗の或る特殊な觀念群があつたゝめで、彼女の變態化の過程に就いての私の徹底的な洞察や考察が完全に確證せられるに到つたのである。併し私が彼女を分析した結果を報告する以前に、私は二三の點を——それに就いては私が旣にざつと言及しておい

たし、また讀者諸氏もその興味の第一の對象として感じてゐるところの二三の點――に就いて話しておかねばならない。

私は娘さんがどの程度までその情熱を滿足させてゐるかと云ふことには或る部分無關係に診斷を始めたのである。分析の間に私が知るやうになつた事柄は、この點に關して甚だ好都合に思へた。彼女の戀愛の何れの對象からも彼女は時々の接吻や抱擁を享受したゞけで、それ以上には及んでゐない。彼女の性器上の貞操――ともし云つてよいならば――は、穢されないであつた。彼女の最初の、他の場合よりも遙かに、最も强い感情を呼覺すに至つた例のすれた婦人は彼女に對しては始終やゝ冷淡であつた。手に接吻させる位でそれ以上の事は決して許さなかつた。娘さんが自分の戀愛の純潔を强調し、肉體的性交に傾かなかつたと云ふのを誇りにしてゐたのは、それは已むなくさうなつた事を自分の婦德のせいにしてゐるらしい節があつた。併し娘さんがその尊大なる愛人を賞め、夫人は高貴の出であるから、家庭の事情で現在のやうな羽目になつてゐるので、それでも品位を落すやうな事はしないと云つてゐるのは、全然噓ばかりとも思はれない。何となれば、この夫人は娘さんと會ふ度に口癖のやうに、自分又は一般の女にひかされてゐてはならないと云ひ聽かせてゐたからである。さうして自殺の企てを娘がするまではいつも强く突刎ねるやうな態度をとつてゐたのである。

私が說明しようと試みた第二の點は、精神分析が取扱ひの手掛りともなすべき娘自身の動機に關するものであつた。彼女は自分が同性愛者でなくなりたいと自分からたつて要望してゐるものではないと、正直に告白してゐた。それどころか、彼女は同性愛以外の惚込みなどは考へられないのであるが、併し彼女は兩親故に眞面目に治療を受ける氣になつたと付加へるのであつた。何となれば、兩親にさう云ふ心配をかけるのは如何にもつらいことだからである。また私はこの言葉を聞いたことを直ちに好都合に思ふやうになつた。私はこの言葉の背後に如何なる無意識の愛情がひそんでゐるかを、思ひ及ばなかつたのである。これが後に明かになつて來たに就いては、治療の力に影響されて早くそれが出て來ることになつたゝめである。

分析者に非ざる讀者諸氏は、他の二つの問題への答辯を既に久しく待詫びてゐられることであらう。この同性愛者なる娘は明かに異性の體的特徵を示してゐたか、さうして先天的又は後天的の同性愛者の一つの場合であることを證明してゐたか。

この第一の質問には相當の意義あることを私は否認するものではない。たゞ人々がこの意義をあまり大袈裟に考へ過ぎないやうに、さうしてその意義のために次の事實を無視しないやうにして貰ひたいものである。その事實とは、個々の第二義的の異性的特徵なるものは大抵の常態的個人に於いて一

般に甚だ屢々認められるものであり、またその對象選擇には同性愛と云ふほどの意味の變り方が見られない如き人物に於いても異性の身體的特徴に顯著に見られ得るものだと云ふ事である。つまり、言葉を換へて見れば、男女何れの性に於いても身體上の兩性具有の度は心理上の兩性具有の度から相當いの程度まで獨立してゐると云ふ事である。これ等二つの命題の制限として附加しておくべきは、この獨立が女の場合に於いてよりも男の場合に於いて一層明白であると云ふ事である。女の場合に於いては、相反する兩性的特質の身體的及び精神的の現れが寧ろ常に必ず一致してゐる。併し私は只今、こゝに提出せられた二つの質問の第一に對して私の患者に關係させては答辯すべき場合でない。精神分析者は實は、その患者の關係を立入つて調べると云ふ事は、或る場合には拒否するのである。女としての肉體の型から甚だしく離れてゐると云ふ如き點は慥に存在しない。月經の障害も少しもない。教育のある美しい娘が父親のやうな脊の高い骨骼を示し、その表情も女らしく柔かいと云ふよりは男らしく鋭いならば、そこには肉體上の男性が現れてゐると人々は見るのである。娘に二三の知力的な特質があれば、それも男性的本質と關係があると人々は考へるだらう。同樣に、彼女の理解力が鋭かつたり、その思想が冷靜で透徹してゐたり、少くとも情熱に支配されて了はぬ限りは、それは男性的特質と關係があると考へられるのである。併しこれ等の區別は寧ろ常套的であつて、學問的でない。そ

んなことよりも慥にもつと重要なのは、彼女がその性對象に對する態度に於いて全然男性的の型を示してゐるといふ事である。愛を仕掛ける男の屈從と大袈裟な性對象買被りとを示してゐるといふ事である。一切の獨尊的(ナルチスチシユ)滿足を放棄し、愛せられることよりも愛することの方を好んでゐる事である。彼女はこのやうに女を性對象に選んだばかりでなく、自分の方ではまた男性的な心的態度をその對象に對してとつてゐるのである。

彼女は先天的な同性愛者か後天的な同性愛者かと云ふ第二の質問に答へるには、まづ彼女の障害が如何にして發展し來つたかの歷史を述べなければならない。それを述べて見ると、如何にこの質問の提示それ自身が無駄であり、不適當であるかゞ自ら分るのである。

二

さて以上隨分永たらしく前置きを書いて來たが、これから述べる彼女のリビドー發達史は甚だ簡單な大觀的なものである。娘は幼兒時代に定石通りの女エディポス・コムプレクス(一)をあまり著しくはないが持つた。後にはまた、あまり年の違はない兄を父の代償にするやうになつた。早期青春時代の性

的な夢は、想起することも出來なかつたし、分析に依つて發掘することも出來なかつた。兄の性器と自分のとを比較することは潜在期（五歳頃又はそれよりやゝ早く）に起き、さうして强い印象を殘した。その印象の影響のあとは細かく辿ることが出來た。早期幼兒時代の自慰に就いてはあまり多く解釋出來なかつた。つまりこの點について説明出來るほど深く分析出來なかつた。彼女が五歳から六歳までの間に二番目の兄弟が生れたが、この事は彼女の心的發展にあまり大して影響を及ぼさなかつた。學校時代または思春期前時代に彼女は性生活の事實を漸次に知るやうになつたが、この事實を彼女は云はゞ定石通りに、羞耻と嫌惡との混合した感じ（その程度こそあまり大袈裟ではなかつたが）を以て受容れたのであつた。彼女の心理に就いてのこれ等總ての知識は甚だ貧弱であるやうに思はれる。私としてもこれだけで十分だとは云ひ得ないのである。恐らく青春期の話としてはもつといろ〳〵あつたであらうが、私はそれを知らない。旣に云つた道り、その後段々と分析して行つて、或る健忘を復活させた。併しこの復活した健忘は他の（同性愛についての）健忘を復活させたもの――これを復活させ難かつたのは相當の理由がある――より大して信用がおけると云ふわけではなかつた。娘はまた嘗て神經症になつたことはなかつた。分析に際してヒステリー的症狀を示さなかつたので、彼女の幼兒時代にあつた事を徹底的に調べるべき契機が直ちに得られなかつたほどであつた。

註（一）女兒が父親を愛し母親を拒ける無意識定着を『エレクトラ・コムプレクス』"Elektrakomplex"と云ふ語を以て表はさうとする向もあるが、このやうな新語をわざ〳〵作つても何の進歩も利益もないので私はあまり贊成出來ない。

十三、四歳の頃に彼女はあまりにも大袈裟な感傷的な、偏愛をいつもきまつて兒童遊園地で會ふまだ三歳にならない男の兒に對して示した。彼女は心からその子供の世話をしてやつたので、その後永くその子の兩親と交際するやうになつたほどであつた。かう云ふ事件があつたところから見ると、彼女はその當時自ら母になつて子供を持ちたいとの強い願望を抱いてゐたのだと結論してもよからう。併しその後暫く經つてからその子供は彼女にどうでもよくなつた。さうして今度は成熟した、併しまだ若々しい婦人に興味を寄せるやうになつたが、その興味を表示すると父親からやがてひどくたしなめられた。

この變化の起きた時期は丁度家庭內に或る出來事が起きた時期と丁度一致してゐることは疑ふまでもなく確かな事であつた。この出來事から我々はこの變化の由來を說明し得る筈である。以前には彼女のリビドーは母性的なものに向けられてゐたが、それ以後彼女のリビドーは成熟した女性に對する同性愛となり、さうしてそのまゝ存續するやうになつたのである。我々が理解するについて甚だ重大

なことの出來事は、母の新たなる妊娠と三番目の弟の誕生とであつた。それは彼女が十七歳頃のことであつた。

私が次に述べてある事の內に發見するであらう關係は私が自分の構成の才に依つて生み出したことではなく、非常に信賴するに足る（その客觀的確實さに就いては私が保證する）分析材料に依つて知り得たところの關係である。殊に相互に照合することに依つて容易に解釋し得るやうになつた一聯の夢に依つて、この關係は確かにさうに違ひないと云ふ事になつたのである。

分析の結果、判然認識されるやうになつたことは、愛人なる夫人は母の一代償であると云ふ事である。さてこの夫人はとにかく母ではなかつたが、併しこの夫人が娘さんの最初の愛人ではなかつた。季の弟が生れて以來、彼女の愛の向けられた最初の諸對象は實際は母親たちであつた。避暑地や都會での家族の付合ひで知合つた三十から卅五歳までの夫人であつた。母性と云ふ條件は後にはなくなつた。何故ならば、彼女は今一つの條件（それが段々重要になつて行つた）と現實に於いてうまく合はなかつたからである。最後の愛人たる例の『夫人（ダーメ）』に特に激しい愛着を持つたにはなほ別の根柢がある。その根柢は本人が或る日苦もなく發見した。彼女はその夫人の纖細な姿、強い美、嚴格な性質などに於いて、自分の直ぐの兄を彷彿した。最後に擇ばれたるこの對象はこのやうに、彼女の女の理想に

協ふと共にまた男の理想にも協つた。つまり彼女の同性愛的並び異性愛的の條件は夫人に於いて一致したわけである。多くの男性同性愛者を分析して見ると、同様な一致の認められることは人々の知るところである。これはつまり、同性愛の本質及び起源をあまり簡單に考へないやうに、また人間は總て兩性具有的である事を忘れてはならないと云ふ事に就いて暗示するものである。（一）

註（一） I. Sadger: Jahrbericht über sexuelle Perversionen. Jahrbuch der Psychoanalyse, VI, 1914und a.a. O. 參照。

併しこの娘が既に自分でも成熟してゐて強い願望を持つてゐた時分に、季の弟が生れたことに依つて動かされて、自分の情熱的ななつかしさの感情（感傷性）をその兒を生んだ者（自分自身の生母）に寄せるやうになり、またその母の一代償に向けて表はすやうになつたのは何と解していゝものか。人々が普通に知つてゐるところに依れば、正にこの反對の事を期待しなければならない筈である。さう云ふ事情の下では母親と云ふものは、既に婚期に達してゐる娘の前で遠慮勝ちになる。娘たちは母親に對して、同情と輕蔑と嫉妬との混じた感情を抱くものである。この感情は母親に對するなつかしさの感情（感傷性）を増させる役には立たない。我々の觀察してゐる娘さんは母親に對してなつかしさの感情を持つべき理由は抑々なかつたのである。まだ若々しい妻君にとつてはこのやうに早くほころ

びそめた娘は煙つたい競争者であつた。彼女は娘を息子たちよりも抑へつけ、その自由を出來るだけ制限し、父親から引離しておくために特に熱心に娘を監督した。かう云ふわけで、もつと好きになれる母さんが欲しいと云ふ氣持は早くからこの娘さんに起きてゐたことであらう。併し何故にその當時に蝕ひつくすやうな情熱となつてその願望が燃え上つたか、それが分らない。

その說明は次の如くである。——この娘は幼兒的エディポス・コムプレクスが思春期に復活する時代に入つてゐたが、それが失望となつて彼女を襲ふた。子供、殊に男の子を持つと云ふことは地獄として意識された。それが父親の子であり、父親そつくりの子供であるとは彼女の意識のまだ少しも知らないところだ。(一)ところがその子供を持つのが自分ではなくて、憎らしい戀敵、女親であることを知るに及んで、彼女は憤然として父親に叛くのである。いや男一般に叛くのである。この最初の大失敗以來と云ふもの、彼女は自分の女性をかなぐり捨て、自分のリビドーのやり場を他に求めるやうになるのである。

註（一）一一頁參照。

多くの男子は苦痛な最初の經驗以來、不信なる女性を離れて女の敵となるものであるが、この場合の娘の態度が正にこれと同じである。現代の或る魅力ある、不幸な貴族の一人が許嫁に他の男と驅落

されて同性愛者となつたと云ふ話がある。この話が果して事實通りであるか、どうか私は知らない。併しこの噂には、一片の心理上の眞理が含まれてゐる。我々のリビードは總て、常態として生涯中、男性的對象に向つたり女性的對象に向つたりしてゐるものである。若い仲間は結婚するとその友を捨て結婚がうまく行かないとまた元の枝に歸つて來る。勿論、この動搖が甚だ根本的であり窮極的である場合には、我々をそこに或る特別の契機の存することを想像する。つまり男女何れかの方を決定的に好ましめ、對象選擇を確定的に貫徹するに適當な時期を恐らく待つてゐたところの特別の契機があると我々は想像するのである。

問題の娘さんはこのやうに、例の失望の後に、子供を欲しがり、男子が好きになり、女としての役割一般を自ら拒否するやうになつた。で、今や明かに甚だ種々なことが起りさうになつてゐるわけである。然るに實際に起つたことはその最も極端なことであつた。彼女は自ら男となつて、父の代りに母をその戀愛の對象とした。(一)母に對する彼女の態度は始めから相反感情並存的(アムビヴアレント)であつた。そこで當然起り易くなつてゐたことは、母に對する早期の戀愛を復活し、その愛の助長を以て母に對する現在の敵意を超過的に補償 Ueberkompensation させることであつた。併し現實の母ではそれを始める由がなかつたから、既に說いた通りの感情の變化からして一つの母代償を(人々がなつかしさの感を熱

情的に寄せることの出來た母代償を）求めるやうになつた。（二）

註（一）人々が戀愛關係に入るに就いてまづ、その對象に自分自身を同一化することはなか〳〵稀でない。これは自己戀慕（ナルチスムス）への退行の一種と見做すべきものである。この同一化が首尾よくなされて後に、人々は新しい對象選擇に於いて、以前のと反對の性に容易にそのリビドーを纏綿させるやうになるのである。

（二）こゝに說いてある如きリビドーの轉位は、慥に總ての分析者が、神經症者の健忘を復活させた經驗からして知つてゐることである。たゞこのリビドー轉位がこれ等の神經症者に於いて起るのは、感傷的な幼兒時代（戀愛生活の早期開花時代）に於いてゞある。我々の扱つてゐる娘は全然神經症的ではないのであるから、轉位は彼女に於いては思春期に入つて直後であつたのだ。尤もその當時は全く無意識ではあつだが。特にこの時期にかう云ふ事があると云ふのは、甚だ重大な意義あることゝして一度は特筆せらるべきでなからうか。

娘が母親に對する現實上の關係からの一つの實踐的の動機としては、『病氣の利益』,,Krankheits-gewinn“と云ふのがなほそこに附加はる。母親はまだ男たちからチヤホヤされることが好きな方であつた。で、娘が同性愛者となり母に男たちを委讓したのは、云はゞ母を回避したのである。これまで母に不機嫌な顏をされてうるさかつたことを蹴飛ばしてしまつたのである。（一）

註（一）同性愛の原因としても、リビドー定着の機制としても、これまでこのやうな回避を今まで論じたことはなかつたから、私はこゝで同樣な分析的觀察を一つ附加しておきたいと思ふ。その觀察は或る特殊な

事情に依つて興味があるのである。私は嘗て二人の雙生兒を知つてゐたことがあつた。彼等は强烈なリビドー的衝動を具へてゐた。その內の一人は女と關係することが好きで、夫人や娘と問題を起したことが幾度もあつた。今一人の方も始めの程は同じ道をとつてゐたが、あまり似てゐるものだからつい危いところで兄弟と間違へられたりして妙に混線を見るのがやがて厭になり、自分は同性愛の方になつた。女は兄弟の方に任せておいて、これを『回避』した。

また別の機會に、私は或る若い男を、明かに兩性具有的な傾向のある藝術家を取扱つたことがある。彼は嘗て或る仕事が障害を受けると同時に同性愛者となつた。彼は或る男に遁れることに依つて、女と仕事とを回避したのである。分析に依つてこの二が明かになつたが、またこれ等二つの障害の最も力强き心理的動搖としては父への畏怖と云ふ事の存する事が證明せられた。つまり父を畏れるあまりの諦めが、原因になつてゐるのである。彼の考へ方に於いては、總ての女は父に屬してゐるのである。で、彼が男に遁れたのは、父との鬪爭を避けるためで、つまり父への歸依服從のためである。同性愛的對象選擇のそのやうな動搖はもつと屢々發見せられるに相違ない。人類の原始時代に於いては恐らく一切の女は父並びに酋長に屬してゐたであらう。

雙生兒でない兄弟姉妹の間に於いては、そのやうな回避はまた戀愛選擇以外の分野に於いて大きな役割を果すのである。兄が音樂を習つて名を知られるやうになると、弟は遙かに樂才があるに拘らず、さうして自分でもやりたいに拘らず、音樂の硏究を斷念し樂器に手を觸れようともせぬ。この種の現象は屢々見られることであるが、さうしてこのやうに、競爭の道に出ずしてこれを避けるその動機を

研究して見ると、甚だ錯雜してゐる心理的條件を發見するのである。

このやうにして出來上つたリビドーの態度を確定的にしたのは、娘が如何に自分のその態度を父親が好まぬかを氣付いた時である。他家夫人に對してあまりに强いなつかしさの感情を以て近付いて行くと云ふので父親が始めて叱つた時以來、彼女は如何にして父親を惱ますことが出來るか、また如何にして父親に復讐することが出來るかを知るやうになつた。今や彼女は父親に對する反抗心からして同性愛者となつてゐた。彼女は父親を、あらゆる方法で瞞き詐ることを、惡いとは思はなくなつた。母親に對しては必要な限り噓をついたが、父親に對してはさうでなかつた。私は彼女がタリオン Talion の根本法則に從つて振舞つてゐるのだと云ふ氣がした。卽ち――お前は我を欺いたのだから、お前も當然欺かれねばならぬと。不斷は狡猾なほど悧巧な娘でありながら、それが不思議に不注意であると云ふことは、これ以外には判斷の仕樣がない。その不注意のために父親は時々娘が例の夫人との交際を知るやうになるが、知られることに依つては彼女の最大の欲求たる復讐滿足が得られるのである。そこで彼女はその崇拜する人と白晝公然、父親の事務所のある附近を散步したりなどするやうに仕向けたのである。またこのへマなことは意圖なくして起きたことではない。翻つてまた兩親の方でも娘の秘やかな心理をよく了解する者の如く振舞つてゐたことは注意に價する。母親は娘が母親の繩張り

を回避してゐるのを嘉みするごとくに寛大であり、父親は娘が彼の身に向けてゐる復讐の意圖を感じてゐるかのやうに狂暴である。

併し娘は『夫人』に於いて一つの對象に——同時に彼女の兄に纏綿してゐた部分の異性愛的リビドーの滿足させられる對象に——ぶつつかつたので、彼女の同性愛は更にまた最後の力づけを得たわけである。

三

輪廓的に寫し表はすことは、錯雜した、さまざまの心理的に出入してゐる精神過程を說明するには適當でない。私はこの場合を論ずるためこゝで姑く停つて、右に報告して來た事の內の二三の事項に就いてこれを廣く深く論述すべき必要を感ずる。

私が既に云つた通り、娘はその敬慕する夫人への關係に於いて男性型の戀愛をしてゐたのである。彼女の卑下と我儘のない優しさ(ヴエルトリヒカイト)、„che poco spera e nulla chiede," 夫人がも少し一緒に步いてもいゝと云つてくれたり、別れ際に手を接吻させてくれたりした時の淨福、夫人は美しいと云ふ噂を聞い

た時の喜び、そのくせ自分自身を美しいと他から云はれても何ともない事、愛人が嘗て行つたことのあるところへは巡禮往訪すること、總て立入つた肉的願望を抑制することなど、總てこれ等の細々した特徴は青年が人氣女優などに熱狂し、その女は自分よりも遙か高根の花であり、僅かにそれを打仰ぐだけで滿足してゐる、あの心持に似てゐる。既に私が論じておいた通り(一)、『男性的對象選擇の型』の特徴は母への愛着に歸せられるが、この型とこの場合とは細々したところまで一致してゐる。驚くべきことはその愛人に對する世人の惡評は自分の觀察したところでは尤もと思はれるに拘らずその噂に依つて少しも心持がひるまないと云ふことである。

註(一)　五頁參照。

彼女は本來躾けのよい純潔な娘で、自身としては性的冒險などは避けて、野卑な滿足は醜惡だと感じて來たのである。然るに彼女の最初の惚込みの相手が、人もあらうに道德的にはあまり香しからぬ女たちであつたのだ。例の避暑地で或る映畫女優の尻を追蒐けていくらたしなめられても頑固に聽かなかつたのが、抑々その戀愛選擇に於いて父親から反對を受けた最初であつた。その際にも、札付の同性愛者だとか、從つてまたさう云ふ滿足を與へられる見込みのありさうな女を問題にするのではないのだ。寧ろをかしなことながら普通の意味でのコケットな女を求めたのである。同性愛的な、彼女

と同年配の女友達で唯々として彼女の望みに應じて來るのは彼女は直ちに拒むのである。『夫人』の惡い評判は併し、正に彼女の一つの戀愛條件であつたのだ。かう云ふ態度は如何にもをかしいが、併しこの對象選擇の男性型が、母から轉向してゐてそのために、愛人が何等かの點で『性的に不評判』であり、元來コケットだと云はれてゐるやうな女でなければならないと云ふのが條件になつてゐることを思へば不思議でも何でもなくなる。やがてこの評判が彼女の尊敬する夫人に對して如何なる程度まで妥當してゐるかを彼女が知るやうになつた時に、またその夫人が單に肉體的の生活にのみ耽つてゐることを知つた時、彼女の反應は大きな同情となり、如何にもして愛人をこのふしだらな狀態から『救ひ出し』たいとの空想と計畫とになつて行つた。この救助の努力は私が說いた型の男子に於いて起るのは不思議であるから、私はさきにそれを論じた個所（二）に於いて、この努力が如何なるところから生ずるかを分析明言しておいたつもりである。

註（一）七頁參照。

彼女が自殺の試みは勿論眞面目に行つたものと私も思ふが、併しこれを分析して見ると說明は全然異つた方面へと導いて行く。とにかくその自殺の企てに依つて彼女の立場は兩親の側に於いても愛する夫人の側に於いても甚だ具合よくなつたのである。彼女は或る日その夫人と或る方面へ或る時間に

散歩に行つたのである。その方面でその時刻では事務所から歸つて來る父親に甚だ見付かりさうなのである。父親は彼等の側を通り過ぎ、憤怒の眼瞳を以て娘とその同伴者とを睨みつけた。その直ぐ後に彼女は市内鐵道の堀割のところに身を投じたのである。彼女がその決心をした近因に就いての辯明は今や全くをかしく聞こえる。彼女は二人を睨みつけて行つた紳士は自分の父親で、父は二人の交際に就いては絕對に何事も知らうと欲しないのだと夫人に告白した。夫人は非常に激昂して直ちに自分の側を離れて、もう傍へは寄付かないやうにしてくれ、話しかけてもいけない、交際はもうこれきりだと宣告した。そこで彼女はもうこの話もこれでおしまひと云ふことになつたので絕望のあまり死を選ぶことになつた。併し分析の結果、彼女自身の解釋とは違つた、もつと深い解釋が下され、さうして彼女自身の夢がそれを支持したのである。自殺の企ては、誰しも氣付くであらう通り、二重の意味がある。――自己懲罰と願望充足と、何故この自殺の企てが願望充足になるかと云ふに、それに依つて例の願望（それの得られぬために抑々彼女は同性愛者となつたのだ）が達せられるからだ。つまり、父に依つて子を得たいとの願望が達せられるからだ。何となれば、今や彼女は父の罪に依つて墜落（墮落）したからである。（一）この機會に於いて夫人が父と丁度同じことを云つて娘に斷つたと云ふことは、右の無意識解釋と娘自身の意識してゐる表面的解釋とが結付いてゐることを示してゐる。自己懲罰と

して娘の行動は、彼女が兩親の何れかに對して無意識的に強い死の願望を抱いてゐたことを、我々に保證してゐる。恐らくは自分の愛を拒ねつけた父親に對する復讐心から更らにまたそれ以上に、小さい弟を自分から横取りした母親に對する復讐心から、死の願望を抱いたであらう。何となれば、分析はこの自殺の謎を説明してかく曰ふからである。——自殺と同時に（それと自分が同一化してゐるところの）一對象を共に死なせるか、または第二には他に向けられてゐた死の願望を自分自身に向けるかでなければ、何人も自分を殺すべき心理的エネルギーを見出すことは出來ないと。自殺者に於いて常に必ずさう云ふ無意識的な死の願望が發見せられることは、別に不思議でもなければ、また我々の結論を確證するものとして注意すべき價値があると云ふ程でもない。何故ならば、總て生類の無意識にそのやうな死の願望（本來は愛してゐる人物に對してすら抱く死の願望）が普く存してゐるからである。（二）併し自分（娘）から横取りした子供を分娩した時に正に死ぬべかりし母親と同一化してゐたのであるから、その自己懲罰の實現はまた同時に一つの願望充足でもあつたのだ。最後に云つておくが、この娘の行動の如きを可能ならしめるためには、非常に種々な、強い動機が共同參與してゐることは當然考へらるべきで、これは我々の論と矛盾するものではない。

註（一）自殺の方法をこのやうに性的願望充足に依つて解釋することは、既に總ての分析者に認められてゐる

ところである。（毒を仰ぐこと＝妊娠。入水＝出産。高所から投身＝墮落。）

（二）,,Zeitgemäss über Krieg und Tod“, Imago III. 1915（原書全集第十巻）參照。

娘が動機を告白した内には父親は現はれてはゐなかつた。父に怒られるのが可怕いと云ふことさへ出て居なかつた。分析に依つて洞察した動機の內には父は主役を勤めてゐる。これと同じ決定的な意義を父に對する娘の態度もまた、分析的取扱（否寧ろ探究）の間に示した。兩親を愛するが故に彼女は異性愛から同性愛に變つたのであるが、その兩親のためを思ふと云ふ表面の理由の背後に父への反抗と復讐とが匿れてゐて、その反抗と復讐とのために彼女は同性愛に執したのである。そのやうな隱匿に安心してか、抵抗はあまり分析の邪魔をしなかつた。殆ど分析は抵抗らしい抵抗を受けずに行ふことが出來た。それには被分析者の鋭敏な知的共働も與つてはゐるが、併しまたその心持が全く落着いてゐたことにもよる。私が嘗て彼女に或る特別に重要な殆ど彼女に宛て欲まつた或る理論を說明して聞かせたところ、彼女は眞似ることの出來ないやうな強い調子でかう云つた。――あゝそれは大層面白いですね、俗物の奥さんが博物館へ連れて行かれて、自分には興味も何もない品物の前で片眼鏡を取出して眺めるやうな風ですね、と。彼女を分析することは、一定の限界まで（それ以上は降參出來ないと云ふ限界まで）抵抗が退いてゐる場合に催眠術を掛けるのと殆ど似たやうな感じがした。か

かる戰術――ロシア的戰術とも云ふ得べきか――を抵抗は甚だ屢々、强迫神經症の場合に、用ふる。それ故に我々は暫くの間最も明白に結果を示され、また症狀の原因に就いて深い洞察を得ることが出來る。ところが我々は、患者が分析上の理解に於いてこれほど大きな進步を示してゐるのに病氣の强迫と禁制に於いて些の變化をも見せないのは如何にも不思議であると段々思ふやうになつて來るが、然し遂にそれは患者がその悟り得た事の背後に一片の疑惑を殘してゐてその疑惑の壁を楯としてゐることに身の安全を感じてゐるためであると分つて來る。病人は時々は意識的にもかう云ふのである。――『人にさう信じさせるとなれば、それも大いに結構だらうが、併しそんな事は要するにどうでもよい事だから、どうせどつちでもいゝのだとすれば、俺は別に變る必要はない。』と。やがてこの疑惑の動機を人々が知りさうになると、抵抗との鬪爭が眞劍に始まるのだ。

我々の娘さんに於いては、その冷やかな愼みを可能ならしたものは疑惑ではなくて父に對する復讐と云ふ感情の契機であつた。分析もそのために判然と二つの時期に分たれ、第一期の結果も甚だ完全に明瞭になつたのである。また娘に於いて醫師に對する父コムプレクスの轉嫁と云つたやうなものは存在しないかのやうに見えてゐたが、併しそれは勿論逆の意味であるか、或は表現の方法が不十分であつたのだ。醫師に對して何等かの態度が當然出なければならないし、さうしてそれは大低は幼兒時代

の關係から轉嫁されて來るのだ。實際に於いて彼女は男に對する根本的の拒否を、(父に依つて味はされた絕望以來彼女が男に對して抱いてゐた根本拒否を)、私に轉嫁した。男に對して不滿や憤りがあれば大低の場合は、醫師に對してこれを晴らさうとするやうになり易いものである。彼女は別に暴風雨のやうな感情的表現をするには及ばなかつたのだ。彼女はたゞ總ての努力を放棄して病氣に固執して居ればそれでよかつたのだ。私は經驗に依つて知つてゐることだが、被分析者をしてこの無言の症狀(徵候)を理解せしめ、またそのやうな潛在してゐる、時々極度に大きな敵愾心を、治療上の危險なしに意識化させることは實に困難である。そこで私は娘の父親に對する心持ちを認識するや、否や分析を斷つたのである。さうして、もしその氣があるなら、誰か女醫に掛つて治療して貰つてはどうかと勸めたのである。然るにその間に娘さんは少くとも例の『夫人』との交際をやめると云ふ約束を父親にしたのである。で、私の勸め(その動機は實に明白であるが)に從ふであらうかどうか、私は知らない。

またこの分析の間に唯一度だけ、私が積極的轉嫁(元來父に對しての情熱的惚込みであつたものが異常に弱められて再燃したもの)として認め得た或るものが現れたことがある。またこの現れには或る他の動機からの附加もなくはなかつたが、私がそれを話したのは、その現れが他の方向に於いて分析

技法上の興味ある一問題を提供してゐるからである。治療が始まつた後間もない頃、娘は一聯の夢を持つて來た。それ等の夢は相當に歪みもあり正しい夢の言葉で語られてはゐるのだが、而もこれを飜譯することはわけはなかつたのだ。ところがそれを解釋した内容はをかしかつた。その内容に依つて見ると、分析取扱に依つて同性愛は直りさうなんである。今や彼女に新たに明けそめた生活の眼界を喜んでゐるやうなんである。男子の愛を憧憬し、子供を欲しがつてゐるらしい様子を見せてゐる。だからこれは望み通りに直りさうだと云ふ挨拶をしてもよさゝうな風である。然るに同時に於ける彼女の覺醒中の様子はどうかと云ふに、これと矛盾すること大である。彼女は何の包み匿しもなく私にかう云ふのである、私は結婚しようと考へてゐるが、併しそれは父親の暴虐を遁れ、自分の實際の傾向を妨げられないで生きたいためであると。男に對する準備はもう出來てゐる、とやゝ輕蔑的な口調で云ひ、さうして遂に、一體人間と云ふものは例の尊敬してゐた夫人の例で見ても分る通りに、男とでも女とでも同時に性的關係を結ぶことが出來ものだと云つた。或る一寸した點に氣がついたので、私は或る日彼女に説明をした、私はこれ等の夢を信用してゐない、それ等は出鱈目で僞善的である、それは私を欺くための作り夢である、丁度彼女が父親を欺いたと同じやうに……と。私は正しかつたのである。この種の夢はこの説明以來出て來なくなつた。併し私は、僞りの意圖以外にこれ等の夢には

また或る部分の御機嫌とりの存することを信ずるものである。これはまた私の興味と私の好感とを呼び起し、恐らく後に愈々私を根本的に欺かうとの試みであつたのだ。

かう云ふ風な欺瞞的な御機嫌とりの夢が存在すると云ふことを聞かされては、分析者と呼ばれる多くの人々は眞に暴風雨のやうな何とも手のつけられない憤りを自ら覺えざるを得ないであらうことは私にも察せられる。『我々の精神生活の實際の核心たる無意識、我々の貧弱な意識よりも遙かに神々しいものに近い無意識が、やはり我々を欺くのかなア！　では我々はどうして分析の解釋や認識の慥かさを打建てる事が出來るのか？』それに對してはかう答へなければならない。――そのやうな欺瞞的な夢を眞に受けることはそんなに驚くほどの新しい事ではないと。人間はなか〳〵神祕と云ふことの好きな奴で、『夢の解釋』に依つて神祕から奪つた領域を自分の方へ再び取込まうと絶えず試みてゐるものだと云ふことを私は知つてゐる。併し我々が只今取扱つてゐる娘の場合では、總ては甚だ簡單である。夢は『無意識』そのものではないのだ。夢は前意識又は覺醒生活の意識からさへも洩れた思想が、睡眠と云ふ好都合な狀態を利用して姿を變へて現れ來る場合の形式である。睡眠狀態に於いては『愛は無意識的願望感情の支持を受けてをり、その際に『愛の仕事』に依つて歪みを受ける。その『愛の仕事』はまた無意識に對して妥當する機制に依つて決定されてゐる。我々の娘さんの夢に於いては

以前に父親を欺いたと同じやうに私を欺かうとの意圖は、慥に前意識から來てゐる。よしんば意識はされてゐないにしても……。今や彼女は父（又は父代償）を喜ばせようとの願望感情と欺かうとの意圖とを一致させる事に依つてこれを實行することになり、かくて欺瞞的の愛を作出したのである。父を欺かんとの意圖と父を喜ばさうとの意圖と、この二つは同一コムプレクスから發してゐる。第一は第二の抑壓から生じてゐる。後者は愛の仕事に依つて前者へと歸せられてゐる。であるから無意識を輕視したり、我々の分析の結論に對する信用が動搖したりすることは、問題にならないわけである。

この機會に私は是非とも言葉に出して云つておきたいと思ふが、人間と云ふものはこの戀愛生活の如何に大きい重要な部分を生きてをりながら、それに就いてはあまり多くを氣付かず、否、時々は殆ど少しも氣付かず、或は時にそれを意識することはあつても全然別の判斷を下して自己を欺いてゐるものである。それは神經症の條件の下に於いて起るばかりでなく、（それ等の場合の現象に就いては我々は十分に知つてゐる）、常態の場合にも常に起るものであるやうだ。我々の場合に於いては、娘さんは夫人たちに對して熱中する。その熱中を兩親は不快には思ふが、併し殆ど眞面目には扱はない。彼女自身もその夢中がどれくらゐなものかはよく承知してゐるらしいのだが、併し激しい惚込みとはどんなものか殆ど感じてゐない。たゞその夢中になつてゐるのが遂げられぬと、過度な反應を起し、自

分の戀はあだや愚かな戀でないと云ふところを何とか見せようとするのである。そのやうなあだや愚でない戀の起るに必要な豫備條件に就いては、娘もまだ嘗て何事をも氣付いてはゐない。
　また或る時には人々は、非常にふさぎ込んでゐる娘や夫人に出會す。彼女等は一體どうしてそんなになつたのかと訊かれると、かう陳述する。私は唯それに或る興味を感じてゐるのだけれども、どうもその興味に深さがないと。さうしてその興味を失つてしまつた後の用意も出來てゐるやうである。ところがこのやうに一見棄てゝしまつても支障のなさゝうな興味でありながら、それが病氣の原因になるのである。さうかと思ふとまた、夫人に對する表面的な戀愛關係を淸算して了つて、その後の事からして始めて自分が今まで惚れてゐないと思つてゐた對象に何如に深く惚込んでゐたかゞ分つたと云ふ人たちに出會すこともある。我々はまた時に、或る人々が別に悔恨や心配もせずに人工流產を、胎兒殺しを決心して行つて居りながら、さて行つてから思ひがけない影響を受けてゐるのを見て驚くことがある。であるから詩人が人々を――知らないで愛してゐたり、愛してゐるのかどうかを知らないでゐたり、或は愛しゐながら憎んでゐるのだと思込んでゐたりする人々を――好んで描くのは正しいと認めざるを得ないのである。我々の戀愛生活に就いての我々の意識を傳へてゐる言葉は、だから特に不完全であり、噓が多く、また間違ひの多いものであるらしい。これ等の論に於いて私は勿論、

後になつて忘却される部分もこれに關係があると云ふことを怠つてはゐない。

四

さて私は論を元に戻して、例の娘さんの場合を考究しなければならない。我々は、娘のリビドーが常態なエディポス的境地から同性愛に轉向したのは如何なる力のなさしめたことであるか、またその際如何なる心理的方途を辿つたか、に就いて一通り見て來た。更にこれ等の諸動力の上に、小さい弟が生れたことの印象も大いに與つてゐる。そこで、我々はこの娘の場合を後年になつて得た同性愛者として分類すべきである。

併しこゝになほ我々の注意を牽く事情がある。この事情は實に或る心理過程を精神分析的に説明する他の多くの實例に於いてもまた見られるものである。我々が心的發展の結果から出發してそれを逆に辿つて行く限りは、我々の知る關係は嘘の關係で、而も我々は我々の觀察を完全なものと思ひ込み恐らく至れり盡せりなものと信ずることであらう。併し我々がその反對の道をとり、分析から得た豫想から出發するならば、さうしてこれ等をその結果に至るまで辿り行くならば、一つの必然的な（他

の方法では說明出來ない）連結が失はれる。併しまた別の結果になることもあるのを我々は氣付く。さうしてこの結果をも我々は同樣に理解して說明することが出來るのだ。であるから綜合は分析のやうには我々を滿足させない。換言すれば、我々は豫想を知つたからとて結果の性質を豫め云ふことは出來ないであらう。

かゝる認識の誤りをその原因にまで辿ることは甚だ容易である。よしんば我々が、或る一定の結果を齎した原因的要素を知悉したとしても、我々はその要素の性質を知つたのみで、その相對上の强さを知つたわけではない。それ等諸要素の內の或る二三はあまりに弱くて他の諸要素に抑へつけられ、結果に對して問題にならない。併し我々は、一定の諸契機の內の何れがより强く何れがより弱くなるであらうかと云ふことは決して豫知し得ない。我々はたゞ現れ出て來た結果に就いて見て、あれは强かつたのだと云ふだけである。であるから、分析の方向で探つて行けば原因を認識することは何時でも慥であるが、併し綜合の方でこれを豫言することは不可能である。

であるから我々は、總て娘が思春期のエディポス感情から由來する戀愛に破れると、そのために必ず同性愛者になると主張するものではないのだ。それどころか、この心的外傷（エディポス失戀）に對してまた別樣の反應を示すことも屢々である。して見れば、この娘に於いてはやはり特殊の契機が、

外傷以外の、恐らく內的性質を具へた契機が、かゝる決定を與へたものに違ひない。それはどう云ふ契機か、それを示すことはまた何等困難でない。

常態者に於いても、何れの性の者を戀愛對象に選ぶやうになるか、それが窮極的に決定を見るまでには相當の時日を要することは明かである。度外れて强い同性愛的熱中、肉感的な意味の强い友情は、男女とも、思春期以後の數年間に於いて極めて普通である。我々の娘さんとてもこの類に過ぎないのだが、併しこの傾向は彼女に於いては他の娘たちに於けるよりは、疑ひもなく强く且つ長かつたのである。その上後年の同性愛のこれ等の前徵は常に彼女の意識生活を支配したのである。然るにエディポス・コムプレクスから生じた心持は無意識のまゝに殘つてをり、小さい男の子を可愛がると云つたやうな徵象となつて表れるばかりであつた。女學生時代には彼女は近付き難いばかりに嚴格な女敎師に永い間惚込んでゐた。これは明かに母代償である。若き母と云つた風の多くの夫人に對しては彼女は特に生々とした興味を示してゐたが、それは弟が生れる以前の長い間、と云ふよりはもつと慥には、始めて父に叱られた以前の長い間であつた。このやうに彼女のリビドーは早くから二つの流れに分れて走つてゐた。その內、表面の方のは明かに、同性愛的の流れと名付けらるべきものであつた。これはどうやら母に對する幼兒的定着の直接的不變的の連續であつた。我々が分析に依つて發見し得たと

ころとしては、或る都合のいゝ機會があればより深い異性愛的のリビドーの流れが顯在的な同性愛的リビドーの流れに移される、その過程だけであつた。

更にまた我々の分析の敎ふるところでは、この娘は子供時分から强調された、『男子的コムプレクス』"Männlichkeitskomplex" を持つてゐた。生々としてをり、鬪爭好きで、あまり年の違はぬ兄の尻になぞ、引下つてはゐなかつた。性器を比べて見て以來、激しい男性器嫉妬を起し、この嫉妬に由來するさま〴〵の感情が彼女の思想を常に滿たしてゐた。彼女は元來女權論者で、女兒が男兒と同等の自由を享受し得ないのは不當であるとし、凡そ女の不利のためには何によらず健鬪した。分析した當時には、妊娠や分娩はいやな事で、それは私の想像では、妊娠や分娩の時の身體の不樣なためであつた。かゝる防禦を楯にとつてのゐるのは彼女の娘らしいナルチスムスで(一)、それは彼女の美に對する誇りとなつてはもう表れてゐなかつたのである。種々な徵象に就いて見るに、以前には非常に强い竊視慾、並びに露出慾があつたものと思はれる。病源を知らうとする事の正しさを認めようとする者は誰しも、次の事に注意を拂ふでもらう。卽ち、右に述べて來た如き娘の態度は、一方に母の侮辱と云ふ事があり、他方に母への强き定着を持つてゐた際に自分の性器と兄弟のそれとを比較した事と、この二つが一緒になつて効果を及ぼした事に依つて決定せられてゐるに違ひないと。また人々が素質と

して考へたがつた或るものを、幼時に効果を及ぼした外的影響の與へたものとして解すべき可能性がこゝに存する。またこの後天的獲得——實際に起つた場合に——の内では、その一部分は持つて生れた素質のせいにせられる。理論に於いては我々が相反の一對——傳承と體得——として區別することが出來るものも、實際觀察して見ると、混同し合一しつゝ存在してゐる。

註（一）ドイツ傳說ニイベルンゲンリイド中のクリイムヒルデ姫の告白を參照せよ。

以前の精神分析で先驅的に斷定したところでは、このやうなのは後年に獲た同性愛であると云ふことになつてゐたとすれば、今日この材料を研究して見たところでは、これは生得の同性愛で、普通には思春期以後の時代に始めて定着し、且つ人目にも立つやうになつたものであると寧ろ結論せざるを得ないのである。總てこれ等の分類は一部の眞で、觀察に依つて確實になつた實際關係の全般には妥當しない。他の一部分は無視されてゐる。一體から云ふ問題の價値をあまり重視しない方が一番正鵠に近いわけである。

同性愛の大低の文献は一方に對象選擇と、他方に性的特質並びに性心理的態度とをあまり截然區別せず、あだかも一點に關する區別は必然的に他の點に結び付くものゝ如く考へてゐるやうであるが、實際經驗に徵して見るに、この反對のやうである。——非常に男性的な特質を有し、戀愛生活の型も

男性的で、あることを示してゐる男が、對象に關して同性愛的で、女の代りに男のみを愛することがあり得るものである。その性格に於いて女性的特質が眼に立つ或る男、實際その戀愛に於いて女性の如くに振舞ふ或る男は、この女性的態度に依つて性對象として男を宛てがはれることになつたが、併し彼は異性愛たることが出來て、性對象に關して常態者より以上の同性愛者的ではなかつた。同じことはまた婦人に就いても云へる。女性等に於いてもまた心理的性特質と對象選擇とは確實的な關係を保つやうに一致してはゐない。同性愛の神祕は、人々が通俗的に云ひ慣はしてゐるやうにさう簡單なものではない。（彼等は云ふ、心の女性的なものは自然男を愛するやうになるのに、男の肉體にその心が宿つてをれば不幸であるとか、或は心の男性的なものは不可抗的に女に牽付けられるのに、女の肉體にそれが宿つてゐれば遺憾である、と。）寧ろ眼目は特質が三段に別れてゐることにある。

身體的性特質（心理上の兩性具有）
心理的性特質（男性的女性的態度）
對象選擇の仕方

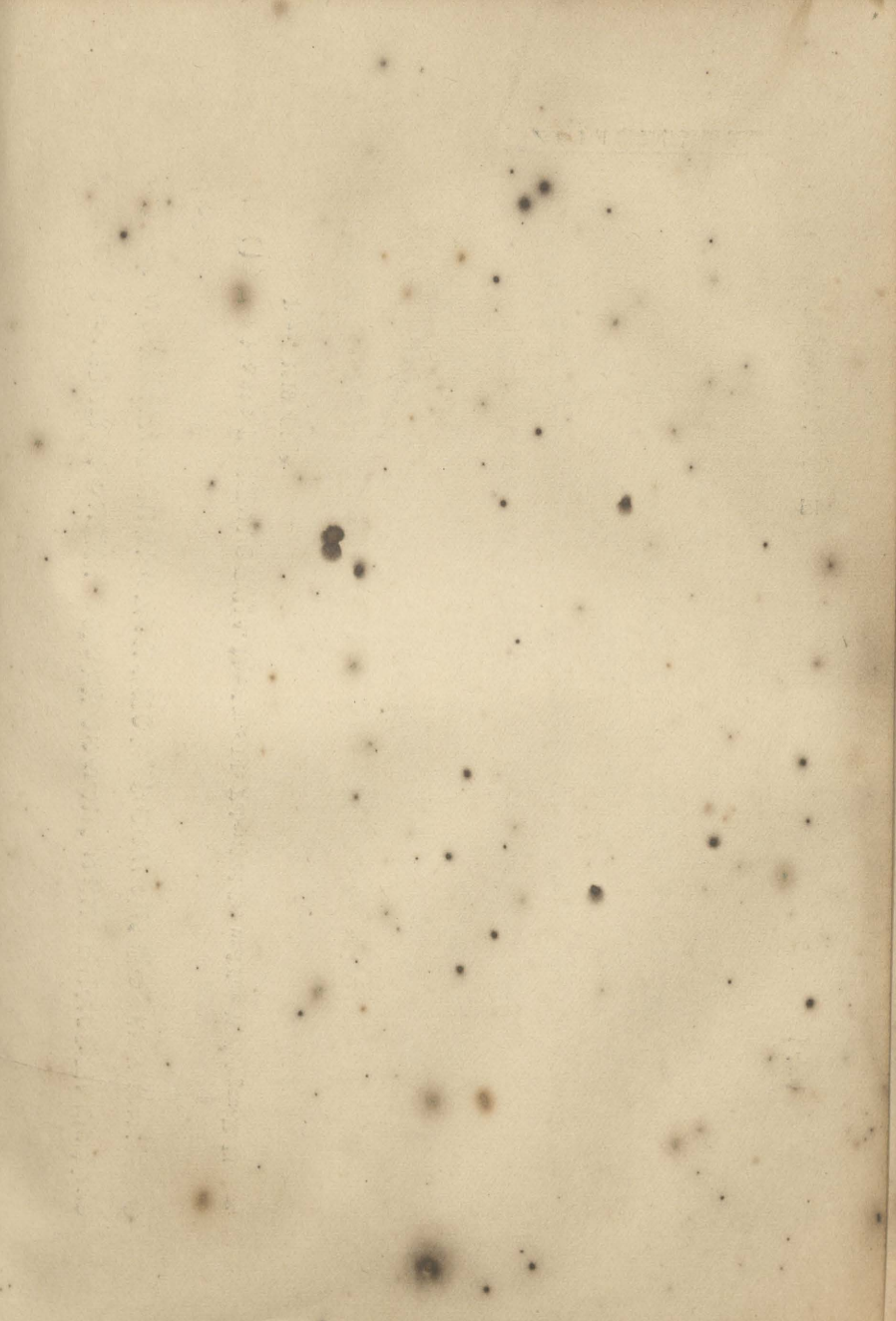
これ等は或る程度まで相互に獨立的に變化してゐて、また個々人に於いて多種多樣な配置を示してゐる。傾向的の文獻は實踐的な動機からして、性心理的知識のない人達には不思議に思はれる第三の點

（對象選擇の點）に於ける態度をのみ前方へ押出し、その他この點と第一の點との間に確乎たる關係のあることは看過してゐるものであるから、右に述べたやうに特質が三段に別れてゐる事情を洞察せしめることが困難になつてゐる。傾向的の文献はまた、人々が一掃的に同性愛と名付けてゐる一切のものに一層深い洞察をなさしむべき道を自ら塞いでゐる。何故ならば、それ等の文献は、精神分析的研究に依つて發見せられた二つの根本的事實を無視せんとするからである。その事實の第一は、同性愛の男は特に強い定着を母に對して經驗してゐると云ふ事であり、第二は、總ての常態者がその顯著な異性愛の傍に、一つの匿れた、或は無意識的の同性愛を相當高い程度にまで見せてゐると云ふ事である。これ等の發見を考慮に入れるならば、自然が特に氣まぐれに作つた『第三の性』などを假定したりすることは出來なくなるわけである。

精神分析は同性愛問題の解決を役目とするものではない。精神分析はたゞ、如何なる心理的機制に依つて對象選擇が決定されるやうになるかを闡明し、またそれ等の機制が如何なる本能から來てゐるか、その道程を辿ることが出來れば足るのである。その限りで精神分析をやめにして、餘は生物學的研究に委すのである。この方面では今やシュタイナハ Steinach （二）の研究に依つて重要な結論が、右に述べた第一點の第二、第三點に對する影響に關して始めて明かにされてゐる。精神分析は、個々の人間

並びに動物が本來兩性具有者的であることを豫想してゐる點に於いて、生物學と共通地盤に立つものである。併しながら人々が常識的意味に於いて、或は生物學的意味に於いて『男性的』とか『女性的』とか名付けるもの丶本質は精神分析では說明がつかない。精神分析はこれ等二概念を受容れてこれをその仕事の根柢に置く。更に立入つて研究を試みてゐる內に、男性的とは能働的と云ふことになり、女性的とは受働的と云ふ事になつて了ふ。併しこれではあまり飽氣ない。精神分析の畑となつてゐる部分の說明の仕事からしてもまた同性愛變更の手掛りが得られるだらうとの期待は、如何なる範圍まで容認せられ、また確證せられるか、私は前にそれを細論しておいた。これをシュタイナハが個々の場合に切開的手術に依つて目指した雄犬なる革命に比較すれば、誠に貧弱なものに見えるだらう。併しこれに依つて一般的に利用し得べき對同性愛的『療法』が發見されるだらうと期待するならば、それはあまりに早計であり、危險なる誇張である。シュタイナハが成功を示したのは、男子の同性愛の場合であるが、それ等の場合にはあまりに判然たる身體的『兩性具有』と云ふ條件が具はつてゐたが、これはいつもあるとは限らぬ條件である。これと似た方法で婦人の同性愛を如何に治療するかは、まだ全然不明である。その療法と云ふのが、兩性具有的と思ぼしき卵巢を取除き、單性的と信ぜられてゐる別の卵巢をこの代りに移植することに在るのならば、實踐上あまり利用される見込みはないやうで

ある。男のやうに感じ男のやうに戀愛する或る女があるとして、これに無理に女の役割を果させようとしても、この全然不利な變化に對する報いが母性の放棄であるならば、恐らくそれを肯じないであらう。

註（一）リップシュッツ『思春腺とその効果』A. Lipschütz: Die Pubertätsdrüse und ihre Wirkungen. E. Bircher, Bern, 1919 參照。

嫉妬、妄想、同性愛に於ける二三の神經症的機制に就いて

始めて『國際精神分析學雜誌』第八卷(一九二二年)にて發表。原書全集第五卷に收載。
原名は „Über einige neurotische Mechanismen bei Eifersucht, Paranoia und Homosexualität."

A　嫉妬

嫉妬は悲哀などゝ同じく常態的と云はるべき感情狀態に屬するものである。或る人間の性格や態度に於いて嫉妬が感ぜられると思はれる限りは、嫉妬は力強い抑壓を受け、そのために無意識の精神生活に於いてそれだけ大きな役割を果してゐるのだと結論することは至當である。變態的に强烈な嫉妬の種々の場合を分析して見ると、そこには三つの層のあることが分る。それ等の三つの層は、これに(一)競爭的又は常態的、(二)投出的、(三)妄想的の名を與へて然るべきものと思ふ。

常態的嫉妬に關しては、分析上からは云ふべき事はさう多くはない。本質的には嫉妬は失はれたと信ぜられてゐる戀愛對象のための悲哀、苦痛、並びに獨尊觀念的煩悶(もしこれが他の感情と區別されるとして)、更にまた自身と見代へられた競爭者に對する敵愾感情、また失戀の責任は自分自身にあるとせんとする自己批判の多少とも大きな寄與などから成つてゐることは見易い。かゝる嫉妬はよしんば我々がこれを常態的であると云ふにもせよ、決して理性に合つたものではない。つまり實際の關係から發源したものではなく、現實の事情に釣合つたものではなく、意識的自我の支配が隈なく行亘

つたものではない。何となればかゝる嫉妬は深く無意識に根差し、最早期の幼兒的感動を持續し、第一期の性感のエディポス・コムプレクス又は兄弟姉妹コムプレクスから由來してゐるからである。また更に注意すべきことは、かゝる嫉妬は多くの人々に於いて兩性的に體驗せられる。つまり男子に於いては愛する女のための苦惱並びに競爭者の男に對する憎惡以外に、また無意識的に愛してゐる男のための悲哀並びに競爭者としての女に對する憎惡が彼に於いて力強く働いてゐる。また私の知つてゐる或る男は非常に自分の嫉妬の發作に惱み、また（彼の陳述するところに依つて見れば）最も惱ましい苦痛を經驗したのは彼の叛ける女に彼が意識的に轉位してゐた點に於いてゞあつた。つまり彼がその時感じてゐた何とも仕樣のない感情、彼がその狀態に於いて宛もプロメトイスが禿鷹の餌食にとて投け出されたかのやうに、或は縛せられたまゝ蛇の巢に放り込まれたかのやうに觀じたわが身の有樣、それ等は彼が少年時代に經驗した樣々の同性愛的發作の印象を關係させて自ら造り上げたものであつた。

第二層の嫉妬、つまり投出の嫉妬は男の場合も女の場合と同樣に、自分自身が實際生活上に感じてゐる謀叛心から、或は謀叛への衝動から（而もそれ等は抑壓されてゐる）生ずるのである。男女間の忠實、殊に結婚生活に於ける忠實は餘程努力することに依つてのみ守り立て得るものであることは、

人々が日常經驗するところである。さう云ふ經驗は自分は持たないと考へる者は誰でも、やはりさう云ふ經驗の嚴存する壓力に應へるために、その壓力を輕減するための無意識的機制を何とか持ちたいと思ふやうになる。そのやうな輕減は、つまり良心の苛責を免れるのは、彼が自分の謀叛心を自分が忠實を誓はねばならない相手に投出することに依つて獲られるのである。既にかう云ふ力強い動機があるために、相手の同樣な無意識的感情を觀破するための知覺材料に愈々役立ち、かくて相手の女（又は男）は俺（又は妾(わたし)）よりはどうやら大してよろしくもないのだと云ふ考へのためにこの力強い動機は愈々是認せられ得るのである。(一)

註（一）　デスデモナの歌に於ける次の節を比較せよ。——

『嘘つきと云つてやつたら、まアあの人の云ふ事に、俺が女を口說くなら、お前も男に秋波だらうつて……。』

社會の習俗はこの一般的な事情に最も悧巧に順應してゐる。即ち、既婚婦人の廣く愛されたい慾望と既婚男子の廣く愛したい慾望とを或る程度まで自由に遊ばせ、それに依つて謀叛への何としても否み難い傾向を軟化し、無難なものにしようと期待するのである。世間の習俗では双方がこの謀叛への一歩を相互に問題にしない事に定め、さうして大抵は自分の特定の相手以外の相手に依つて點火され

た慾望を自分自身の相手に對する忠實へと何等かの意味で歸る事に依つて滿足させるやうになつてゐるのだ。ところが嫉妬家はこのやうな習俗的の寛容を認めようとしないのだ。彼は一度踏込んだ道には停滯と佇立とがあり、社會的の浮氣はその日の出來心で、却つて實際上の謀叛への逆保證となり得るものであることを信じないのだ。そのやうな嫉妬家を取扱ふに當つて是非避けねばならないことは彼が已れの立場を支持してゐるその材料に就いて論爭することだ。たゞその材料を別樣に評價せしめるやうに導いて行かうとするに留めねばならない。

そのやうな投出に依つて生じた嫉妬は、よしんば殆んど妄想に近い特質があるにもせよ、併し精神分析に抵抗することは出來ないもので、分析して見ると自分自身に謀叛の無意識的空想のあることが發見されて來るのである。これよりも厄介なのは第三層からの嫉妬、即ち本來的に妄想的な嫉妬である。これもやはり抑壓されてゐる謀叛心から生ずるものであることは同じであるが、併し、この空想の對象は同性者である。妄想的嫉妬は醱酵した同性愛に相當するもので、これは當然パラノイア（妄想症）、と云ふ古典的形式の內にその位置を占むべきものである。あまりに强烈な同性愛的感情を防禦する試みとしては、その感情を（男の場合には）次のやうな公式に依つて書換へるやうである。――

實は私は彼を愛してはゐないのだ。彼女が彼を愛してゐるのだ。

嫉妬妄想の或る場合に於いては、人々はこの嫉妬が第三層からばかり來るものとは思はず、三つの層の總てからも來るものと思はなければならない。

B　パラノイア（妄想症）

我々にも分つてゐる或る理由からしてパラノイアの場合は大抵は精神分析研究が見落し勝ちになるものである。併し私は近頃二人のパラノイア患者を徹底的に研究して今まで氣付かなかつた二三の事を發見したのである。

第一の場合は若い男で申分のない嫉妬妄想で、相手は一點難の打ちどころのない貞淑な彼の妻君であつた。妄想が間斷なく彼を襲ふた暴風雨の如き時期は既に彼の背後に過去つてゐた。私が彼に會つた時には、彼はたゞ如何にも妄想らしい妄想の發作を示し、その發作が幾日も持續し、殊に興味のあるのは、双方が滿足するやうな性交のあつたその翌日には必ず定まつてその發作の起きることであつた。で、異性愛的リビドーが滿足した後に何時でも、それにつれて刺戟された同性愛的リビドーが嫉妬の發作となつて押出して來るのだと當然結論することが出來るのである。

その發作がどこからその材料を得て來るかと云ふに、それは妻君の全然無意識的な媚(コケトリー)びが示す些細な(他人には氣の付かないやうな)徵象を觀察してゐて、それを捕へて來るのである。或は妻君がその隣席に腰掛けた紳士の方に思はず不圖手を觸れたとか、或は彼女があまりその紳士の方に視線を向けてゐたとか、或は亭主に向つては示さないやうな親しげな微笑を泛べたとか云ふことである。彼女の無意識のこれ等總ての表現に對して彼は異常な注意を拂ひ、常にそれ等を正しく解釋することを心得てゐた。で、彼は本來いつも正しかつたのだ。さうして分析の結果でもやはり彼の嫉妬を是認することになつた。抑々彼の變態は何處にあるかと云ふに、それは彼が妻君の無意識を普通の人よりも鋭く觀察し且つ一層高く評價してゐたと云ふ點に還元出來るのだ。

そこで吾人の想起することは、追跡妄想症者もこれと全く同じやうに振舞ふと云ふことだ。彼等もまた他人に就いて何事をも無關心にして放つておけない。さうして彼等の關係妄想のために、他人が彼等に示す些細な徵象を大袈裟に評價するのだ。彼等の關係妄想とは、つまり彼等が總ての他人から戀愛の如き或るものを期待してゐると云ふことである。ところがその他人はさう云ふ何物をも彼等に示さない。他人は彼等の前で行過ぎる時に大口を開けて笑つたり、ステツキを振廻したり、地上に唾したりする。さう云つたことは、もし人々がその側にゐる人に對して何等かの友情的關心を持つてゐ

るならば、實際にしないことである。さう云つたことは人々が側にゐる者に對して全然無關心、風馬牛である場合にのみ、するのである。ところで妄想症患者は『他人的(フレムト)』と『友情的(フロインドリヒ)』との二概念の根本關係を甚だ誤つてはをらないのである。もし彼がそのやうな無關心の態度を自分に當然愛情を寄せて然るべきだと信じてゐる人が示した場合に、それを敵意として感受したとしても……。

そこで、もし我々が、嫉妬妄想症者や追跡妄想症者は自分自身の内に知覺することを欲しないところのものを他人に、外部に、投出するのだと云ふならば、彼等の態度に就いての我々の記述は甚だ不十分であると云ふ感じがする。

成程、彼等は投出をするのだ。併し彼等とても只漠然と投出するのではないのだ。自分のに類似したものゝないところに投出するのではないのだ。彼等は無意識に就いて自分の知つてゐるところを頼りとして、自分の無意識には向けないやうにした注意を、他人の無意識の上に差向けるやうにするのだ。我々の取扱つた嫉妬症者は自分自身の謀叛心の代りに自分の妻君の謀叛心を認識してゐるのだ。つまり彼は自分の妻君の謀叛心を無暗に大袈裟に自意識することに依つて、自分自身の謀叛心を意識しないことに成功してゐるのだ。彼の實例を標準として見るならば、我々は追跡妄想者が他人に於いて認める敵意もまた、これ等の他人に對する自分自身の敵意の反映であると結論することが許される

であらう。妄想症者に於いては同性の愛人が追跡者となるものであることを我々は知つてゐるから、何處からしてこの感情轉換が生じ來るのかと云ふ事が問題となる。これに對する答へとしては、抑々既に感情のアムビヴレンツ（相反二元並存性）が存在してゐてそれが憎惡の根抵となつてゐる上に、愛して吳れる筈だとの要求が滿されないために、その憎惡が愈々激化されるのだと云ふことが出來よう。であるから感情のアムビヴレンツは追跡妄想症者をして同性愛に對する防禦をなさしめるに役立つことは、丁度我々の患者に於いて嫉妬がそれをなさしめるのと同じである。

私の嫉妬患者の夢は、甚だ私を驚かせた。それ等の夢は患者の發作の起るのと同時期に見たのではないけれど、併しなほ妄想の支配下にあつた時期に見たのであるが、完全に妄想から解放せられ、根本に存してゐる同性愛的感情は普通に認められる以上には力強く被ひ匿されてはゐなかつた。妄想症者の夢に就いての私の多少の經驗からすると、一般的に云ふならば、妄想症は夢の中へは這入り込んでは來ないと云ふことが出來る。

同性愛がこの患者に存することは看過し易いことであつた。彼は同性に對する友情や社會的興味を持つてゐなかつた。彼の妄想は最初は女に向ひ後に發展して宛も等閑に附しておいたものを追縋るやうにと云ふ感じがせざるを得なかつた。彼の家庭に於いては父親があまり重要視されてゐなかつたこ

と、また早期少年時代に恥づかしい同性愛的な外傷を持つたことなどが一つになつて働き、彼の同性愛を抑壓するやうになり、從つてそれ等が昇華されて社會的友情となるべき方途を塞いでしまつた。彼の青年時代の全體は母への強い定着に依つて支配されてゐた。澤山の男兒の間で彼は明かに母親の一番の愛息子であり母に關して常態的な强烈な嫉妬を持つやうになつた。彼が後に、本質的には母を富有にしたいとの動機に支配されて結婚の相手を選ぶ段になつて、彼は新婦の處女性に就いて强迫的な疑惑を抱くやうになつたが、それは彼が處女なる母を要望するものであることを表はしたものであつた。彼が結婚の一二年は嫉妬も見えなかつた。やがて彼は妻君に叛くやうになり、或る他の女と永續的な關係に入るやうになつた。彼が或る種の疑惑に驚かされてこの戀愛關係をやめて了つた時になつて始めて、第二の、投出型の嫉妬は彼に於いて發作し始めたのであつた。この投出型の嫉妬に依つて彼は自分の謀叛に對する批難を慰撫することが出來たのである。ところがこの嫉妬はやがて同性愛的感情（その對象は舅であつた）の擡頭に依つて複雜なものとなり、完全なる嫉妬妄想となつてしまつた。

私の第二の患者は分析して見なければ恐らく追跡妄想とは分らないものであつたらう。併し私はこの若者を結局この病氣になるべき候補と見做さざるを得なかつたのである。彼は父に對する關係に於

いて、その相對性の極端に大きいアムビヴレンツを持つてゐた。彼は一方に於いては公々然たる叛逆兒で、總てに於いて彼は父の理想や希望に反對して成長したが、他方に於いて心の深層では最も恭順なる息子で、父の死後は感傷的な罪障意識からして色慾を斷つてしまつた。彼が現實生活に於いて世の男性に對する態度には彼等を信用してゐないやうな徵象が見えた。彼は知力は強い方であつたので自分のこの心持に理窟付けをすることを心得てゐた。さうして自分は知人や友達に欺かれ搾取されてゐるのだと云ふ風に考へるやうにしてゐた。私が彼に就いて研究して新たに知つたことは、追跡思想なるものは昔から分つてゐたが、これが信用や敬慕なしに存在し得ると云ふことであつた。分析の間に追跡思想が時々閃き出たが、併し彼はそれ等に何の意義をも認めず、いつも必ずそれ等を下らないと云つた。この事は大抵の妄想症(パラノイア)に於いてやはり同様に起き得ることである。さうしてそのやうな病徵が現れると、我々はその現れ出た妄想觀念を(既に永らく存在はしてゐたかも知れないが)多分新たに産出されたものとして見るのである。

私にまで甚だ重大な洞察と思はれることは、一つの質的契機、即ち或る種の神經症的構成の既存してゐると云ふことよりは、量的契機、即ち如何なる程度の注意を、もつと正しく云ふならば如何なる量の纏綿を、これ等の構成體が自分の方へ牽寄せ得るかと云ふことの方が、實際上その意義重要であ

ると云ふことである。我々の第一の患者、卽ち嫉妬妄想を調べて見て、我々はやはり量的契機を重要視すべきことの必要を痛感したのである。卽ちこの場合にも、その變態性の本質は他人の無意識の解釋に過度の纏綿を寄せることの內に存することを知つたのである。ヒステリーを分析することに依つて吾人は旣に久しく類似の事實を知悉してゐるのである。抑壓されてゐる本能感情から生じ來る病的空想は、永い間常態的精神生活の側に屛息してゐて、リビドー經濟の變革からして過度の纏綿を受けるやうになるまではその病的効力を發揮しないでゐるのだが、一度過度の纏綿を受けるや否や、葛籐はそこに生じてそれが徵候（症狀）構成となつて行くのである。であるから吾人は認識の進步として常に愈々經濟的觀點を先にしなければならないやうになつてゐるのである。私はまた次の如き質問を提示したいと思ふ。卽ちブロイラー Bleuler その他の人々が『干涉』„Schaltung" の概念を以て云ひ表はさうと欲する現象は、こゝに强調した量的契機を以て十分に云ひ表はし得てゐるのではないだらうかと。心的發散の或る方向に一つの抵抗の生ずるのは、或る他の方途が過度の纏綿を受け、その結果後者が前者に『干涉』して行くためであることは、何人も假定せざるを得ないところであらう。

私の二人の妄想症患者に於いて、我々にまで非常に敎ふるところ多き對比は、彼等兩者が夢に對する態度に於いて見られる。第一の患者は、旣に云つた通り、その夢に於いて全然妄想の痕跡を示さな

かつたが、他方の患者は非常に豐富に追跡妄想の夢を示した。これ等の追跡妄想の夢は妄想觀念に等しい內容への先驅又は代償として見做すことが出來る。彼は追跡されると非常な不安を以て纔かに遁れることが出來るのであるが、その追跡し來るものは大抵は力強い牡牛又はその他の男性象徵があつて、彼はそれを夢の中でさへも多くの場合、父代償として認識するのであつた。或る時、彼は非常に特質的な妄想的轉嫁の夢を見たとて話した。彼は私が彼の前で髯を剃つてゐるところを夢に見たが、その時の匂ひで私が彼の父と同じ石鹼を使つてゐることを氣付いたと云ふのである。何故私が彼の父と同じ石鹼を用ふることになつたかと云ふに、それは父の轉嫁を私の身に引受けることであつたのだ。夢に於いてこのやうな立場が選ばれてゐると云ふことは、この患者が明かに自分の妄想的空想を輕視し、且つ信用してゐないことを證明してゐる。何となれば、日々目擊するところに依つて見ても、抑々私が彼の目前で髯剃石鹼を使ふやうなことがあるわけもなく、從つてこの點に於いて彼の父轉嫁に何等の內容を供するわけもないことは分り切つたことだからである。

併しながら吾人は二人の患者の夢を比較して見て、妄想症(パラノイア)(又は他の精神神經症)は夢の中にもやはり這入り込むものかどうかとの問題は、たゞ我々が夢を正しく解してゐなかつたゝめに生じたのであると云ふことを知つたのである。夢と覺醒時思想との差違は、夢に於いては覺醒時思想に現れること

の許されない（卽ち抑壓されたもの丶領域からの）內容が取上げられると云ふ點にある。その點だけを別にすれば、夢はたゞ思想のいゝいゝ一形式である。前意識的思想材料が夢の仕事及びその條件に依つて變形せられたものである。抑壓せられてゐるものに對しては神經症上の我々の術語は當てはまらない。それはヒステリッシュとも云へないし、强迫神經症的とも云へないし、妄想的とも云へない。これに反して夢の構成を受ける他の部分の材料、卽ち前意識的思想は常態的であるか、或は何等かの神經症の特質をそれ自身に帶びてゐるかである。前意識的思想は一切のかの病的過程（それ等の內に我々は一つの神經症の本質を認識する）の歸結であるかも知れない。何故に一切のそのやうな病的觀念が夢に於いて變形されないのであるか、それは分り兼ねる。このやうに、夢は直ちにヒステリー的空想、强迫觀念、妄想觀念に應じて變化するものである、つまり夢を分析して見るとさう云ふものが出て來るのである。二人の妄想症者を觀察して見て吾人は、一方の患者は本人は發作を起してゐるのに夢は常態的であり、他方の患者は自分の妄想を輕蔑してゐるのに、その夢には夢想的內容が存してゐることを發見したのである。夢はこのやうに兩方の場合に於いて、當時の覺醒生活に於いては抑壓されてゐるものを取上げてゐるのである。併しそれがまた常にさうと定まつてゐるわけではないのである。

C　同　性　愛

同性愛に於いて肉體的要素が如何に重要であるかを認めたからとて、我々はその起源に就いて心理的過程が如何に働くかを研究すべき責務がなくなるわけのものではない。既に無數の同性愛者に就いて確証せられた典型的な過程は次の事である。即ち、これまで激しく母に定着を持つてゐた若い男は思春期に入つて二三年の後に一轉して自分を母に同一化し、さうして自分自身の再現であるやうな戀愛對象を捜し、その少年を丁度母が自分を愛してくれたと同じやうに愛して行かうとするのである。即ちそかう云ふ過程としては普通に幾年もの間その戀愛條件が次の如くであるのがその徵象である。即ちその男性對象は、本人に於いて件の變化(母との同一化)が起きたのと正に同じ年頃の者でなければならない。强さこそ違へ、どうやらこの歸結に寄與したらしい種々の要素を吾人は知悉してゐる。第一に母への定着、このために他の女性對象への移行が困難になつてゐる。母との同一化はこの對象定着の歸結であり、同時にこの最初の對象(母)に或る意味に於いて依然忠實であることを可能ならしめる。このやうにして自己戀慕症的對象選擇は生ずるのであつて、この傾向は異性に向ふよりは概して容易

であり手近である。この心的過程の背後には非常に强い或る他の過程が匿れてゐる、或はこれと一緒になつてゐる。即ち、男性器の尊重、從つてまた愛の對象にこれが缺けてゐるとは考へたくない心持。女嫌ひ、女を輕視すること、女への反感などは、幼時に於いて女に男性器のないことを發見したところから大抵の場合來てゐる。その後吾人は、同性愛的對象選擇の力强い動機として父親への顧慮、父に對する恐れのあることを知つた。何となれば女を放棄することは父親（又は父代償たるべき總ての男子）との競爭を廻避することを意味するからである。最後に云つた二つの動機、即ち男性器の有無に固執することと並びに父の廻避は去勢コムプレクスの內に數へ入れることが出來るのである。母への定着――ナルチスムス（自己戀慕）――去勢恐怖、これ等三つはやはり決して特殊な契機ではないので吾人はこれまでも同性愛の心理的發源に於いて發見して居たのであるが、そこになほ幼兒時代にリビドーの定着を惹起した誘惑の影響並びに戀愛生活に於いて受働的役割を助勢する肉體的要素の影響も加はるのである。

併しながら我々は同性愛の起源の分析として以上で十分であるとは決して信じてゐないのである。私は今や同性愛的對象選擇へと導くところのこの新たな機制の存することを指示し得るのであるとは云へ、極端な、顯著な、專らなる同性愛の形成に對してその機制が如何に大きな役割を果すかは私に

も分らないのであるが……。幾多の場合を觀察することに依り私の注意するやうになつたことは、それ等の患者には早期幼年時代に母コムプレクスからして特に强烈な嫉妬感情が競爭者(大抵は兄)に對して起されてゐると云ふことである。この嫉妬は兄弟姉妹に對して强烈な敵對的、攻擊的態度をとるに至らしめるもので、その態度は遂に彼等の死をすら願はしめるやうになる事もあるが、併し人間としての發達に抗立してゐることは出來ない。教育の影響の下に於いて、それは慥にまたこれ等の感情の方でも固執してゐるほどの力もないので、かゝる心的態度はやがて抑壓されるやうになり、且つ感情上の變化を閲し、かくて早期の競爭者は最初の同性愛的戀愛對象となつたのである。母への定着がこのやうな結果を示すやうになることから見ても、我々の知つてゐる他の諸過程に對して種々多樣な興味ある關係の存することが分るのである。そのやうな結果は追跡妄想の發展を完全に反映して見せるものである。追跡妄想に於いては始めには戀しいと思つた對象が今度は憎らしい追跡者となるのである。然るに今度の場合に於いては憎らしい競爭者が變じて戀愛對象となるのである。母への定着がかう云ふ結果になると云ふはまたこの過程が度を超えてゐるものであつて、これが私の考へでは社會的本能の個人的起源であると思はれるのである。(一)競爭者を憎む場合も愛する場合も嫉妬的並びに敵對的感情は既存してはゐるのだが、それ等が滿足させられ得ないので、そこで抑壓されてゐる攻擊衝

動への反動形成として、優しい社會的の同一化感情が生ずるやうになるのである。

註（一）『集團心理と自我の分析』（本全集第三卷）參照。

同性愛的對象選擇のこの新たな機制、克服されたる競爭心（敵對心）と抑壓されたる攻擊慾とから發生して來たこの新たな機制は、多くの場合に於いて、我々の既に知つてゐる典型的諸條件の間に混入するのである。同性愛者の傳記を調べて見ると、母親が別の男兒を褒め、チトこの兒を手本に見習ひなさいと云つた時以後その轉變の生じてゐるのを知ることが稀でない。このために對象をナルチスティシュに選擇するやうになり、暫時鋭い嫉妬の時期を經て競爭者が戀愛對象となつてゐるのである。併しもしさうならない場合があるとすれば、この變化が非常に早く起きてをり、母との同一化がその背後に匿れてゐるのであつて、その點に於いてこの新たな機制はやはり存してゐるのである。また私の觀察した患者に於いては、この新たな機制はたゞ同性愛的態度に導いてゐるだけで、その同性愛は必ずしも異性愛を拒けず、また別に女嫌ひ、女人畏怖（Horror feminae）を伴つてはゐなかつたのである。

同性愛者の內には社會的本能感情を特別に發展させ、また共同利用的興味に沒頭することとの特徴を示すものが少くないと云ふことは周知の事實である。他の男に戀愛對象を認める男が男性社會に對す

る態度は、他の男に於いてまづ女への競争者を認める傾向ある男の男性社會に對する態度と違つてゐることを理論的に說明して見たいと人々は思ふであらう。さう云ふ人々にとつてたゞ困ることは、同性愛者の間に於いても嫉妬と競争とがあり、男性社會內に於いても這般の競争が起り得ると云ふことである。併しまた、かう云ふ抽象論を離れて見るならば、男との競争を早期に克服するために同性愛的對象選擇の生ずることが稀でないと云ふ事實は、同性愛と社會的感情との關係に對して重要であり得るのだ。

精神分析的考究に於いては我々は常々、社會的感情を同性愛的心的態度の昇華として見ることになつてゐる。社會的氣味のある同性愛者にあつては、對象選擇から社會的感情を分離させようとしても十分にうまく行かないであらう。

マゾヒスムス論

始めて『國際精神分析雜誌』第十卷第二號（一九二四年）にて發表。原書全集第五卷收載。
原名は „Das ökonomische Problem des Masochismus.“

人間がその本能生活に於いてマゾヒスティッシュ（被虐待性的）な努力をするといふは經濟的（快不快的）見地からして不可解であると云ふのは本當である。何となれば、快不快原則が心的過程を支配してゐるために、苦痛を避け快樂を追及するのが心的過程の第一の目的となつてゐるものとすれば、苦痛を享受するマゾヒスムスは誠に譯の分らぬものとなるからである。苦痛と不快とが厭はしいものでなく、寧ろそれ自身が目的となり得ると云ふことは、快不快原則が痲痺してゐることになる。我々の精神生活の監守者が云はゞ醉ひ呆うけてゐるわけになる。

で、マゾヒスムスは我々には或る大きな危險になるやうに思へるが、これの正反對たるサディスムス（加虐性）の方は別に危險のやうには思はれない。快不快原則は單に我等の心理生活の監守者たる代りに、我々の生活の監守者であると云ひたい氣がする。併しその時問題となるのは、快不快原則が我々の區別した二種の本能、卽ち死の本能とエロティッシュ（リビドー的）な生の本能とに對する關係を調べると云ふことである。さうして我々がこの要求を果すまではマゾヒスムスの問題を徹底的に論ずることは出來ないのである。

想ひ起せば（一）我々は一切の精神過程を支配してゐるこの原則を、フェヒネル Fechner の所謂『安

定への傾向 Tendenz zur Stabilität の特殊の場合として解しておいたことがある。さうして同時にこの精神的裝置には、これに向つて集まり來る亢奮の總量を無に歸してしまふところの、(或は少くとも無に歸して了ひさうになるやう下に抑へておくところの、)意圖があると解しておいたのであつた。

註 (一) 『快不快原則を超えて』(本全集第四卷、四頁)參照。

バルバラ・ロー Barbara Low はこゝに假定せられてゐる如き意圖を涅槃原則(ニルワーナプリンチープ) Nirwanaprinzip と名付けてゐるが、吾人はその名稱を受容れるものである。ところが我々はかの快不快原則を無考へにも、この涅槃原則と同一視したのである。もし果して同一だとすれば、一切の不快は精神中に存する亢奮の緊張の高まることゝ一致し、一切の快樂はその緊張の低下と一致しなければならない。涅槃(並びにそれと同一視せられた快樂)原則は全然死の本能に從屬するもので、この本能の目的は無常なる人生を無機物狀態の安定(寂滅)に齎すにあることゝなる。また生の本能やリビドーは緊張せる生の行程を擾亂せんとする要求を持つてゐるから、それに對して警戒するのが涅槃原則の機能であると云ふことになる。併しかう云ふ考へ方は正しい筈がない。我々は快樂の增減が直接に緊張感の消長から生ずるやうに考へてゐるやうであるが、併し愉快なる緊張、不快なる弛緩のあることもまた疑ふわけに行かない。性的亢奮狀態はそのやうな愉快なる刺戟增大の例として是非とも擧げなければならない

ものではあるが、これぱかりが唯一の例では慥にない。で、快不快は我々が亢奮緊張 Reizspannung と呼ぶところの、量の増減に依憑するものではないのである。勿論、それの増減と重大な關係はあるにもせよ――。快不快はこの量的要素(クワンチタチフ)には關係はなく、その要素の特性(カラクテル)（それを吾人はたゞ質的(クワリタチフ)と名付け得る）に關係があるやうである。この質的特性が何れの要素であるかを指摘することが出來るならば、我々は心理學上大いに進展を見るのであるが――。多分それは律動(リトム)であらう、亢奮量の變化消長に於けるその時々の過程であらう。吾人はそれを知らないのである。

あらゆる場合に於いて我々が認めざるを得ないことは、死の本能に屬する涅槃原則は生類に於いては一つの變化を閲してをり、その變化に依つて涅槃原則が快感原則になつてをると云ふことである。で、我々はこれからは二つの原則を一つに思ふことを避けるであらう。如何なる力からこのやうな變化が生じ來るかは、もし吾人がかう云ふ考へを追及せんと欲するならば、これを判知するにさして困難ではない。死の本能と相並んで生活現象の統制にこのやうに已れの役割を果すやうに割込んで來たのは、たゞ生の本能、即ちリビドーに外ならないのである。そこで吾人は一つの小さな、併し興味のある一聯の關係を認めることが出來るのである。――涅槃原則は死の本能の傾向を表はし、快樂原則はリビドーの要求並びにその變化、即ち外界の影響たる現實原則を表はしてゐるのである。

これ等三原則の何れもが本來、他の原則に依つて無効にされることはない。大抵は相互に撞着しないやうにすることを承知してゐる。尤も時々は勿論そこに葛藤が起きて、一方からは亢奮量の低減があり、他方からは亢奮の質的特性が生じて、遂に亢奮發散が時々に延期され、不快的緊張が一時的に保留せられるやうになることもあるが――。

このやうな論議の結果、快樂原則を生命の番人と名付けることは差支へないことを我々は知るのである。

さて吾人はマゾヒスムスの問題に立戻る。マゾヒスムスなるものは我々に三つの姿を示してゐる。即ち、性的亢奮の狀態としてと、女性的本質の表現としてと、生活態度(行動)の規範としてとである。これ等を性的 erogener, 女性的 femininer, 並びに道德的マゾヒスムス moralischer Masochismus と名付けることが出來よう。第一の性的マゾヒスムス、即ち苦痛享受は他の二種のマゾヒスムスの根柢にも横たはつてゐる。これは生物學的であり、體質的に論ずべきもので、全然不明な事情を豫想しなければ理解出來ないものである。第三のマゾヒスムスは或る點に於いては最も重大な現象であつて、これは大抵は無意識的な罪障感として最近に精神分析に依つて始めてその眞相を知られたものであるが、併し他の方面の認識に於いては既に十分に説明せられ指摘せられてゐるものである。それに反し

女性的マゾヒスムスは最も我々にも觀察し易い。最も不明瞭でなく、それのあらゆる關係を看過する恐れが最も少い。で、我々はこの方の說明から取掛ることにしよう。

この種のマゾヒスムスは男子に於いては（材料の根據からして私はこゝでは男子に限つておく）マゾヒスティッシュな（從つて屢々不能症的の）人物の空想中に澤山にあることを我々は知つてゐる。さう云ふ男子は自慰的行爲に走り、或は自分一人で性的滿足を表はしてゐる。これ等の空想はマゾヒスティッシュな變態者の現實的行爲と完全に合致してゐる。それ等の行爲がそれ自身の目的として實施されて居ようと、性能力の恢復並びに性交への導きとして役立つてゐようと――。二つの場合――現實上の行爲と雖も、これはたゞ空想の遊戲的實施に外ならない――に於いて明かにその內容となつてゐるのは、奴隸の如く扱はれ、束縛せられ、毆られ、笞打たれ、如何樣にか虐待せられ、無條件的服從に强ひられ、侮辱せられ、卑められることである。この虐待が嵩じて傷害となる場合もあるが、それは極稀で、非常な限定の下でなされるのだ。最も手近な解釋し易い解釋を下すならば、マゾヒストは無力依屬の小兒の如く、殊に惡い事をした子供のやうに取扱れることを欲するのである。これに對しては良心論などを持出すには及ばないのである。その材料は類似のもので、よしんば精神分析者でなくとも誰でも觀察してをれば分るものである。併しマゾヒスティッシュな空想が特に豐富に動いてゐる

種々の場合を研究する機會があるならば、我々は、それ等の場合に當人等が自分を婦人的な立場に、即ち男根を去られ、交接せられ、或は分娩するなどを意味する立場に置いてゐることを發見するのは、容易である。それ故にかう云ふ形で現れたマゾヒスムスを私はより重要なるとも云ふべき女性的マゾヒスムスと名付けるのである。よしんばそれの諸要素の多くは幼兒生活から來てゐるものであるらしいにもせよ。このやうに幼兒性と婦人性とが相互に層積してゐることに就いては、後に簡單に說明を下すであらう。去勢又は去勢を代表する隔膜は、空想中に於いては、性器や眼には何等の損傷も起き得ないと云ふ條件となつて、それの否定的な痕跡を屢々殘してゐる。(マゾヒストの苦悶は大抵、サディストの――空想上の、又は類似の――殘虐ほどには重大との印象を與へないのが常である。)マゾヒストの空想の內容中には明かに、また一つの罪惡感が表れてゐる。即ち當人が何か罪を犯し(それが必ず裁かれる)、その罪はあらゆる苦しい手續きに由つて賠はれねばならないと云ふことが假定せられてゐるのである。これは一見、マゾヒスティッシュな內容を表面的に理窟付けたやうに思はれるが、併しその背後には幼兒時代の自慰が裏付けられてゐるのだ。他方に於いて、この罪惡感は第三の道德的形式のマゾヒスムスの方につながつてゐるのである。

既に述べた女性的マゾヒスムスは原初的な、性慾上のマゾヒスムス、即ち苦痛享受に全然依憑する

ものでヽこれの說明に就いてはさう立入つた吟味はしなくても十分であらう。

私は『性說に關する三論文』(一)の中で、幼兒性感の源泉に關する章に於いて、性的亢奮は幾多の內的過程の副的効果として、これ等の諸過程の激しさがたゞ或る量的限界を超えるや否や生ずるものであることを主張しておいた。さうだ、有機體に於いて凡そ一層重要なるものは恐らくみな、その成分を性本能の亢奮に寄與せざるはないと主張しておいた。從つてまた苦痛の亢奮、不快の亢奮もまたかゝる結果を生ずるわけである。このやうに苦痛及び不快の緊張に際してリビドーが共に亢奮することは幼兒生理的機制であつて、かゝる機制は後に至つて消滅するのである。このリビドーの隨伴的亢奮は種々なる性的素質に於いて種々なる大きさの形成を閱し、常に生理的根柢を與へる。さうしてやがてこの根柢が性慾上のマゾヒスムスとなつてその上に心理的のマゾヒスムスが築かれるのだ。

註（一）本全集第五卷。

併しながらこの說明では何故にマゾヒスムスがその正反對の本能生活、卽ちサディスムスと必ず常に密接な關係があるかと云ふことに就いて何等闡明するところがない、その點がこの說明の不足なところである。けれども一歩退いて、生類に於いては二種の本能が働いてゐるとの吾人の考へに立戾るならば、卽ち吾人は今一つの（併し上の推論には矛盾しないところの）推論に到達するのである。リビ

ドーは（複細胞）動物に於いてはそこに支配してゐる死の本能、又は破壞本能と撞着する。この破壞本能はこの細胞動物を分解し一切の個々の要素的組織を無機物的安定（相對的の安定かも知れないが）の狀態に導かんとするものである。リビドーはこの破壞本能を無難なものとするのがその任務である。さうしてリビドーはこの破壞本能の大部分を、或る特殊な有機組織（筋肉系統）の助力を俟つて外方にさし向け、外界の對象に導くのが、その任務である。そこでこの本能は破壞本能とも、支配本能とも、權力意志とも名付けられる。この本能の一部分は直接的に性的機能に奉仕せしめられ、その方面に於いて重大なことを爲すのである。これこそ本來のサディスムスである。また別の一部分は一緒になつて外界へ向はないで、有機體內に殘存し、そこに於いて、前に擧げた性的の隨伴亢奮の助勢と一緒になつてリビドーとなる。この部分の本能をこそ我々は、本來的な性慾的マゾヒスムスとして認めなければならないのである。

リビドーは如何なる方途に於いて如何なる手段に依つてこのやうに死の本能を支配するやうになるのか、それを生理的に理解することは我々にはどうしても分らない。精神分析的の考へ方に於いてはこれ等兩種の本能が非常に複雜に混合し、雜多に化合してゐて、我々は純粹に死の本能、生の本能をとり出して認めることが出來ず、兩者のさまざまな複合を認めざるを得ないほどであると云ふ事を假

定する事が出來る。或る影響のある場合には、本能の混合に對して、本能の分解が生ずる。隨伴的リビドーに結び付くことに依つてそのやうな混合から離脱する死の本能はどれくらゐの大きさの部分であるかは、今のところ明白には分らない。

多少の不確實を敢へてして云はうならば、有機體の内に働いてゐる死の本能――根原的サディスムス――は、マゾヒスムスと同じものであると云ふことが出來る。死の本能の主要部分が外的對象にさし向けられた後に、そこには内部に本來の色慾的マゾヒスムスが殘る。このマゾヒスムスは一方に於いてはリビドーの一成分となつてをり、他方に於いてなほ常に自分自體をその對象に持つてゐる。で、このマゾヒスムスは、人生にとつてあれほど重要である（死の本能とリビドーとの）合成が爾々の時期に出來たと云ふその事の證據であり殘物である。或る事情の下に於いては、外部に向けられた（投出された）サディスムス（卽ち破壞本能）は再び内に取込まれ、内面に向けられ、かくして再び以前の立場に復歸すると云ふて聞かされても我々は驚かないであらう。そこで破壞本能は第二次的マゾヒスムスを生じ、さうして本來のマゾヒスムスに附加はるのである。

色慾上のマゾヒスムスはリビドー發達のあらゆる時期に參加するのである。さうしてそれ〴〵の時期からそれの時々の心理的扮裝を借り來るのである。トーテム動物（父）に喰はれることの恐怖は原始

的な口唇的組織（父に打たれたいとの願望）から、更にそれに續く肛門・虐待性的（サディスティッシュ・アナーレ）時期から發して居る。男根的組織時代の殘滓として去勢と云ふことが（後には否定されるが）マゾヒスティッシュな空想內に這入り込んで來る。勿論女にのみ特有なる立場（受交、並びに分娩など）が窮極的な性器組織から離れて生ずる。またマゾヒスムスに於ける肛門の役割は、それの明白な現實上の根據は別としても、これを理解するに容易である。肛門は虐待性的・肛門性感時代には色慾上では最も好まれる個所である。宛も乳房が口唇性感時代に最も好まれる個所であり、男性器が性器時代に最も好まれる個所であるのと同じやうに——。

第三形成のマゾヒスムスたる道德的マゾヒスムスは、吾人が性慾性感として認めるところのものとの關係が弛んでゐるところが、特に著しい點である。總てマゾヒスティッシュな苦痛と云ふものは、その苦痛が愛するものから發し、彼等の命令であるために我慢すると云ふのが條件である。かゝる制限は道德的マゾヒスムスに於いては撤廢せられる。苦痛は苦痛のために忍ばれるのだ。その苦痛が愛するものから課せられてゐようと、路傍の人から課せられてゐようと、それは問題でないのだ。それはまた非人稱的な勢力や事情から發して居てもいゝのだ。眞のマゾヒストは何時何處でも打たれるために自分の頰を向けることを辭さないのだ。かゝる態度を說明するにはリビドーは姑く持出さないで、

破壊本能が又もや内に向ひ、今や自分自身に向つて狂暴に振舞つてゐるのだと云ふ風にだけ考へておく方がよいやうである。併し言語の習慣はかゝる生活態度が愛慾に關係のあることを忘れてしまはないで、そのやうな自己傷害者をマゾヒストと呼んでゐるのは、甚だ意味深長なる事どもである。

例の如く技法上の習慣を忠實に守つて、吾人はまづ極端なる、疑ふまでもなく病的な形式のマゾヒスムスをのみ問題にして見よう。私は別の書中（一）でも細論しておいた通り、分析取扱をして見ると時々、治療の影響に對するその人の態度からして吾人がそこに『無意識的な』罪障感を假定せざるを得ないやうな、さう云ふ患者にぶつつかることがある。私はまたその書中で、如何なる點（『治療に際しての否定的反應』）に於いてかゝる患者を認識するかと云ふことを論じておいたし、またさう云ふ感じの強いと云ふことは我々の醫療的、並びに教育的意圖の成効に對して最も重大な抵抗と最も大なる危險とを意味すると云ふことをも、ありのまゝに云つておいた。かゝる無意識的罪障感の滿足は、病勢集合のどうやら最も強力なる前線である。さうして大抵の場合このやうに集合してゐる諸種の病勢が治療に對して反抗し、病氣をやめにしないやうにするのである。神經症者の嘗める苦痛なるものは、彼等が依つて以てそのマゾヒスティッシュな傾向に價値あらしめる契機なのだ。治療のために百方手を盡して無駄であつた神經症が、例へばその患者が不幸な結婚に依つて悲慘なことになつたとか、その財

產を失つたとか、或は恐ろしい肉體上の病氣にとりつかれたとか云ふ場合に、突然癒つてしまふと云ふやうなことがある、これはあらゆる理論の上から期待出來ないことであるが、これが實際にあることで、この事實は我々にまで甚だ學ぶところ多い事實である。して見れば、一つの形式の苦痛は他の形式の苦痛に依つて解除せられるのだ。で、或る程度の苦痛を確保せんがためにさう云ふ事になつてゐるのだと云ふことを我々は知るのである。

註（一）『自我とエス』（本全集第七卷。）

無意識罪障感なるものを患者達はなか〳〵容易に信用してはくれない。意識的な罪障感、即ち罪惡意識が、如何なる苦痛となつて表れるかと云ふことは彼等もよく承知してゐる。それ故に、自分の內にそれと似たやうな感じを包藏してゐて、而も自らそれを感知しないと云ふことは承認し難いのだ。勿論、私とても彼等の抗言を或る程度までは容認する。それで心理學的には全然不正確な『無意識罪障感』„unbewusstes Schuldgefühl" と云ふやうな名稱を放棄して、その代りに『懲罰慾求』"Straf-bedürfnis", と云ふ語を以てするのだ。この語でも十分的確に這般の事情を云ひ表はすことは出來るのだ。併し我々はこの無意識的罪障感を、意識的罪障感の範に倣つて判斷し位置付けることは差支へないと思ふ。

吾人は良心の機能を超自我に歸したのである。且つ罪障意識を以て自我超自我間の一つの緊張の表現と見なしたのである。自我がその理想たる超我に依つて規定されたる要求に協ひ得ざる場合には、自我は强迫感（良心の惱み）を以て反應するのである。そこで我々の知りたいと望むことは、如何にして超自我がこのやうな權威ある役割を持つやうになつたか、また何故に自我はそれの理想に反した場合に畏怖しなければならないかと云ふことである。

自我は三つの個所の要求を統一し調整するのがその機能であると云ふ事が出來るならば、我々はなほ次のやうに附言し得るのである、自我は超自我の内に已れの模範を發見し、それに倣はうと努力するものであると。この超自我はつまり、エスの代表者であると共にまた外界の代表者でもある。超自我は如何にして生ずるかと云ふに、エスのリビドー的亢奮の最初の對象たる兩親が自我内に取込まれ、その際にそれ等の對象に對する關係が性的意味を失ひ、直接的性目的からの離脫を經驗するのである。このやうにしてまづエディポス・コムプレクスの克服が可能となつたのである。超自我は今や取込まれたる人物の本質的特徵を保有してゐるのである。監督し懲罰せんとする彼等の力、傾向を保有してゐるのである。他の書中（一）でも細論しておいた通り、權威ある兩親を自我中に取込むと同時に本能の分解が生じ、そのために權威が一層高まつて來る。自我內に働く良心たる超自我はこれまで自

我を守護してゐたのが、今や自我に對して嚴格に、殘酷に、苛辣になる。カントの無上命法はこのやうに、エディポス・コムプレクスの直接的遺產である。

併しながら、超自我内に於いて良心としてなほ働いてゐる同じ人物は、エスのリビドー的亢奮の對象ではなくなつた後にも、而もやはり現實の外界に屬してゐる。この現實の外界から彼等は引拔いて來られたのだ。彼等の力の背後には過去のあらゆる影響並びに轉嫁が匿れてゐるのであつて、その力が現實の最も感知され易い表現の一つであつたのだ。このやうにいろんなものが一緒になつてゐるために、エディポス・コムプレクスの代償たる超自我はまた現實外界の代表となり、また自我の努力のためには手本となるのである。

で、エディポス・コムプレクスなるものは、既に歷史的にも推定せられてゐる如く(二)、我々の個人の道德の根源であることが分るのである。幼兒が生長して行くにつれて、漸次に兩親からは離れて行くが、超自我に對しては兩親の個人的意義は復活して來るのである。彼等に依つて遺された面影の上にやがて教師、權威者、自ら模範と仰ぐ人、並びに社會的に認められてゐる英雄等の印象が附加はるのである。既に生長して自我も一層抵抗的になつてゐるから、それ等の人物は最早取込まれる必要はないのだ。兩親を先頭とするこれ等一連の人物の最後の形態は運命と云ふ得體の知れない力である。

運命を始めから非人格的なりとして考へることは我々の極めて少數者にしか出來ないのである。オランダの詩人ムルタツーリ Multatuli (一) がギリシアの運命神モイラ Moira を一對の神として考へたのに對しては、反對すべきことはない。併し一體人間が世の中に起る事柄を神や自然に歸すると云ふは、兩親からは最も遠いこれ等の形態を兩親の如くに――神話的に――感じて、自分等とそれ等の運命神と愛情關係で結付いてゐるやうに信じてゐるのではないかと疑はれるのである。私は『自我とエス』の中で、人間が現實に於いて抱く死の恐怖をも、運命をそのやうに兩親的に考へるその見方から說明して見ようと試みた。さう云ふ見方をしないやうになることはなかなか困難であるやうだ。

註（一）『トーテムとタブー』第四章（本全集第七卷）參照。
（二） Ed. Douwes Dekker(1820—1887)

これだけの豫備知識を得て後に、我々は道德的マゾヒスムスの考究に立戻らう。吾々が云つた通り、或る人々は治療に際しての、並びに生活上の彼等の態度に徵して、彼等が過度に道德上の禁制を受けてゐる、あまりに鋭敏な良心の苛責の下に立つてゐる――よしんば彼等はその過重道德を少しも意識してはゐないにもせよ――との印象を我々に與へるのである。更らに仔細に觀察して見ると、そのやうな無意識的道德感と道德的マゾヒスムスとの間には、どうやら區別が存することを我々は氣付くの

である。前者に於いては超自我のサディスムスが高められてゐて自我はこれに屈從してゐると云ふ點が强調されてゐるに對し、後者に於いては、自我自身のマゾヒスムスが强調せられ、超自我の懲罰にせよ、或は外的兩親の如き力の懲罰にせよ、とにかく何者かの懲罰を待望してゐるのである。吾人は始めの方でこの兩者を混合しておいたが、それは許されねばならない。何となれば、兩方とも、自我と超自我（もしくは、自我にとつては超自我に等しい力）との間の關係が眼目であつたからである。兩方の場合に於いて、懲罰並びに苦痛に依つて滿足を得たいとの要求が存することに於いては結局同じである。して見れば、次の事は相當重要である。即ち、超自我のサディスムスは大抵の場合に鋭く意識されるが、自我のマゾヒスムスは概して當人の習慣の如くに見えるので、彼等の態度とこれを區別しなければならない。道德的マゾヒスムスが無意識的であると云ふことから我々は一つの示唆を受けるのである。我々は『無意識的罪障感』と云ふ言葉を兩親的な力に依つて懲罰されたいとの願望として意譯することが出來た。そこで我々は知るのである、空想中に屢々出て來る（父に打たれたいとの）願望は、父に對して受身的（女性的）性關係を結びたいとの今一つの願望と密接な關係があり、たゞ後者の退行的歪みに過ぎないと云ふことを――。この說明を道德的マゾヒスムスの內容に宛てはめて見るならば、卽ちこのマゾヒスムスの深奥なる意義は判明して來るのである。良心と道德とはエ

ディポス・コムプレクスの克服、沒性慾化に依つて生じたものである。道德的マゾヒスムスに依つて道德は再び性慾的特質を帶びるやうになり、エディポス・コムプレクスは復活し來り、道德からエディポス・コムプレクスへの退行が進展するのである。この事は起つて道德のために利益になるわけでもなければ、個人のために利益になるわけでもない。個々人は彼のマゾヒスムス以外に彼の完全なる、もしくは或る程度の道德を保有してゐるものではあるが、併しマゾヒスムスに於いて彼の良心の大部分が失はれて行くのである。他方に於いてマゾヒスムスは『罪ある』行爲への誘惑をなすものである。やがてこの行爲はサディスティッシュな良心の批難に依つて（例へば多くのロシア人の性格の型がこれである）、或は運命の偉大な兩親的な力の善處に依つて賠はれなければならないのである。この最後の兩親的なものに依つて罰せられるやうにするためには、マゾヒストはをかしなことを行り出さなくてはならないのである。自分自身の利益に反したことを働かねばならないのである。現實世界に於いて自分に開けてゐる前途を破るやうなことをしなくてはならないのである。さうして結局自分自身の現實的存在を打壞さなくてはならない。

サディスムスが自分自身に逆向して來ることは、敎養に依る本能抑壓の場合には常に必ず見られることで、そのために當人の破壞本能の大部分は生活上で活用せられないでしまふことになるのである。

このやうに差控へられた部分の破壞本能は、マゾヒスムスの助勢となつて自我內に現れることは、これを考へるに困難でない。併し良心の現象から察して見ると、外界から逆戻りして來た破壞慾は超自我に依つてそのやうに轉變されることなくとも取上げられ、自我に對する超自我のサディスムスを强め高めるのである。超自我のサディスムスと自我のマゾヒスムスとは相互に補ひ合ひ一致し合つて同一の結果を招來するやうになる。そこで我々はかく解するより外はないと私は思ふ、即ち、本能抑壓からして——屢々、或は全然普遍的に——一つの罪障感が結果し、また良心が强く鋭敏になればなるほど當人は他人への攻擊を抑制するのだと。で、敎養ある者として好ましからぬ攻擊を避ける慣習を持つてゐると自ら知つてゐる者は、從つて善き良心を持つてをり、自我をよく監督して放肆ならしめざる人であると期待することが出來よう。世の人々はまづ道德的要求があつて、その結果として本能の抑制があるかのやうに云ひ慣はしてゐる。併しそれでは道德が何處から來るかと云ふ事の說明はついてゐない。實際に於いてはその反對に來るやうである。最初に本能を抑制するのは外的な力に依つて强要せられるためである。その强要せられたる抑制が道德を作り、その道德は良心となつて表はれまた更に本能抑制を次々へと要求する。

して見れば道德的マゾヒスムスなるものは本能混合の存在するための昔ながらの道具となつてゐる

のである。道德的マゾヒスムスの危險性は何處から來るかと云ふに、それはこのマゾヒスムスが死の本能から發して居り、さうしてその本能の破壞慾となつて外方に向ふのでない部分に相當してゐると云ふ事のためである。併し他方に於いてこのマゾヒスムスは色慾的要素の意義を帶びてゐるからして當人の自己破壞と云ふこともリビドーの滿足と云ふ事がなくては實現され得ないのである。

崇物症

一九二七年(?) 原書全集第十卷收載。原名は „Fetischismus."

私が昨年中取扱つた患者の中には、その戀愛の對象選擇が一つの崇物（Fetisch）に支配されてゐるものが多くて、彼等を研究して見る機會を持つた。が、これ等の人々は崇物の故に私の分析を乞ひに來たわけではないのだ。何となれば崇物は崇物の本人にも變態と認められはするが、併し別に苦痛の症狀としては感ぜられはしないからである。大抵の場合、彼等は自分たちの崇物を滿足に思ひ、また崇物のお蔭で自分等の戀愛が氣安くなつてゐることを感謝したいやうな氣持にさへなつてゐるのである。崇物はこのやうに、大抵の場合、副的滿足物の如き役割を果してゐるのである。

これ等の場合の細々した事どもは固より公にし得べき限りでない。それ故に私はまた、如何様にして偶然的事情が崇物の選擇へと寄與したかをも示すことが出來ない。中に就いて最も著しいと思はれる場合は、或る若い男が『鼻頭の輝き』„Glanz auf der Nase„ を崇物的條件として取上げてゐることであつた。ところがこの患者は赤ん坊時分に英語を聞きつゝ育つて來たが、後にドイツに渡つて來て殆どすつかり母國語を忘れてしまつた。ところがこの事實に依つて彼の崇物的傾向が驚くべき説明を下されたのであつた。極早期の幼兒時代に根ざしてゐる崇物はドイツ語的に讀まずに英語的に讀むのであつた。『鼻頭の輝き』„Glanz auf der Nase“ は『鼻頭の一瞥』„Blick auf der Nase“(glance =

Blick）であつた。鼻はこのやうに彼の崇物であつたのだ。鼻頭には特殊な輝きがいくらでも見られると彼は云ふのだが、他人には見えなかつた。

分析に依つて崇物の意味及び意圖に就いて知り得たところは、總ての場合に於いて同一であつた。その知り得たところが如何にも確實で動かぬものに思へるので、彼はこの同じ解決を崇物症のあらゆる場合に普く適用せんとするに躊躇しないほどである。ではその崇物とは何であるかと云ふに、これは要するに男性器の代償である。かう聞かされて何だと人々は思ふことであらう。そこで私は急いで附加へるが、ここに云ふ男性器と云ふのは任意のではなく、一定の特殊の男性器で、それは我々の早期幼兒時代には大きな意味を持つてゐたが、併し後にはその意義を失つてしまつた男性器で、さう云ふ男性器の代償が崇物であると云ふのだ。つまり、さう云ふ男性器があると云ふ考へは常態者に於いてやがてなくなるものであるが、そのなくなるのを防止するのが正に崇物の役目なのである。もつと明瞭に云ふならば、崇物は女(母)の男根 Pallus に對する代償である。女(母)にはさう云ふ男根があると幼兒は信じてゐたのである。さうしてさう云ふ男根は實はないのだとは考へたくないのである。何故にさうであるかは我々には分つてゐる。(一)

註（一）本集第六卷『分析藝術論』中の第四論文『レオナルドの幼兒期記憶』（一七二頁以下）參照。

要するに男兒が女には男性器がないと云ふことを知覺して、この事實を認識することを拒むところから崇物の現象は生ずるのである。いや、さう云ふのは本當でない。何となればもし女が去勢されてゐるとなれば、自分の男性器も失くなる危險の可能性があると云ふことになるからだ。それに對して或るナルチスムス（獨尊觀念）が反抗して立つたのである。自然がこの性器を大事にさせるやうにと調べておいた部分のナルチスムスが反抗するのである。これに類似した恐慌を成人も後に、王位又は祭壇が危殆に瀕してゐるとの叫びを聽いた時に、恐らく感ずるのである。さうしてこの恐慌のために同樣非論理的な結果に導かれるのである。もし私の考へ違ひでなければ、ラフォルグ Laforgue ならばかかる場合に云ふであらう、男兒は女に男性器がないとの知覺に對して『明盲症である』„skotomisieren" と。（一）

註（一）私は自分で自分を訂正しておくが、ラフォルグはかうは云はないであらう。私はさう信ずべき相當の根據がある。彼自身の考へに依れば『明盲症』„Skotomisation" と云ふ術語は早發性癡呆症の特徴を記述するために出來た語で、分析的見解を精神病者に轉用することに依つて得た語ではなく、また發達の過程や神經症構成に對しては適用すべからざる語だからである。本文に於いてはこの語の使用方法を曖昧にしないやうに骨が折つてある。

一つの新しい術語はそれが一つの新しい實情を記述し又は指示する場合にのみ正當である。この場

合はそれに當篏らない。我々の精神分析的術語の最も古いもの、即ち『抑壓』„Verdrängung“と云ふ語は、既にこの病理的過程を記述するものだ。もし人々がこの病理的過程に於いて觀念の過程と感情の過程とを截然區別し、『抑壓』と云ふ語を專ら感情の方にのみ保留しておかうと思ふならば、觀念の過程に對しては『否認』„Verleugnung“と云ふ語を用ふるのがドイツ語として正しい用法であらう。『明盲症』と云ふ語は私には特に不適當に思へる。何となれば、これでは知覺がすつかり拭ひ去られて了つて、宛も視覺的印象が網膜上の盲目的斑點上に落ちた場合の如き觀念を與へるからである。併し問題の心的立場はその反對で、知覺は拭ひ去られてはをらず、さうしてその知覺を勉めて否認するために非常にエネルギッシュな活動がなされてゐることを示すのである。子供が女を自ら觀察して女に於いて男根があるとの信念を少しも變へずに保有してゐると云ふは正しくない。それは保有されてはゐるが、併しまた廢棄されてもゐるのだ。好ましからぬ知覺の重みと、その逆願望の强さとの間の葛藤に於いて、遂にそこに無意識思想法則——心の働きの元——の支配下に於いてのみ可能なる如き妥協が成立する。そこで女はやはり男性器を持つてゐるのだと云ふことに心內ではなつてゐるのだ。併しこの男性器は以前に考へてゐた男性器とは違つたものになつてゐるのだ。それとは違つた何物かがそれの代りになつてゐる。云はゞ、それの代りに指定されてゐるのだ。さうして以前のものに寄せ

られてゐた興味の遺産が、この方に指定されてゐるのだ。ところが、この興味は今や異常に高まつてゐる。何となれば、この代償の生ずるに際して、去勢恐怖と云ふことが大きな貢獻をしてゐるからである。そこに起る抑壓の『消すべからざる一點』としてまた、現實の女性器に對する嫌惡と云ふことが殘る。こゝまで論じて來れば人々は崇物が何を爲すものであるかゞ、まに何に依つて崇物が保持されてゐるかゞ分つたであらう。崇物は去勢の脅威に對する勝利の徵象、並びにそれに對する防備となつてゐる。崇物に依つて崇物症者はまた同性愛者となることから免れてゐるのである。何となれば、崇物に依つて女にも、これを性對象として擇ぶに堪え得べきものと思はしめる如き特質があると考へられるやうになるからである。後年の生活に於いて崇物症者は性器代償に於いて今一つの利得を享受するものと信じてゐる。自分の崇物を他人は自分ほどに重要視しない。それに近付くことを妨げられない。その崇物に附隨してゐる性的滿足を容易に果すことが出來る。他の人々が苦勞して求めるものは、崇物症者等には少しも羨ましくないのである。

女性器を見た時の去勢恐怖はどうやらそのまゝに大抵の男子に於いて殘存してゐるらしい。何故に或るものはかゝる印象を受けた結果同性愛者となり、或る者は崇物を作り上げることに依つてこの恐怖を防禦し、また非常に大多數のものはこれを克服するのであるか、それは勿論我々にも說明し得る

ほど明かになつてゐない。共同的に効果を及ぼす條件は數々ある内に、何れがこの稀なる病理的歸結を生ずるのであるかゞ分つてゐないと云ふのが本當のところであらう。結局、我々は現に起つてゐる事柄を説明することが出來るだけで滿足しなければならない。さうして何故に或る事柄が起きないかを説明すべき責めは、必ずしも負ふには及ばないのである。

女に於いて男根(ファルス)のないことを遺憾に思ふところからそれの代償として、他の場合には男性器(ペニス)の象徴となる如き品物が選ばれると云ふことは如何にもありさうなことである。それは非常に起き易いことであらうけれども、それが必ず起るときまつてゐるわけではない。崇物の定着するに就いてそこに一つの過程が伴つてゐるやうに思はれる。卽ち外傷に依る健忘のあるに拘らず、そこになほ記憶のこびりついてゐるらしいことを思はせる何物かの存することである。そこにはまた興味が途中で死にかゝつてなほ殘つてゐるのである。無氣味なもの外傷的なものゝ最後の印象とも云ふべきものが崇物となつてこびりついてゐるのである。そこで足や靴がとかく崇物となり勝ちなのは、その原因の一半は、匍匐してゐる男兒の下からの好奇心が肱から股の方へと探り上る事情のためであるらしい。毛皮や天鵞絨を好むことは――既に久しく想像され來つた通り――恥毛を瞥見したことからの定着であつて、これは女性に於いて男性的器關のないことを遺憾とするものにはなつかしいものであつたに違ひな

い。洗濯物が非常に屢々崇物に選ばれるのは、それが裸體になることゝ結び付いてゐるからであらう。女になほ男性器があると思つてゐた最終の瞬間と關係があるからであらう。併し私は崇物の決定を何時でも正確に觀破出來ると主張するわけではないのだ。去勢コムプレクスの存在を疑つたり、或は女性器への恐怖が他の根據から來、例へば所謂出産時の外傷の記憶から來ると論じたりする總ての人々に對して、この崇物の研究を是非すゝめたいと思ふ。私にとつては崇物症の研究はなほ今一つの理論上の興があつたのである。

私は近頃、純粹に思辨的な方途で次の如き結論に達したのである。卽ち、神經症と精神症との本質的な區別は、前者に於いては自我が現實に適應するためにエス(一)の一部分を抑壓するに對し、精神症に於いては自我は現實の或る部分から離れるためにエスの內に沒入する、その點に存する。なほ後に私はこの問題に再び觸れて論じておいた。(二)　然るにその後、間もなく私は、自分があまり云ひ過ぎてゐたことを悔ゆるの機會を持つたのである。二人の若者を分析して見て、私は、彼等二人がその敬愛する父に死なれて二年又は三年の間、その事實を認めようとしなかつた、卽ちその事實の前に『明盲症』的であつた、而も彼等は一向精神症になつて行きもしないことを知つたのである。この通りこれ等の場合に於いては現實の或る重要な部分が自我に依つて否認されてゐることは、丁度崇物症者に

於いて女の去勢と云ふ事實が氣に入らぬために否認されてゐるのと同じである。私はまたこれに類した現象が幼兒の生活に於いて決して稀少でないことを感付き始めたのである。さうしてこの誤謬が神經症や精神症の特質にも移つて來てゐると考へざるを得なかつた。併しそこにはなほ考へて見るべき餘地が存してゐる。私の斷定はそれ等と違つてもつと程度の高い心的配置の者に就いてこれを適用して見る必要があつた。成人に對して嚴格に譴責されるやうなことでも、兒童に對しては看過され易いものである。併しなほ研究を進めてゐる内に、この矛盾に對して一つの解釋を下すやうになつた。

註（一）本全集第一卷『夢の註釋』卷末附錄『精神分析學語彙』並びに本全集第七卷『自我とエス』參照。非人稱的な集合的無意識とも云ふべきもの。

（二）„Neurose und Psychose" (1924) その他（原書全集第六卷）參照。

要するに、これ等二人の若者は父の死に對して『明盲症』的となつたが、それはその事實を彼等が全然知覺しないものでないことは、丁度崇物症者等が女性に男性器のないことを必ずしも知覺してゐないのでないのと一般であることが分つて來た。父の死を否認したのは彼等の心的生活に於けるたゞ一つの流れだけであつて、そこにはまたこの事實を全然に認めてゐる他の流れもあつたのだ。願望に忠實なる心的態度と現實に忠實なる心的態度とが並存してゐたのである。私の二人の患者の一人の方

の場合に於いては、このやうな相矛盾する二つの流れの存在が、この扱ひ難い強迫神經症の根柢をなしてゐるのであつた。生活のさまざまな場合に於いて彼はいつも二つの考への間に迷ふのであつた。一つの方は彼の父がまだ生きてゐて彼の活動を妨げてゐると云ふ考へであり、他方は彼が自分を亡父の後繼者として考へる權利があると云ふ考へである。かう云ふわけであるから精神症者の場合に於いては、一方の、現實に適應した方の流れが見えなくなつてゐるのだらうと、私は確に期待することが出來るのである。

さて崇物症の問題に返つてその特徵を考へて見るに、崇物症者の二つに分裂した心的態度には女の去勢を問題にしてゐることとの豐富な、力强い證據の存することを、私は斷ぜざるを得ない。或る精緻巧妙に出來上つた崇物に就いて見ると、崇物の成立に去勢(男性器のないこと)の否認並びに肯定が同時に含まれてゐることが分るのである。現に女のヅロースを崇物とする或る男は、それを男の猿又のやうにして穿いてゐることが出來たのである。このヅロースや猿又は本來性器のみならす、性器の相違をも包み匿してゐたのである。分析して見ると、この男にとつては、このヅロースを猿又に用ふることは、女が去勢されてゐると云ふことのみならず、女が去勢されてはゐないと云ふことをも意味してゐたのである。さうしてその上、男の去勢と云ふことをも假定してゐたのである。何となれば、總

てこれ等のことはヴロース――幼兒がこれの最初の代償として認めるものは彫像に於ける無花果の葉である――の蔭にすつかり匿されてしまふからである。このやうな相反對のものが二重に結付いてゐる崇物は、勿論特別に都合がよい。

これほど精緻巧妙に出來上つてゐない崇物に於いては、二つの流れの分裂は、崇物症者が――現實に於いて或は空想に於いて――自分の崇物に就いて爲すところの事に表れる。症者が崇物を大いに尊重すると云ふだけでは未だ十分でない。多くの場合に於いて症者が崇物の取扱方は、去勢の表現に明かに類似してゐるのである。これが特に顯著に現れるのは父への同一化が強い場合、卽ち父の役割を果す場合である。何となれば、子供は女を去勢するのは父だと思つてゐるからである。崇物の取扱に於ける優しさと敵對感（それ等は去勢の否認並びに容認と平行してゐる）とはさま〴〵な場合に於いて不同な程度で混融してゐる。そのために或る時は一方が顯著となり、別の場合には他方が顯著になる。さう云ふところからして人々は剃髪者の遣方（これはつまり否認せられてゐる去勢を實施しようとの要求が出て來たものだ）を、遠くからではあるが、理解するのだと信じてゐる。この剃髪者の行爲の內には相互に相容れない二つの主張（女は男性器を保持してゐると云ふ考へと、父が女を去勢したと云ふ考へと）が統一されてゐるのである。(二)これの今一つの變化（併し民族心理上崇物に並行す

るもの）は、支那人の習俗卽ち女を纏足し、且つその纏足を崇物として尊重する習俗――の内にこれを認めることが出來る。支那の男は支那の女が去勢に忍從したことを感謝してゐるのだと、我々は考へることが出來よう。

註（一）本全集第六卷『分析藝術論』一七六頁參照。（譯者）

これを要するに、崇物の常態的モデルは男性器であることは、より劣つた機關の常態的モデルが女の實際に小さな男性器、卽ち陰核であるのと同じであると云ふことが許されよう。

ナルチスムス概論

始めて『精神分析年報』„Jahrbuch der Psychoanalyse" VI. Band 1914) にて發表。原書全集第六卷收載。原名は „Zur Einführung des Narzissmus." 本全集第三卷五〇、六一、七三、一〇八頁參照。

第一論文

知力喪失と自己戀慕

ナルチスムス Narzissmus と云ふ術語は臨床用語として生れたもので、一八九九年ネッケ P.Näcke の新造に懸る。では、如何なる態度をナルチスムスと呼ぶかと云ふに、それは或る人が自分の身體を扱ふことと宛も他の人々がその性對象を扱ふのと同樣なるを云ふ。つまり自分の身體を性的の好もしさを以て打眼め、撫でさすり、搔き抱き、遂にこの企てに依つて完全な滿足に達する如き態度を云ふのである。このやうな樣子をとることに依つてナルチスムスは一つの變態としての意義を持ち、當人の性生活の全體がこの內に吸收されてしまつてゐるのである。從つて我々が一切の變態の研究に立向ふ時に抱く期待は、この場合には抱くわけに行かない。

然るにまたこれを分析的に觀察して見ると、このナルチスムス的態度はこれ以外の障害をも具へてゐる多くの人々に於いて發見せられることが分つたのである。サドガーの如きは、同性愛者に於いてこれが見られると云ふ。(一)果してさうであるならば、このナルチスムスと名付けられてゐるリビドー

抑壓はもつと廣い範圍に於いて認められ、凡そ人間の性感はその發達の途上において必ずこの一點を通過しなければならないのではなからうかとの推定を下されるのである。(二)我々はまた神經症患者に對して精神分析を加へることの困難さからしても同じ推定に達するのである。何となれば、彼等がそのやうなナルチスムス的態度をとつてゐるために、彼等が他からの影響を受けることに就いて一つの限界が出來上つて了つてゐるからである。ナルチスムスはこの意味に於いては別に變態ではなくて、自己保存本能の自主的傾向をリビドー方面から補つてこれを完全にしてゐるものである。自己保存本能の自主的傾向ならば、凡そ生きとし生けるものは、或る部分は持つてゐないものはないと云つて當然である。

註（一）本全集第六卷、一七八頁參照。（譯者）

（二）オットー・ランク『ナルチスムス論』Otto Rank, Ein Beitrag zum Narzissmus. Jahrbuch f. psychoanalyt. Forschungen, Bd III,1911,

一體本元的な常態的なナルチスムスは如何なるものであるかを知らうとの切なる慾求が起つたのは、リビドー説に照して早發性癡呆症（Dementia Praecox——Klaeplin の造語。Schizophrenie——Bleuler の造語。）を理解しようとの試みをした時に於いてゞあつた。私が知力喪失症者（Para-

phreniker)と名付けることにしてゐる患者たちは二つの根本的特徴を示してゐる。卽ち誇大妄想的であることゝ外界（人間並びに事物）に對する興味を失つてゐる事とである。外界に興味がないから精神分析の影響をも受付けず、我々の努力に對して癒らなくなつてゐるのである。併し知力喪失者の外界からの轉向には、なほ細かい特徵が認められる。ヒステリー患者や强迫神經症患者たちも、彼等の病氣の達してゐる限りに於いて、現實への關係を放棄してゐる。併し分析して見ると、彼等は他人や事物に對する（性的(エロチック)）結合的關係を少しも放棄してゐない。彼等はなほそのやうな關係を空想中に確保してゐる。つまり彼等は一方に於いては現實的對象に代ふるに空想上の對象を以てするか、或は兩者を混同してゐるし、他方に於いては、彼等の目的に到達するための言動を其の對象にさし向けることを放棄してゐる。ユング Jung が別に區別を立てずに用ゐてゐるリビドーの『內向』Introversion と云ふ語は、右の如きリビドーの狀態を云ひ表はすものとしてのみ妥當する。彼等はそのリビドーを外界の人間や事物から實際に引上げてをり、空想中に於ける他のものを以てこれの代償にしてゐないやうである。代償にしてゐる場合があるにしても、それは第二義的であり、對象にリビドーを導かうと欲する恢復的試みに屬するやうに思はれる。（一）

註（一）Abraham, Die psychosexuellen Differenzen der Hysterie und der Dementia praecox 1908(Klinische

Beiträge zur Psychoanalyse, S. 23 ff.）

そこで問題は起きる。——早發性癡呆症に於いて對象を失つたリビドーは何れの方になるかと。この場合には誇大妄想の方になる。この妄想は、對象から引上げたリビドーがこれになるのだ。外界から引上げられたりビドーは自我に附加せられる。かくて我々がナルチスムスと名付け得る態度は生じ來るのだ。併し誇大妄想それ自身は別に新たに出來たものではなく、それは既に以前に存在してゐた或る狀態を大袈裟にし、明瞭にしたものであることは、我々の承知してゐるところである。そこで我々はかう考へるやうになる。抑々この對象纒綿を內に引込むことに依つて生じたるナルチスムスは第二次的のナルチスムスで、これは多種多樣な影響で仄暗くなつてゐる第一次的のナルチスムスの上に立てられてゐるものであると。

更に私はまた云つておく、私は茲で早發性癡呆症の說明や探索をなさうと試みるものではなく、既に他の所で云つた事をたゞ纒めてナルチスムス全般に就いて明かにしておきたいと思ふのみである。

右はリビドー說の（私の考へでは）正統なる發展であるが、更にこれに第三の要素が加はる。それは我々が幼兒や原始民族の精神生活を觀察し理解して得たところのものである。我々が原始人に於いて發見する種々の特徵を分解して見ると、要するに誇大妄想に歸するものがある。彼等は願望や心理

行爲を買被り、外界に對する技法として『念慮の全能』や、言葉の魔力や、魔術を信じてゐる。これはこの誇大的豫想を結果的に適用したために出て來たものだ。（一）　現代の子供等が外界に對する心的態度も全然これと類似してゐることを我々は期待する。彼等の發達は我等にとつては原始人のほど分りにくゝはない。（二）我々はそこで本來リビドーは自我に纏綿してゐるものであつて云ふことを考へる。さうしてこの自我の纏綿から後に分れて對象に纏綿されるやうになるのだ。併し自我に纏綿してゐるリビドーは根本的に考へれば、依然存續してゐるもので、これと對象纏綿との關係は丁度、原形質的小動物の身體とそれから出て來た假足との關係の如きものである。このやうにして殘つてゐる部分のリビドーは、神經症の症狀から出發した我々の研究には始めの程は見付からなかつた。このリビドーの發射體、對象纏綿が外へ注がれたりまた內へ回收されたりするので、我々は喫驚したのである。我々はまた自我リビドーと對象リビドーとが、大體反對なものであることを知つてゐる。一方が浪費されゝばされるほど、他方は貧弱になつて來る。對象リビドーが極端にまで浪費されてゐる段階を我々は惚込みの狀態と云ふ。この狀態は對象纏綿に對して自分の人格が殆どなくなつてゐるやうになつて見える。さうしてその反對は例へば妄想症者の世界滅亡の空想（或は自己知覺）に於て認められる。（三）　最後に我々は心的エネルギーの區別のためにかう結論する、心的エネルギーは始めはナルチスムスの狀態

に於いて混合してをり、我々の粗末な分析では、一寸區別し兼ねると。また性的エネルギーなるリビドーと自我本能のエネルギーとを區別することは對象纒綿を俟つて始めて可能であると。

註（一）『トーテムとタブー』（本全集第七卷）第三章參照。

（二） S. Ferenczi, Entwicklungsstufen des Wirklichkeitssinnes, Intern. Zschr. f. PsA. I. 1913

（三） このやうな世界滅亡には二つの機制がある。一切のリビドー纒綿が愛する對象に注がれた場合と、一切が自我内に還流した場合と。

私は更に論を進める前に、二つの問題に觸れなければならない。これ等は我々をこの論の困難の中核に導くものである。第一に、今や我々が論じてゐるナルチスムスと我々が既にリビドーの早期狀態として論じたところの自己慾情 Autoerotismus との關係如何に、第二に、抑々自我にリビドーの第一次的纒綿を認めるとするならば、性的リビドーと自我本能の非性的エネルギーとを區別することは一體何のために必要であるのか、單一なる心的エネルギーを根本に想定すれば、自我本能エネルギーと自我リビドー、自我リビドーと對象リビドーとを區別することの一切の困難は除去されるのではないだらうか。第一の質問に對しては私はかう曰はう、自我に比較さるべき單一は始めから個人内に存在してゐるのではない、自我は漸次に發展するものであると。併し自己慾情的本能は獨自發生的である。

新たな心理的行動である。

第二の質問に對して何とかきつぱりとした答辯を與へてくれと云はれては、精神分析者たるものは誰しも明かに不安を感ぜざるを得ないであらう。單なる理論的論議のために事實の觀察を放棄すると云ふは、思ふも厭なことであるが、併し何れにもせよ、我々は説明の試みを逃避してはならない。自我リビドーであるとか、自我本能のエネルギーであるとか云ふ諸概念は、慥に明白に把握することも出來ないし、また內容が十分に豐富でもない。當面の諸關係に就いて思辨的の理論を打樹てるには、就中一つの銳く定義された概念を根本に据えて掛らねばならない。併し私の意見では、それは單に思辨的理論と經驗的解釋の上に立てられた科學との間の相違に過ぎないのである。後者は思辨のやうなスラスラとした、論理上の弱點のない構成を具へてゐないからとて別に羨ましくも思はない。寧ろ霧のやうに漠とした把握し難い根本概念に甘んじ、漸次發達して行く間にさう云つた根本概念を把握し、遂にはまた、他の概念の方へも浸透して行くやうにしたいと考へてゐる。何となれば、これ等の諸觀念は斯學が一切を打樹てゝゐる基礎ではないからである。寧ろ、基礎とは觀察あるのみである。それ等の諸觀念は最下低のものではなく、寧ろ全構成の最上層をなしてゐるものであるから、これは他のもの

を以て置換へたり全然撤廢したりしても何の支障も起りはしない。同じことはまた現代の物理學に於いて起きつゝある。物理學の基礎觀念たる物質、力の中心、引力その他は、嚴密に思考し難き點に於いては精神分析の基礎觀念と同樣である。

自我リビドー、對象リビドーなど諸概念の價値は、それ等が神經症や精神症を觀察して得たところから導き出されたものだと云ふ點に存するのだ。リビドーを自我に固有なるものと對象に屬するものとに分けることは、性本能と自我本能とを區別する最初の假定からして已むを得ざる歸結である。少くとも私としては純粹轉嫁神經症(ヒステリーや强迫)を分析して見てさう云ふ歸結に達せざるを得なかつたのだ。で、私の知つてゐるところはたゞ、かゝる現象を他の方法で解釋しようと思つても總て根本的に駄目であると云ふことだけである。

何とか我々をして決定的な態度をとらしめるやうな本能說が全然見當らない以上は、先づ何とか筋道の立つた假定を立てゝそれが駄目になるか益々よくなるか、とにかくその假定を守り立てゝ見るのは支障のないことであるし、また寧ろ望ましいことだ。とは云へ、私はこの假定が全然曖昧でないと云ふのではないのだ。何故ならば、この場合問題の主眼となり得るのは、對象纏綿に依つて始めてリビドーとなる白紙的の心理的エネルギーであるからだ。併しこの概念的區別は第一に、通俗的に非常

に行亘つてゐる食慾と愛慾との區別に相當するものである。第二に、生物學上から反省して見ても、この區別は都合がいゝのである。個人は實際に於いて自己目的として、また或る連鎖（その連鎖のために個人は自分の意志に反しても、或は意志を沒却して、奉仕する）の一環として、二重の存在を送つてゐるわけである。個人は自分では性慾を自分の諸々の意圖一つであると考へてゐる。然るにまた別の考へ方をして見ると、個人は彼の胚種原形質の一附屬體に過ぎなくて、その原形質のために個人は自分の力を（多少の快樂につられて）捧げてゐるもので、つまり、不死なる（多分）本體のため一時的支持者で、宛も世襲財產の所有者が自分に讓渡せられたものゝ一時的保持者である如きものだとも見られる。性本能と自我本能とを區別することは、たゞ個人のこのやうな二重の機能を反映せしめるものとならう。第三に、人々の考へねばならないことは、總て我々の心理にあり合せてゐるものは、何れの日か有機體の基礎の上に据えて見るやうになると云ふことである。性慾を動かし働かせ個人の生活を存續せしめて種族のそれを營ましめるものは特殊の材料であり化學的の過程であるとするのが眞實であるやうに思はれる。眞實であるやうに思はれるから我々は、特殊の化學的材料に代ふるに特殊の心理的力を以てせんとするのである。

私は凡そ心理的に非ざる他の一切の考へ方を（生物學的の考へ方をも）心理學から引離すべく骨折

つてゐるものであるから、私はこゝで明白に斷つておかうと思ふ、自我本能と性本能とを區別する假定つまりリビドー說は少くとも心理學根據の上に立つもので、本質的には生物學上の支持を受けてゐるものであると。であるから、もし精神分析に依つて本能に關して別な、これよりはもつと具合のよい考へ方が出て來れば、右の說を放棄することは勿論で、それは私として決して矛盾するものではない。が、今までのところではさう云ふ考へ方は出て來てはゐない。そこで、性的エネルギー、即ちリビドーは最も深い根柢、並びに最も遠い所に於いては――心理に於いて普通に働いてゐるエネルギーの變形的所產に過ぎないと云ふことになるのである。併しそんなことを主張して見たところで仕方がないのである。それ等の主張は我々が觀察してゐる諸問題から旣に非常に離れてゐることであり、またその內容も何の知識を供するものでもない。だからこれに反對して見たところで、また贊成して見たところで、始まらないことである。このやうな本源的同一性は我々の分析的興味に關係のないらしいことは、丁度一切人類の本源的親族性が相續裁判上で被相續人との親族關係の證據とならぬのと同じである。我々はこのやうな思辨を續けて見ても何にもならない。我々は何か他の科學が、本能說を何とか決めてくれるまで待つてゐるわけには行かないからである。それよりは、心理的現象を綜合したならば、生物學上のあの根本的の謎に如何なる光を投ずるやうになるであらうかを調べる方が遙かに我

々の目的に協つてゐる。我々とても間違ひをするであらうことは認めるが、併し始めに擇んだ自我本能、性本能の區別の說（我々は轉嫁神經症の分析に依つてこの說を樹てざるを得なくなつたのだ）が矛盾なく有效に發展し、他の病氣（例へば早發性癡呆症の如き）に適用出來るかどうか、どこまでも押して行つて見るのもよからうと思ふのである。

ところが只今最後に擧げた病氣の說明が、既にリビドー說ではつき兼ぬると云ふことが證明されてゐるとしても、それは何でもない事である。つき兼ねると云ふ主張をなすものはユング C. G. Jung である。(一)で、私はこの最後の論議に別に入らなくてもいゝ事なのだが、入らなければならないことになつたのである。私はシュレーベル患者の分析に於いて辿つた道を、その豫想條件について默つて、行き過ぎてしまつた方がよかつたのだから。併しユングの主張は少くとも尙早である。そのために彼が擧げてゐる材料は貧弱である。彼は、私がシュレーベル分析の困難に鑑みてリビドーの概念を廣くしなければならなかつたと云ふ點を、まづ捉へて來たのである。つまり、私がリビドーの性的內容を放棄して、リビドーと心理的『興味』一般とを同一化してゐると云ふのである。フェレンチはユングの著書を徹底的に批評して、この誤てる解決を是正するに必要なる一切を既に語つてゐる。(二)私はたゞフェレンチに同じて、そんなにリビドー說の放棄を聲明した覺えはないと云ふことを繰返し得るのみ

である。

註（一） Wandlungen und Symbole der Libido. Jahrbuch für psa. Forschungen, Bd. IV, 1912, 中村古峽氏の邦譯（世界大思想全集の內）あり。

（二）『國際精神分析雜誌』（一九一三年）

ユングの今一つの論、卽ち現實評價の常態的機能はリビドーが撤回せられた時にのみ喪失すると考へてはならないと云ふのは、論議ではなくて斷定である。これは問題を定めて掛るものである。これは論議を廢し、斷言を豫定するものである。何となれば、果してそれが可能であるか、もし可能とせば如何にして可能であるか、それを正に調べて掛らねばならないからだ。彼はその次の大著（Versuch einer Darstellung der psychoanalytischen Theorie. Jahrbuch, Bd. V. 1913）に於いて、私が永年の間指示して來た解決を看過してゐる。――『同時にこの點を、卽ちフロイドがシュレーバー分析に於いて言及してゐる一點を、眼中に入れねばならない。卽ち性的リビドーが內向すると「自我」に纏綿するやうになる。從つてまた現實喪失の效果が生ずるやうになる。現實喪失の心理をこのやうな方面から說明しようとすることは、實際誘惑的な事である。』併しユングはこの誘惑的な事を別に立入つて試みてはゐない。二三三頁說き進んだところで彼はこの論を放棄してから云つてゐる、この條件的

要素から『結果するものは早發性癡呆症ではなくて禁慾的隱遁者の心理である』と。この不適當な比較から如何にしてこの問題の解決が齎され得ないかと云ふことは『一切の性的興味の跡を撥無せんと努めてゐる』（こゝに云ふ『性的』とは通俗的な意味でのそれで、精神分析的の意味ではない）そのやうな隱遁者がリビドーを病的に抑壓してゐなければならないと云ふわけではないと云ふ言葉に於いて示されてゐる。隱遁者はそのやうな性的興味を人間からは全然引揚げてしまつて神、自然、動物などに對する大袈裟な興味としてそれを昇華してをるのかも知れないのだ。さうして自分のリビドーを自分の空想の上に内向させたり、それを己れの自我に戻らせたりはしないのかも知れない。このやうな比較は、エロティッシュな源泉からの興味と他の興味との區別を始めから無視してゐるやうに思はれる。更にまた我々の忘れてならないと思ふことは、シキツル派の研究はいろ〳〵功績もあるにはあるが、たゞ早發性癡呆症の示すたゞ二つの點（神經症者に於いても健康者に於いても存在することを知られてゐるコムプレクスに就いてと、また彼等の空想形成が民族神話と類似してゐることゝ）だけを説明してゐて、この病氣の機制の他の點に對しては何の説明をも加へることが出來なかつたと云ふ點である。だから、リビドー說は早發性癡呆症の說明に行惱み、從つてまた他の神經症にも妥當せぬと云ふユングの主張は、我等これを彼に返還することが出來るであらう。

第二論文

依憑型と自己戀慕型

ナルチスムスを直接的に研究することには、或る特別の困難があるやうに私には思はれる。ナルチスムス研究の大道は、やはり知力喪失症の分析であらう。轉嫁神經症の研究に依つて我々はリビドー的本能感情を追及することが出來たが、丁度それと同じやうに早發性癡呆症と妄想症の研究に依つて自我心理を洞觀することが出來る。更にまた我々は病者の混亂した大袈裟になつてゐる徵候から常態者の一見單純なる徵候を看取することが出來なければならない。同時に我々には、ナルチスムスを知り得るための方途がなほ他に二三存してゐる。で、私は今それ等を順序に應じて述べたいと思ふ。——つまり、身體的病氣の研究、ヒポコンドリーの研究、兩性間の戀愛生活の考究などである。

身體的病氣がリビドーの配分に及ぼす影響を評量するに就いては、私はフェレンチが會談の際に私に與へた暗示に從ふものである。身體的の苦痛や不快に惱まされてゐる者は、外界の事物に對しては、それが自分の苦惱に關係のない限りは、興味を持たなくなると云ふことは自明の事として、誰しも一

般に認めてゐる。更に仔細に觀察して見ると、さう云ふ人は自分が惱んでゐる間はそのリビドー的關心をその戀愛對象から引揚げ、これを愛することをやめてゐるものであることが分る。これは極めてありふれた事實であるからして、これをリビドー說に照して云ひ表はしたからとて差支へはないであらう。で、我々はかう云はう、——病人は自分のリビドー纏綿を自分の自我に引揚げ、病癒えて後にまたこれを送り出すものであると。ブッシュ Busch は齒痛に惱める詩人に就いてかう云つてゐる。『奥齒の一寸した孔にのみ全靈はかゝづらはつてゐる。』と。(一)リビドーと自我的關心とはこの場合には同じことになつてゐて、兩者を區別することは出來なくなつてゐる。誰しも知つてゐる通り、病人の我儘はこの兩方に當るわけである。我々とても病氣になれば慥に同じやうな態度をとるやうになるのであるから、病人の我儘は自明の事である。如何に首つたけ惚込んだものでも病氣をすると急に冷淡になり相手にせぬやうになることは、當然喜劇の好題目であるから屡々取扱はれてゐる。

註（一）アンドレーエフの『ベント・ビット』と云ふ短篇小說の事を云ふのではないかと思はれる。この作は齒痛に惱むユダヤの市民が救世主磔刑に赴く日にも自分の些細な病氣にのみ關心を持つてゐて、この世界文明史上の一大事實に一向無頓着であつたと云ふ話を書いたものである。(譯者)

病氣の時と同樣に睡氣の催した時もリビドーはナルチスティッシュに自分自身の上に引揚げられてゐ

る。もつと詳しく云へば、睡りたい願望の上に引揚げられてゐる。夢は主我的なものであるが、それはリビドーが既にかう云ふ狀態になつてゐるからであらう。何れの場合も我々には、自我變更の結果としてリビドー配分に變化が生じた實例として（それ以外の何物もないが）認められるのである。

ヒポコンドリー（憂鬱症、恐病症など）は身體的の病氣と同じやうに肉體上の苦痛を示し、リビドー配分の效果に於いては、これと全く一致してゐる。ヒポコンドリー患者は、興味をもリビドーを――殊に後者を判然と――外界對象から引揚げて、それを自分の目下注意を拂つてゐる機關へと集注する。ヒポコンドリーと身體的病氣との區別は今や明かとなつた。――後者に於いては苦痛の感覺が成程と肯かせる變化に依つて基礎づけられてゐるが、前者に於いてはそれがない。併し、ヒポコンドリーも出鱈目ではない、身體的變化もそこに缺けてゐるわけではないと決然我々が云つたとしたならば、神經症的現象に對する我々のこれまでの考へと全然一致するであらう。では、その身體的變化とは如何なるものであらうか。

問題がこゝまで來ると我々は經驗に愬へて行かうと思ふが、それに依ると、ヒポコンドリーのそれに比すべき苦痛な性質の肉體的感覺は、他の神經症にも缺けてはゐない。私は嘗て以前に云つたことがある、ヒポコンドリーは身體的效果を示す第三神經症として神經衰弱や强迫神經症と比ぶべきもの

だと。これを換言して他の諸々の神經症にも多少のヒポコンドリーが混入してゐるのだと云つたとしても、必ずしも過言ではないやうである。これが最も美事に見られるのは強迫神經症に於いてと、強迫神經症に基いたヒステリーとに於いてゞある。さて苦痛感のある、何等かの變り方で變つてゐるが併し普通の意味で病氣になつてゐる身體器關の明かに模範（原型）となつてゐるのは、亢奮狀態に於ける性器關である。その病める器關は、さう云ふ場合には、充血し、膨脹し、濕潤となり、種々な感覺の座となるのである。性的亢奮を精神生活中に送り込む肉體個所の活動を、我々は發情性 Erogeneität とと名付けよう。さうして我々は既に性說に關する論に依つて、或る他の肉體個所（性的帶域）が性器の代表となり得るし、また同樣な働きをなすものであるとの考へ方には慣れてゐるのであるから、我々は更にこゝで一歩を進めることにしてもよからう。發情性なるものは總ての器關の一般的性質として認められると結論することが出來る。從つて或る一定の身體個所に就いて發情性の高潮低落を云々することも許される。諸々の器關に於ける發情性がそのやうに變化する度に、それと併行して自我に於けるリビドー纏綿も變化するものである。そのやうな變化の契機を調べて見たならば、ヒポコンドリーの根柢をなすものや、身體的效果ある病氣と同じ效果をリビドー配分上に及ぼすものが、何であるかの說明がつくであらう。

から云ふ考へを押進めて行くと、我々はヒポコンドリーの問題にのみならず、また他の身體的效果を示す神經症（神經衰弱と强迫神經症）の問題にも逢着することを知るのである。それ故に我々はこゝで停めておかうと思ふ。それは純粹に心理學的研究の意圖内に止まらない。範圍は餘りに廣くなり、生理的の研究の領域内に踏込むことになる。たゞ云つておかうと思ふことは、この事からして、ヒポコンドリーの知力喪失症に對する關係が、丁度肉體的效果を示す他の神經症のヒステリーや强迫神經症に對する關係と同じであるらしく想像される、と云ふことである。つまり、ヒポコンドリーが自我リビドーに依屬することは、他の病氣が對象リビドーに依屬する如くであると想像されると云ふことである。ヒポコンドリーの强迫（恐怖）は自我リビドーから來たものとして、神經症的恐怖と相反一對をなすものであらう。更に、我々は既に、轉嫁神經症に於ける病氣の機制と徵候構成とを、内向から退行への進展を、對象リビドーの阻止に結付けて考へるやうになつてゐる(二)とすれば、我々はまた自我リビドーの阻止と云ふ考へ方をしてもよい事になり、またその考へ方をヒポコンドリーや知力喪失症の現象と關係させることも許される。

註（一）„Über neurotische Erkrankungstypen" 1913 を參照の事。

勿論我々の知識慾はこゝで質問を提出するであらう、何故にそのやうな自我内のリビドー阻止が不

快として感ぜられねばならないのかと。併し只今はたゞから答へるだけで滿足しておきたい、一體に不快なるものはより高き緊張の表現であり、つまり或る量の物的出來事であるが、それがこの場合に(他の場合でも同樣だが)心的性質の不快に變化してゐるのであると。とは云へ、不快が增大するためにはかの物的出來事の絶對的の大きさだけで決定されると云ふわけには行かない、寧ろこの絶對的大きさの或る機能に依るのである。こゝからして我々は、次の質問を敢へて提出することが出來よう、一體精神生活がナルチスムスの限界を越えてリビドーを對象に纏綿させる必要は何處から生じて來るのであるかと。我々の考へ方から生じ來る答案はまたからであらう、リビドーの自我纏綿が或る量を越すと、この必要が生ずるのであると。主我的傾向が非常に强いと病氣になることの防ぎになるが、併し結局は病氣にならないために愛し始るやうになる。また、拒否の結果愛し得ない場合には、惱まなければならないのだ。ハイネ H.Heine は丁度から云ふ風な考へ方で、世界創造の心理的起源を說いてゐる。――

『病氣こそは創造的慾求全體の
窮極の根據であつたのだ

造りつゝ私は癒えることが出來、
造りつゝ私は健かとなつた。』

"Krankheit ist wohl der letzte Grund
Des ganzen Schöpfungsdrang gewesen;
Erschaffend konnte ich genesen,
Erschaffend wurde ich gesund"

我々は我々の精神裝置の中にとりわけ一つの手段を認めたのである。それがなければ苦しく感じたり病的な效果を示したりするであらうやうな感覺（亢奮）を支配し得る力の授けられてゐる手段を認識したのである。感覺を心理的に加工改變する事に依つて内的に發動してゐる感覺としては異常な結果になつて來るわけである。元來この感覺は直接的に外部に發出することは出來ないし、またこの瞬間に於いてはこれはそれとして望ましからぬことである。併しそのやうな内的の加工改變にとつては、それが現實にある對象に就いて起らうと、空想上の對象に就いて起らうと、どちらでもよいのである。

その區別は後になつて始めて現れて來る。即ち、非現實的な對象にリビドーを向けるためにリビドーの阻止が生じた場合にである。これと似たやうな內的の加工改變が、自我內に引揚げられたリビドーに加へられるのは、知力喪失症者に於ける誇大妄想の場合である。恐らく誇大妄想がこれに失敗し後に始めて、自我內に於けるリビドー阻止は病的となり、恢復の過程を辿るやうになるが、この過程が我々にはやはり病氣のやうに見えるのである。

私はこゝで知力喪失症の機制の中になほ二三步踏み込んで見る。さうして私にまで既に今日では一考の價値ありと思はれる考へ方を纏めておく。知力喪失症を轉嫁神經症から區別するものは、失敗に依つて自由になつたリビドーが空想中の對象に纏綿せずして自我に逆戾りする事に存する。そこで、誇大妄想とはこのやうな多量のリビドーを心理的に支配してゐると云ふことを意味してゐる。從つてまた、轉嫁神經症に於いて空想構成に內向してゐることに相當してゐる。知力喪失症のヒポコンドリー(これは轉嫁神經症の恐怖と同じである)は右のやうな心理的行動の失敗に相當してゐる。このやうな恐怖は更にそれ以上の心理的加工改變に依つて、即ち轉換、反動構成、防禦構成(恐怖症)などに依つて解消せしめ得る事を我々は承知してゐる。知力喪失症に於いてこれと符合する過程は恢復への試みである。この試みあるためにこの病氣には驚くべき現象が生ずるわけである。知力喪失症は、大

抵とは云はぬが屢々、對象からリビドーを單に部分的に引離すものであるから、この病氣の外見には三群の現象が區別されるのである。（第一）は保存されてゐる狀態や神經症の現象（殘存現象）、（第二）は病的過程の現象（リビドーをその對象から引離すこと、それから誇大妄想、ヒポコンドリー、感情の障害、一切の退行）、（第三）は恢復の現象で、これに於いてリビドーはヒステリー（早發性癡呆症、本來的の知力喪失症）又は强迫神經症（妄想症(パラノイア)）の遣方に從つて再び對象に纏綿される。この再度新たに纏綿されるリビドーは、第一次の纏綿とは別の條件の下に、別の水準から起つて來るのである。このやうにして起つて來る轉嫁神經症と、自我は常態であるのに同じやうな構成が生ずる場合とを比較してその相違を考へて見ると、我々の精神裝置の構造如何を最も深く洞觀することが出來るに違ひない。

×

ナルチスムスを研究する第三の途は、人間の戀愛生活が男女に依つていろ〳〵に違つてゐるのを觀察するにある。我々は對象リビドーを觀察してゐて始めて自我リビドーを氣付くが、丁度それと同じ

やうに、我々はまた子供（並びに若い者）の對象選擇に於いて、子供がその性對象を擇ぶのは彼が嘗ての經驗に由つてゐる事を始めて氣付いたのである。幼兒時代の自己慾情的な性滿足は結局生命に重要な自己保存に奉仕する機能と關係して經驗される。性本能は始めは自我本能の滿足に依憑し、後になつて始めて自我本能から獨立する。ところでその依憑は何に依つて分るかと云ふに、子供を育くみ、世話し、守護した人々が、つまりまづ母親またはその代理の者が、最初の性對象となると云ふ點に於いてゞある。この型やこのやうな對象選擇の源泉を我々は依憑型 Anlehnungstypus（一）と名付けることが出來るが、これとは別に、我々は精神分析的研究をしてゐる内に、思ひがけなく、第二の型を發見するやうになつたのである。そのリビドーが發達の途上に於いて一つの障害を受けた人々（變態者や同性愛者）は、後年になつてその戀愛對象を母の原型に從つて擇ばず、自分自身の俤に從つて擇ぶと云ふことを、我々は特に明白に發見したのである。彼等は明かに自分自身を戀愛對象として擇ぶのであつて、ナルチスティッシュ（自己戀慕的）と呼ばるべき型の對象選擇をなすのである。我々がナルチスムスを假定せざるを得なくなつた最も強い動機は、この觀察の内に認められるのである。

註（一）本全集第三卷『社會・宗教・文明』の六四頁の註（一）を參照ありたし。（譯者）

とは云へ、人間は截然二群に分立し、或る人々は依憑型に基いて對象を選擇し、他はナルチスス型

に基いて選ぶと我々は結論するものではなく、總ての人間に對象選擇の二途が開かれてゐて、その際何れか一方が特に好まれると云ふのみである。人間は本來二つの性對象を（自分自身と世話してくれた女と）持つてゐると我々は云ふ。さうしてそこに一切の人間の第一次的ナルチスムスを豫想するのである。そのナルチスムスが遂にその對象選擇に於いて優勢を示すやうになることが出來るのである。

そこで、男女を比較して見ると、そこに對象選擇の型に對する關係に於いて根本的の（常に定まつてと云ふわけではないが）差違の存することが分るのである。依憑型に基く完全な對象愛は本來、男子の特質である。男の對象愛には驚くほどな性的買被りが表れてゐる。この買被りはどうやら子供に本來なナルチスムスから發源してゐるもので、從つて性對象に對してこのナルチスムスを轉嫁することからこの買被りが出て來るのである。このやうな性的買被りのあるところから獨特の、神經症的强迫になるのではないかと思はれるほどな惚込み狀態が生ずるのである。

かくてこの惚込み狀態からリビドーが自我に貧弱となり對象に豐富になると云ふ結果になつて來るのである。女に於いて最も屡々見られる（最も純眞であると思はれる）型に於いては、發展の形態はこれとは違ふ。思春期に至るまで潛んでゐた女性器が成熟して春情が發達するにつれて、本來のナルチスムスが嵩じて來るやうである。これが嵩じて來ると、普通の性的買被りの伴ふ對象愛には、都合

が悪くなつて來る。特に娘十八番茶も出花と云ふ頃になると、女は自己滿足（相手は要らぬ）と云ふところを示すやうになる。そのために女は、對象を自由に選ぶことが社會的に面倒になつてゐてもそんなに困らないわけである。さう云ふ女は嚴密に云へばたゞ自分だけを愛してゐるので、その愛の激しさは丁度彼女を愛する男の激しさと同じやうである。彼女はまた人を愛さうとは要求しないで愛されることを要求するのである。さうしてこの條件を滿して呉れる男の氣に入らうとするのである。このやうな女の型の意義は、人間の戀愛生活のために甚だ高く評價すべきものである。さう云ふ女は男に對して最大の魅惑である。さう云ふ女は普通に最も美しいから美的根據から魅惑があるばかりでなく、また興味ある心理學的の觀念からもさうである。つまりかう云ふ事は判然認識されるだらうと思ふ、自分自身のナルチスムスをすつかり外へ出して了つて對象愛を探ねてゐるが如き人々にとつては他人のナルチスムスは大きな魅力となるのである。子供の魅力も大部分は彼等がそのナルチスムスを保有し、自己滿足と、傍若無人振りを發揮してゐるに存する。同樣に、我々の事など眼中においてゐないやうに見える或る種の動物（例へば猫や大きな肉食獸などの）魅力もさうである。

　更にまた、大犯罪者や諧謔家（フモリスト）も詩的表現の中で我々の興味を牽くが、それは彼等がナルチスス的な態度に依つて、彼等の自我を弱小に見せる一切のものを遠ざけることを心得てゐるからである。つま

り、これは彼等が或る淨福な心的狀態を、襲ひ難きリビドーの位地を（我々自身は既に放棄してゐるのに）彼等が保持してゐるから、これを羨望してゐるかのやうである。ナルチスス的な女の大きな魅力には併し、その裏面がなくはない。惚込んでゐる男が滿足を得ないこと、女の愛を疑ふこと、女の本質が謎であるのを嘆ずることなどの大部分は、この對象選擇型のこの齟齬に、その根柢が存するのである。

女の戀愛生活をこのやうに私は說明して來たが、そこに女を引下げようとする傾向などは全然ないと云ふ事を斷つておくのも、恐らく餘計なことであるまい。私は科學者として固より傾向などの一般にあらうわけはないが、それとは別にしても、種々な方向に應じてこのやうに發達してゐる事は、非常に複雜な生物科學的關係に於いて諸々の機能の相違してゐる事に相應してゐるものであることを私は知つてゐる。更に私はまた、世に男子型に從つて戀愛し、さうしてまたその型に屬する性的買被りを示す女も多數に存することを認めるに吝なるものではない。

またナルチスス的で、男に對していつまでも冷淡である女にとつても、彼女が完全な對象愛をなすやうになるべき一つの道が開かれてゐる。彼女が生んだ子供に於いて、自分の肉體の一部分が別個の對象の如くなつて已れに對立する。そこでその對象に向つて、今やナルチスムス全體から完全な對象

愛を送り得るやうになる。なほまた別の女たちは（子供に於いて再發見したる第二次的の）ナルチスムスから對象愛へと發展するために、子供を持つに及ばないのがある。彼女等は思春期以前に自ら男のやうに感じて、その部分をずつと男子的に發達させてゐる。この男子的なものが年頃になつて女としての成熟が進むにつれて打破せられると、一つの理想的男子を憧憬するやうになる。この理想的男子とは實に、嘗て彼女自身であつたところの男兒的本質の連續であるのだ。

對象選擇への途を簡單に大觀することに依つて、右の暗示的に述べて來た論を結ぶことにする。人々の戀愛は――

（一）自己戀慕型に基くもの、

（a）現在の自分自身、

（b）過去の自分自身、

（c）將來の自分自身、

（d）自分自身の一部分であつた人、

（二）依憑型に基くもの、

（a）育んでくれた女、

（b） 保護してくれた男

並びに彼等と前後して入代つた代理者。第一の型に（c）を挿入したのは如何なる理由からか、それはこの論の終りに說く。

男子同性愛に於ける自己戀愛型の對象選擇の意義は、なほ他の關係に於いて論ずべきである。

子供には第一次的のナルチスムスがあるとの假定は我々のリビドー說の出發點の一つであるが、このナルチスムスは直接の觀察に依つて把握することが困難であるばかりでなく、また同樣に、他の點からの推論に依つて確證することも容易でない。優しい兩親が子供に對する心的態度を仔細に觀察するならば、そこに彼等自身の久しく放棄されてゐたナルチスムスの復活と再生とを認識せざるを得ない。買被りと云ふことは對象選擇に於けるナルチスムス的の特色として既に我々が論じたところであるが、この買被りの徵象が彼等兩親の子供への感情の內に認められることは、萬人の知るところである。そこで子供に一切の完全さを、正氣で觀察すればとても考へられもせぬやうな完全さを、歸するやうになり、一切の缺陷を看過し忘却する（その忘却の中には、子供の性感を否定することも含まれてゐる）やうになる。ところがまたそこには一切の文明的成果や社會的約束（それ等を承認することは彼等のナルチスムスに拘らず已むを得なかつた）を子供等には及ぼさないやうにし、久しく放棄し

てゐた特權を子供に於いて復活させようとの傾向も存するのである。子供はその親たちよりは優遇されなければならない。人生を支配してゐると親の認めてゐる種々な必然事にも、子供は屈從すべきでない。病氣、死、享樂放棄、自己意志の制限などは子供に及んではならない。自然や社會の法則は子供の前に堰止められねばならない。子供こそ萬有の中點であり核心でなければならない。ヽヽヽ赤ん坊陛下は、つまり我々自身の嘗ての自己空想であつたのだ。兩親が實現し得なかつた願望の夢を子供は充足しなければならない。父の代に英雄偉人になつて貰はねばならない。母には及ばなかつたが、せめて娘は王子樣のやうな人に嫁いで貰はねばならない。ナルチスムス的組織の最弱點は自我の不滅性であつて、これは現實から最も辛辣に攻擊の矢を向けられるところであるから、この矢を遁れるに最も確かな道は子供へ逃込むことである。兩親の切々たる、併し根柢に於いては甚だ幼兒的な愛情は、彼等のナルチスムスの再生に外ならないのだ。さうしてそのナルチスムスは變じて對象愛となることに依つて、それの嘗ての日の本質を明かに呈露してゐるのである。

第三論文

理想我と自己戀慕

子供の本來のナルチスムスが如何なる障害を受けるか、また如何なる反動をそのナルチスムスがそれ等障害に對して示すか、また如何なる途にその時そのナルチスムスが追遣られるか、總てそれ等は重大な研究題材でなほ調査を必要とするから、只今はこれを取上げない事にする。これ等題材の內最も重要なる部分は『去勢コムプレクス』(男兒に於いては男性器恐怖、女兒に於いては男性器嫉妬)としてこれを特に取出し、幼兒時代の性的憶病の影響と關係させて取扱ふことが出來る。このコムプレクス以外では我々は、精神分析的研究に依つて、リビドー的本能が自我本能から離れてこれと反對の位置に立つた場合に如何成り行くかを辿ることが出來たが、今この去勢コムプレクスの分野に於いては、我々は分析法に依つて一つの時期と一つの心的境地の存在を推論することが許される。その時期と境地とに於いては、二種の本能はナルチスス的な興味として分離出來ない混淆となつて働いてゐる。アードラー A.Adler はこの關係から彼の『男性的抗議』„männlicher Protest" を作り出し、これを

彼は性格構成及び神經症構成の殆ど唯一の本能力として祀り上げ、而も彼はこれをナルチスス的な、(從つてまたリビドー的な)努力に基くとせず、社會的價値判斷に基くとしたのである。精神分析的研究は極始めから『男性的抗議』の存在と意義とを認めてゐたのである。併しアードラーとは反對に、その性質に於いてはナルチスス的であり、去勢恐怖から生じたものと見做してゐるのである。この抗議は性格構成に屬し、その構成の起源にこの抗議は他の多くの諸要素と並んで與つてゐるに過ぎないのであるから、これを以て神經症の問題を説明しようと云ふのは全然無理である。アードラーはたゞこの問題が自我の興味に奉仕する仕方をのみ考慮に入れ、その他には何の注意も拂はうとしない。去勢コムプレクスなるものが神經症の治癒に對する抵抗の內に力強く出て來るには來るが、併しこの小さな基礎だけで神經症が起るものとは斷じ難いと私は思ふ。最後に私はまた、或る神經症の場合には『男性的抗議』(又は我々の意味では去勢コムプレクス)が何等病的役割を果さず、或は全然現れても來ないものであることを知つてゐる。

常態的の成人を觀察して見ると、彼にも嘗て誇大妄想のあつたのが克服されてゐること、我々が依つて以て彼の幼兒的ナルチスムスを結論したところの心理的特質の消失してゐることが、分るのである。彼の自我リビードはどうなつたのか。自我リビードーの全量は對象リビドーとなつて出て行つて了

つたと考へるべきであるか。さう云ふことは我々の議論の全體の特徴から云つて慥にあり得べきでない。併し我々はまた、抑壓の心理からして、この問題に對してまた一つの違つた答辯を暗示することが出來る。

我々の旣に知つてゐる通り、リビドー的本能感情なるものは、それが個人の文明的、倫理的觀念との間に葛籐を起すと、病的抑壓を被るものである。かう云つたからとて、當人がこのやうな觀念の存在を單に知的に知つてゐると云ふ意味ではない。寧ろ、當人がその存在のために一つの標準が與へられてゐると云ふ風に認め、その標準に照して行動すると云ふ意味である。抑壓は旣に我々の言つた通り、自我から來る。もつと詳細に云ふならば、自我の自己尊重から來る。同じ印象、體驗、衝動、願望でも、或る人はこれに耽り、意識的に手加減をするが、他の人々の奮然としてこれを拒けるか、或はそれが意識に入る前に直ちに壓潰されてしまふ。これ等兩者の差違は併し、――この差違に抑壓の條件が見える――リビドー說で說明されるやうな言葉で言ひ表はすことが出來る。卽ち、或る者は、已れの內に一つの理想を打樹て、それと實際の自分とを混同してゐるが、他の者にとつてはそのやうな理想構成は何でもない。この理想構成は自我の側から云へば、抑壓の條件であらう。

ところでこの理想我に關係の深いのは、幼兒時代に實際の自我を享樂した自己愛である。ナルチス

ムスはこの新しい理想我に轉位せられるやうである。この理想我は幼兒的自我と同じやうに一切の價値ある完全無缺さを自ら保有してゐると考へてゐる。人間はこの場合にも（一體リビドーの分野に於いてはいつもさうであるが）嘗て享樂した滿足を放棄し得ないものであることを證する。彼はその幼兒時代のナルチスムス的完全無缺を諦めようとはしないが、段々成長するにつれて自他の警告や批評に依つてこの完全無缺が怪しくなつて來ると、彼はこれを理想我の新しい形で再び求めようとするやうになる。彼が理想として自分の前に投出したところのものは、彼の幼兒時代の失はれたるナルチスムス（それこそは彼自身の理想であつた）の代償であるのだ。

この理想構成と昇華との關係を研究することは容易である。昇華は對象リビドーに於ける過程であつて、本能が性的滿足から離れた、一つの他の目的に向つて行くことである。そこで重要なのは性的なことから離脱することにある。理想化は對象に就いての過程である。この過程のために對象はその性質を變へることなしに偉大となり、心理的に高められるのである。理想化は對象リビドーの分野に於いて可能なる如く、また自我リビドーの分野に於いても可能である。で、例へば對象の性的買被りはこれの理想化である。このやうに昇華に依つて本能に關する何事かの説明がつき、理想化に依つて對象に關する何事かの說明がつくとすれば、これ等兩者は相互に區別されてゐるわけである。

理想我構成は、明瞭な理解と云ふ見地からは甚だ遺憾なことだが、本能昇華と屢々混同される。自分のナルチスムスと高い理想我の尊重とを取違へてゐる人は、そのために自分のリビドー的本能を昇華させ得ないとは限らぬ。理想我には昇華が必要ではあるが、併し昇華が必ず伴ふとは限らぬ。昇華は特殊の過程であつて、これを誘發し得るものは理想であらうし、これを完成する事は全然理想の刺戟に俟つものである。神經症患者と云ふものは、その抱く理想我とそのリビドー的本能の昇華程度との間の緊張差が最も大きい人々なのである。で、理想家に向つて君のリビドーはその目的を果されないでゐると云つて聞かせてもなか〳〵納得しないが、もつと單純な、自分の要求に滿足してゐる人間に云つて聞かせると容易に納得する。また理想構成と昇華とが神經症の源因に對する關係は甚だ區々である。理想構成があるところには自然、自我の要求も增して來ることは、我々の常に聞及んでゐる通りである。また理想構成は抑壓には最も都合がよい。抑壓なしに自我の要求を充すには、昇華がよい遁道である。

理想我に依つて、ナルチスス的な滿足が慥に得られると云ふことを知らしめる如き特殊の心的個所を我々が發見するやうになつても驚くことはない。またこの意圖の下に實際の（理想我ならぬ）自我は不斷に監視され、理想に照して評量されてゐる。もしそのやうな個所が存在してゐるとすれば、それ

は慥に我々が既に發見してゐるものに相違ない。我々は實を知つてたゞその名を知らないのだ。卽ち、所謂良心（Gewissen）こそはこの特質に外ならないと云つてよからう。この個所を認めると、我々は、妄想症の徵候の中に判然と現れるところの、（恐らくまた單獨の病として或は轉嫁神經症の中にも散見するところの）、所謂注意狂、或はもつと正しく云へば、觀察されてゐるとの妄想を、理解することが出來る。さう云ふ患者は、人々が總て自分の考へてゐることを知つてゐるとか、自分の行動に注意してゐるとか、眺めてゐるとか云つて嘆ずる。彼等にこの個所の機能に就いて語り聽かせるものは或る聲で、その聲は三人稱の形で話すのがその特稱である。（『おや、彼女はまたあんなことを考へてゐる。』『さア、彼は出て行くよ。』）彼等の嘆は當然である、それは本當の事を云つてゐるのだ。總て我々の意圖を觀察し知悉し批評してゐるそのやうな力は、實際に存在してゐるのだ。さうして我々常態者の生活にさへも存在してゐるのだ。觀察狂はそのやうな力を退行した形で表はしてゐる。と共に、その力の起源と、何故に患者がその力に對して反抗するかの根據とを、示してゐる。

理想我（その監視者として良心がある）構成を促すものはつまり、例の聲に代表せられてゐる兩親の批判的感化から發してゐる。その兩親へ持つて行つて、時の進むまゝに、指導者、敎師、並びに數知れぬ茫漠たる群衆としての環境の一切の他人（同時代者、同鄕人、仲間、輿論）が附加はる。

本質的に同性愛的なリビドーの多量がこのやうに、ナルチスス的理想我の構成に寄せられて、この理想我の支持に於いて遁路と滿足とを得るのである。良心なるものは、その根柢に於いてはまづ第一に兩親的批判の體現であり、次いではまた社會の批判の體現でもある。(一)これは丁度、抑壓傾向がまづ外的禁止や支障から始まるのと似た過程である。例の聲や、茫漠たる大衆は今や病氣のために前景へ押出されて來る。かくして良心發達史は退行的に再現せられる。ところでこの檢閲廳 Zensorische Instanz に對する反逆は何處から來るかと云ふに、それは當人が(病氣の根本特質に應じて)兩親的影響を始めとし總てこれ等の影響から遁れたいと思ひ、同性愛的リビドーをそれ等の影響から引揚げるところからである。その時彼の良心は兩親的起源に退行して、外部からの抗議として彼自身に敵對して來る。

註 (一)本全集第三卷、三二四頁以下參照。(譯者)

妄想症者の嘆きの內にもまた、良心の自己批判が根柢に於いて、その批判の基礎たる自己觀察と一致するものであることが見えてゐる。この心的活動は良心の機能を引受けるもので、從つてまた內面探究の役目を果すものであつて、これに依つて哲學はその思索の材料を供せられる。この事は妄想症(パラノイア)の特徵たる思辨的體系を樹立しようとの衝動と多少の關係があるに相違ない。(一)

註（一）　これは私の單なる想像であるが、この觀察廳の發達し強化するために、後年になつて記憶が發生し、また無意識過程とは云へないが、時間的契機の發生もそこに含まれるやうになるのであらう。

この批判的觀察的の——良心となり哲學的內省となつてゐるところの——個所（廳）の活動の徵象を、なほ他の分野に於いて認識することが出來るならば、それは我々にとつて慥に非常に意義のあることであらう。私はこゝでジルベラー H.Silberer が『機能的現象』,,funktionelle Phänomen“ と名付けたことを引合に出さう。これは夢の學說への重要なる補說の一つであつて、その價値は否定すべくもない。人々も知る如くジルベラーは、人々の睡眠と覺醒との中間狀態に於いて思想が視覺的影像に變化するのを直接的に觀察することが出來る、併しそのやうな事情の下に屢々現れるのは思想內容ではなくして眠りと鬪ひつゝある當人の心理狀態（何々を直ぐにしようとしてゐるとか、疲勞してゐるとかの）であると云つてゐる。同樣に彼は、夢の大抵の終結や夢の內容中の區分は睡眠と覺醒を意味するに外ならぬことを明かにしてゐる。このやうにして彼は、愛の構成に於いて（妄想症的觀察狂の意味に於ける）自己觀察の部分の存することを證明したのである。この部分は何時も如何なる夢にもあると云ふわけではない。私がこれを見落したのは、どうやら私自身の夢に於いてはさう云ふ部分が重大な役割を果してゐないからであらう。哲學的才分のある、內省的習慣のある人々はこの部分を

判然と認めることであらう。

我々は想ひ出すが、夢の構成は夢の思想に歪みを强ふる檢閲の支配下に於いて生ずるものであることを我々は發見したのであつた。この檢閲は併し、何等特殊の力であるとは我々は考へないのだ。このやうな名稱を擇んだのは、寧ろ自我を支配し抑壓する傾向の或る方面が夢の思想に向けられてゐる、その方面を表はすものに外ならぬ。深く自我の構造中に探り入るならば我々は、理想我及び良心の動的表現の中に於いてまた夢の檢閲を認めるやうになる。もしこの檢閲が睡眠中にもまた多少働くと、その活動の豫想たる自己觀察と自己批判とが、『今は彼は睡くて考へも出來ない程だ……』、『彼は今や眼が醒める……』などゝ云ふ如き內容を夢の內容中に寄與するやうになることを我々は理解するであらう。(一)

註(一) この檢閲的機能を自我の爾餘の部分から區別することが、哲學に於ける意識と自己意識との區別の根柢となり得るかどうか、私は今こゝでこれを斷定することは出來ない。

こゝからして我々は、常態者及び神經症者に於ける自己感情の討議に入ることが出來る。

自己感情とは私にはまづ自我誇大の表現であると思はれる。その自我誇大が如何なる要素から成つてゐるかは一寸考へられない。人間の所有し獲得した一切のもの、原始的な全能感情の殘物にして經

驗に依つて確められた一切のもの、それ等がこの自己感情を高めるに與つて力がある。

我々は性本能と自我本能とを區別するが、それをこゝに持つて來ると自己感情なるものがナルチスス的リビドーに特に依屬するものであることを認めざるを得ない。我々はこれを認めるに就いて、二つの根本的事實に依憑するのである。その一つは、知力喪失症者に於いては自己感情が高まり、轉嫁神經症者に於いてはそれが低下すると云ふ事であり、今一つは戀愛生活に於いて愛せられてゐないことは自己感情を低め、愛せられてゐることはこれを高めると云ふことである。我々が既に云つた通り、愛せられてゐることはナルチスス的對象選擇に於いて目的を果し且つ滿足を得てゐることである。

更にまた我々が容易に觀察し得るのは、對象のリビドー纏綿は自己感情を高めないと云ふことである。己れの愛する對象に依屬してゐることは、寧ろ我々の感情を引下げる。惚込んでゐる者は謙虛になる。(一)人を戀する者は己れのナルチスムスの一部分を放擲してゐる。相手から愛されるやうになつて始めてその部分の代償を得るやうになる。總てこれ等の諸點に於いて、自己感情は戀愛生活に於けるナルチスムス的部分と關係してゐるやうである。

註(一)『謙虛』demütig の『虛』の字がこの場合面白くないであらうか。ナルチスス的リビドーの出拂つて內『虛しく』なれる狀態を形容せるものであるとすれば、リビドー的見解は寧ろ東西人類に甚だ古くして

自然なる考へ方といはなければなるまい。（譯者）

精神的、又は肉體的障害あるために、自分は戀愛することが出來ないとの、卽ち自分は不能であると知覺するならば、その人の自己感情は非常に低下する。轉嫁神經症患者に會ふと必ず自分は劣等感Minderwertigkeitsgefühlを持つてゐると告白するが、この感情の源泉の一つは、私の見るところでは、この不能にある。併しこの感情の主要源泉は自我貧窮である。この貧窮は異常に多量のリビドー纏綿が自我から奪はれて了ふために生ずるので、つまり性的な力を自由に振ふことが出來なくなつてゐることのために自我が被る障害が主要源泉である。

アードラーは、人々が自分自身の器關の劣等を知れば、能力の精神に刺戟を與へて超過補償 Über-kompensation として一層の能力が出て來ると論じてゐるのは正しい。併し、一切のよき行爲が、アードラーの云ふやうに、本來的な器關の劣等から生ずると言はうとするならば、全然誇張であらう。畫家は總て眼の惡い人とは限らないし、總ての雄辯家が元は吃音者であつたとは限らない。優秀な器關を具へた人にして始めてなし遂げ得た立派な事業の實例も豐富にある。神經症の病源に對しては、身體的缺陷や發育不完全はあまり重大な役割を果さない。それは丁度實際の知覺材料が夢の構成に對して大した役割を果さないのとまづ似てゐる。神經症はこれを口實として利用すること、宛も他の一

切の要素を利用するのと同様である。或る神經症の婦人患者が自分は美人でなく、容姿も惡く、魅力もなく、從つて何人も愛してくれないから神經症になつたと信じてゐるのを成程と考へて見ても、又別の神經症者を見ると自分の間違が分つて來る。その患者は相當蠱惑的でもあるし、また本人も普通の女よりは欲望があるらしいのに、神經症であり、頑强に性を拒否してゐる。大抵のヒステリーの女はどちらかと云ふと女としては魅力のある、美人の方に多いのである。然るに他方、下層社會には醜女、畸形、不具などは多いのに、その割合に神經症は彼等の間に多くはないのである。

自己感情とエロティック（リビドー的對象纏綿）との關係は、次の公式で云ひ表はすことが出來る。——そこに二つの場合を區別しなければならない、戀愛纏綿を自我が正當として ichgerecht ゐるか、或はその反對にそれを抑壓してゐるかどうか。この內第一の場合（リビドーの採る道を自我がよしとする場合）には、戀愛は自我の他の一切の活動と同じやうに價値ありとせられる。戀愛それ自身は、憧憬、諦念と同じやうに、自己感情を引下げ、戀せられること、戀を容れられること、愛する對象を手に入れることは、これを再び引上げる。リビドーが抑壓されてゐる場合には、戀愛纏綿は自我の甚だしい減小として感ぜられる。戀愛滿足は不可能であり、自我が再び豐かになるのはたゞリビドーを對象から回收することに依つてのみ可能となる。對象リビドーの自我への復歸はやがてナルチスムス

への變化となり、これは云はゞ一つの幸福な戀愛であることを示す。他方に於いてまた、一つの眞に幸福なる戀愛は、對象リビドーと自我リビドーとが相互に區別されない舊狀に一致してゐる。

この問題は重要で、且つ明瞭に把握し難いから、なほ二三の言葉を雜然と附加へておかう。

自我の發達とは始めの（幼兒的）ナルチスムスを離脫することである。さうして結局、これを再び獲得するために激しい努力を拂ふのである。如何にしてこの離脫が起るかと云ふに、それはリビドーを外部から强ひられた理想我に轉位すること、卽ちこの理想の實現に依る滿足に依つてゞある。同時に自我はリビドーを外に送り出してこれを對象に纏綿させてゐるのである。これ等の纏綿や理想我構成の結果として自我は貧窮を告げるが、また對象的滿足や理想實現に依つて再び豐富になつて來る。

自己感情の或る部分は第一次的（始めからあるの）で、幼兒的ナルチスムスの殘りであるが、他の部分は經驗に依つて確證せられた全能（理想我の實現）から來てをり、第三の部分は對象リビドーの滿足から來てゐる。

理想我が對象に就いてリビドーの滿足を得ることは困難になつてゐる事情がある。それは理想我がその檢閱のために、或る部分のリビドーを許されなくなつてゐるためである。さう云ふ理想が生じて

ゐない者に於いては、右のやうな性的部分は變らずに、變態の形となつて人格中に這入り込んで來る。幼兒時代に於ける如く（この時代には性的努力に就いてもさうであつたが）再び自分を自分の理想とすることは、人々がその幸福として到達せんと欲するところである。

惚込みとは自我リビドーを對象上に汎濫せしめることである。惚込みは抑壓を廢絶し變態を復活せしめる力がある。性對象は性理想にまで持上げられる。對象型又は依憑型に於いては、惚込みは幼兒的戀愛條件の充足に基くのであるから、この戀愛條件を滿たすものが理想化せられると云ふことが出來る。

性的理想（理想の愛人）は理想我に對して興味ある補助關係を持ち得るものである。ナルチスムス的滿足が現實の支障に遭遇すると、性的理想は代償滿足に利用されることがある。その時人々はナルチスムス的對象選擇の型に從つて、自分が嘗てそれであつて今や放擲したもの或は自分が嘗て持つたこともないものを愛するやうになる。（二五六頁のc型を參照の事。）そこに擧げた公式と平行する公式はかうである。――自我に理想として缺けてゐる長所を具へてゐるものが愛せられる。かう云ふ間に合はせ的の場合は神經症患者に對して特別の意味がある。彼等は過大なる對象纏綿のために、その自我の貧窮を來してゐる。さうしてそのために彼等はその理想我を實現し得ない狀態にある。そこで彼等は對

象に對するリビードの浪費からナルチスムスへの復歸を試みるために、ナルチスムス型に從つて一つの性的理想（彼が到底到達し得ないやうな長所を具へた性的理想）を選擇するのである。これは戀愛に依る治癒である。この方を彼等は分析的治癒よりは好むのである。實際、彼等はこれ以外の治療の機制を信じ得ない。この種の期待を治療に掛け、やがてこれを醫者と云ふ人間に掛けるやうになる。併し彼等の抑壓があまりに廣汎であるために、彼等は戀愛をなし得ないから、勿論この治癒の方法は駄目である。取扱ひに依つて患者を或る程度までよくした時に、我々はそこに豫期せざる結果を見ることが屡々である。卽ち患者は取扱はもうこれくらゐで澤山であるとし、誰か好きな人を擇んでそれと同棲してゐればこれからはずん〴〵よくなつて行くと考へるやうになる。もし何か事があると直ぐその醫者に來て貰はなくてはならないやうな甚だしい危險さへ伴はないならば、かう云ふ結果もまた結構と申すべきだらう。

理想我を知ることに依つて我々には群集心理への理解の重要な道が開かれる。この理想は個人的部分以外に社會的の部分を具へてゐる。それは或る家族、或る階級、或る國民の共通理想でもある。それはナルチスス的リビドー以外に、多量の同性愛的リビドーを、或る人物に寄せてゐる。そこでこのリビドーがこの方途で自我的に歸つて來る。この理想が實現されず滿足が得られないと、同性愛的リ

ビドーは行き場がなくなり、これが變じて罪惡意識（社會的强迫）となる。罪惡意識は本來兩親に罰せられることの恐怖であり、更に正しく云へば、彼等から愛せられなくなることの恐怖である。（一）後になつて同時代者、同鄕者、仲間などの漠たる大衆が、兩親の代りになる。妄想症が自我の不健全、卽ち理想我の領域に於いて滿足を得られないことに屢々源因してゐることは、かくて甚だ理解し易いことゝなつた。また理想構成と昇華とが理想我に於いて一致すること、知力喪失症に於いて昇華が崩壞し遂に理想が變形することも、自ら理解し易いことになつた。

註（一）この邊の論旨に關しては本全集第三卷七四―八三頁參照。（譯者）

分析戀愛論終

昭和七年五月一日印刷
昭和七年五月五日發行

フロイド精神分析學全集
（分析戀愛論）

定價壹圓八拾錢

譯者　大槻憲二
發行者　和田利彥
東京市日本橋區通三丁目八番地
印刷者　吉原良三
東京市牛込區早稻田鶴卷町一〇七
印刷所　株式會社康文社印刷所
東京市牛込區早稻田鶴卷町一〇七

發行所
東京市日本橋區通三丁目八番地
春陽堂
振替東京一六一七番・電話日本橋五一番

フロイド精神分析學全集

（第四卷）　快不快原則を超えて　・定價　一圓五十錢・　・送料　十二錢・　對馬完治譯

一、快不快原則を超えて、第一章以下第七章まで
二、强迫神經症の一例　一、臨床記錄の抽出（a治療の開始、b小兒の性感、c大强迫恐怖、d治療に誘導すること、e强迫觀念とその說明、f强迫神經症の起因、g父性コムプレクス及び鼠の觀念の解除）二、理論（a强迫形成の或る一般的特性、b强迫神經症の或る心理的特性、c强迫神經症の本能的生活及び强迫と疑念との根源）
附錄　快不快原則に關する譯者の解說

（第五卷）　性慾論・禁制論　・定價　一圓七十錢・　・送料　十二錢・　矢部八重吉譯

原著者肖像及び筆蹟
一、性慾に關する三論文　第一論文　性の錯誤（第一章性的對象に關する變態、同性愛、性的對象としての性的未熟者及び動物、第二章性目的に關する變態、解剖的違反、豫備的性目的の定着、第三章あらゆる變態に一般的なもの、第四章神經症患者の性本能、第五章部分本能と性的帶域、第六章神經症患者に於いて性的變態が外見的には目立つ所以の說明、第七章幼兒性感について）第二論文　幼兒の性感（幼兒時代の性的潜在期間とその中絕、幼兒性感の顯現、幼兒性感の性目的、性的顯現としての自慰、幼兒の性研究、性組織發達の諸段階、幼兒性感の源泉）第三論文　思春期に於ける性感の變化（性器帶域の優越化と豫備快感、性的亢奮の問題、リビドー說、男女の別、對象發見）論旨要約
二、禁制と徵候と杞憂　第一章以下第十一章まで
三、附錄　フロイド先生會見記（譯者）

本全集第六巻『分析藝術論』正誤表

頁數	行數	誤	正
一一	八	Aestaetik	Aesthetik
一三九	六	重要	重點
一六六	一三	腔	膣
一六八	一〇	或に	或は
一九九	一〇	淨福する	淨福なる
二〇四	九	かゞ、分るが	かゞ分るが、
二一六	一二	「クート」	「グート」
二一七	一三	サンクスリット	サンスクリット
二二三	一三	チエスタ・ロマノルム	ヂエスタ・ロマノルム
二二六	五	アペレーユス Apelejus	アプレーユス Apulejus
二三八	九	アペレーユス	アプレーユス
二四九	五	ミケルアンヂロ	ミケルアンヂエロ
二五〇	七	Bnrckhardt	Burckhardt
二八一	一〇	實際	空隙
〃	〃	多少	多分
三〇八	一〇	unhem	unheim
三一三	一三	Doppelgänger	Doppelgänger

フロイド精神分析學全集

分析戀愛論

大槻憲二譯

精神分析學研究所

春陽堂

精神分析學

分析戀愛論

大槻憲二譯

精神分析學研究所